

日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第10集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第十集)

—第十九回学生青年合宿教室(霧島)の記録より—

は し が き

一九七四年といふ年は、近来稀に見る国際政局激動の年であった。三月にはイギリスで政変があり、ウィルソン労働党政権の誕生を見たとはいへ、過半数を制する安定勢力とはなり得なかった。フランスではボンピドー大統領の死に伴ふ保革対決の大統領選挙が行はれ、保守のジスカールデスタン氏が辛うじて勝利を占めたが、社共連合との差は五一%対四九%といふきほどの激戦だった。この大統領選挙の行はれた五月には、西ドイツで親ソ政策を推進してゐたブランド首相が突如辞任した。側近の秘書が、東独のスパイであるといふ驚くべき事実が発覚したからである。ヨーロッパは石油ショックもからんで、揺れに揺れた一年だったといふべきであらう。

八月、ウォーターゲート事件以来混迷を続けてゐたアメリカの政局は、ニクソン辞任といふ最悪の事態に追ひこまれた。デモクラシー神話のシンボルともいふべき元首を、自らの手で追放しなければならなかった悲劇の深刻さが想像されるのである。そして、十一月二十六日、金脈問題によって田中政権はあっけなく崩壊した。インフレと、三菱重工爆破事件に象徴されるやうな極度の精神的荒廃を残して。

自由社会が、崩壊の危機を孕んで激動を続けたのに比して、共産圏は一応平穏であったかに見える。しかし、内実は必ずしもさうではない。二月十三日「収容所群島」等一連の作品で、

ソビエト体制そのものの暗黒面を告発し続けてゐた作家ソルジェニチンは、市民権を剝奪され、国外追放された。その決定は憲法に規定された司法組織を通じてではなく、最高幹部会令といふ、超憲法的強制力の発動によるものであった。社会主義権力といふものの実体を世界の世論の前にさらした象徴的な事件であつた。

一方、中国では本年一月に一九六四年以来十年ぶりで第四期全国人民代表大会が開かれ、新憲法が発表された。その第一条の国家の性格の規定には「労働者階級の指導する労働者階級を基礎とするプロレタリア階級独裁の社会主義国家」と明記されてある。

国家権力の正統性の根拠は、自由主義国家においては「民意」である。多くの問題を孕むとは言へ、民意による政権交替の可能性は蔽として存在してゐる。然らば、社会主義国家の権力の正統性の根拠はどこにあるのであらうか。バートラム・D・ウルフのいふ、レーニンの四つの手品と呼ばれる一片の論理である。すなはち、プロレタリア階級は全人民の代表である、前衛党はプロレタリア階級の代表である、党機関は前衛党の代表である、党指導者は党機関の代表であるといふ論理である。この論理の糸をつないで行けば、党指導者が全人民の意思の代表者といふことになる。権力者の意思はすべての法の上に君臨する。社会主義国家の権力を支へてゐるものは、かういふ論理の詐術と、秘密警察と軍隊といふ強大な物理力である。大新聞の新憲法讚美の論調は、まことに異常な感覚としかいいやうがない。

今や自由主義諸国は、国家が個人の価値観の問題に介入しないこと、つまり価値の多元性の容認といふ原則と、国家の有機的統一といふ相矛盾する問題を、どのやうに両立させて行くかといふ困難な課題の解決を迫られてゐる。そして、この問題は単に政治の次元でのみ解決できるものではなく、深く文化や人間観にかかはって来るものである。一人一人の価値観がどのやうに多様であらうと、そこに普遍的道德への確信や、共通の文化的伝統に対する畏敬の念が存在しなければ共同体の存立はあり得ないからである。

国際収支が記録的な赤字となり、GNPはマイナス成長を示し始めた。日本人が、物の獲得のために、全エネルギーを傾注した一つの時代ははっきり終つたのである。われわれの合宿教室のいとなみも、かういふ時代の混乱に対するやむにやまれぬ思ひに発したものである。われわれは、日本の青年が、大衆社会の果しない風化現象の中での解体を、拱手して傍観するほど怯懦ではないことを信じたい。

終りに、講義要旨の掲載をお許し頂いたただけでなく、御多忙な中を、心をこめて訂正、御加筆下さった小林、木内両先生に深甚の感謝を申し上げる次第である。

昭和五十年三月

目次

はしがき

一、学問と人生

人生・学問・祖国……………鹿兒島大学教授 川井修治……………5

—合宿教室のめざすもの—

イデオロギーに勝るもの……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………27

—心ことば—

感ずべきことあたりて感ずるところ……………

—他と共なる生—……………福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎……………53

一、講義

新しい世界と日本文化……………世界経済調査会理事長 木内信胤……………75

信ずることと知ること……………文芸評論家 小林秀雄……………111

「日本のいのち」の人類史的意義……………

……………教育文化研究所所長・文博 戸田義雄……………141

一、輪読と短歌創作

輪読の意味……………亜細亜大学教授 夜久正雄……………175

―黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と

日本文化創業」について―

短歌創作について……………九州大学循環器内科医師 小柳左門……………195

一、青年研究発表

学生生活と社会生活をむすぶもの……………

……………東洋工業株式会社発動機部勤務 久々宮 章……………215

歴史教育について……………福岡県立三池高等学校講師 志賀建一郎……………227

学校教育の現場に入って思ふこと……………

……………神奈川県立新城高等学校教諭 山内健生……………239

第十九回「合宿教室」のあらまし……………

(附)合宿歌集 西南学院大学商学部 四年 占部賢志……………253

あとがき

△国民文化研究会関係図書▽

■ 学問と人生

人生・学問・祖国

——合宿教室のめざすもの——

川井修治



- 一、個我への迷執を去って、永遠の生命の流れに身を投じよう
- 二、祖国への愛と信を回復しよう
- 三、学問の正しい筋道とは何か？
- 四、マルクス主義の偏曲性
- 五、祖国の危機に真剣に対処しよう

私の講義は合宿教室全体の導入の部分に当るもので、そのためには何か特定のテーマについて詳しく論ずるよりも、一般性のあるテーマについて、広く浅く触れて行くのが本筋であらうと思ひます。演題は『人生・学問・祖国』となつてゐますが、これは私がここで急に思ひついたものではなく、この合宿教室年来の合言葉と云ふか、伝統的な努力目標となつてゐるものです。従つてこれについて若干の解説を試みる事が、副題の『合宿教室のめざすもの』をカバーすることになると思ふのです。

ただ、「合宿教室のめざすもの」などと云ふと、何か参加者諸君の思考や発言に枠をはめるのではないか、と受け取られる人があるかも知れません。が、それは完全に誤解です。私共は皆さんが今後の班別討論やブロック別討論で、生地のままを出して下さるやう期待します。さうでなくては本物は現はれません。ただ心配なのは、各自が自分の興味のある話題を勝手気儘に持ち出して来た場合、例へば自分は経済学に興味があるから経済の話、或ひは宗教の話だの恋愛論だのと随意に持ち出して来ると、それこそきりがないやうになつてしまひます。そこにはやはり共通の基調が必要なのであつて、そのやうなものとして、私は「人生・学問・祖国」の三つをとり上げようと思ふのです。

平たく申しますと、第一に人生と云ふのは、我々のかけがへのない人生を真剣に、誠実に考へて行かうといふことです。第二に学問ですが、今の大学で行なはれてゐる一般の学問にはどうも何か抜けてゐるものがあるやうです——これは私の主観だけではなく、参加者のアンケートを見ると、意外に多くの人が今の大学の学問には満たされないものがあると言つてゐます——。それでは学問の正しい筋道とは、一体どのやうなものだらうか……これが第二です。第三に祖国を挙げましたのは、我々が運命的に担つてゐるこの祖国日本が、今や各種の難問を背負はされてゐる。我々は微力ではあるけれども、力を合はせて祖国を支へて行かうではないか、といふことです。少くともこの三つを、諸君の切磋琢磨の基調に置いてほしい。経済の話でも、宗教や芸術の話でも結構ですが、あくまでこの基調に付随するものとして取りあげてほしいといふのが私共の念願なのです。

一、個我への迷執を去って、永遠の生命の流れに身を投じよう

人間にはもともと個人我Ⅱエゴといふものがあり、誰しもがその個我への執着を持つてゐることは、我々の日常の経験からもよく知られるところです。しかし氣狂ひのやうに「おれが、おれが」と個我を主張する態度は、はたから見ても決して氣持のいいものではありません



ん。このやうな個我への迷執を去らなければ、本当の人生は見えて来ないと私は言ひたいのです。よく考へてほしいことは、個人の生命などといふものは、まことにはかないものに過ぎないといふことです。水の泡のやうに頼りない、心細いものでしかありません。人生七〇年と言ひますが、それは平穩無事に生きた場合のことで、途中で一度事故に遇へば、それで一卷の終りになってしまひます。仮に七〇年生きたとしても、悠久の時間の流れの前には、ほんの一瞬間にしか過ぎないでせう。

この短い人生において、個人が自分の独力でやれることは、いかにあくせくしても、多寡の知れたものです。金銭や財富、名譽や權勢を血眼になつて追ひ求めてみても、報はれるものは果して何なのでせうか。天才ならば偉大なこと、永遠性のある功業を樹てることができると諸君は言ふかも知れませんが、天才の偉

業ですらも、所詮は空しいものでしかないものやうです。私は近頃、大学での講義の必要からナポレオン時代史を読み返してみたのですが、このナポレオンはまさに不世出の天才と言つてもいいでせう。多分に幸運に恵まれたこともありませんが、彼の絶頂期における権勢はまことに瞠目に値します。彼が手中に収めた領国並びに勢力範囲は、イギリスを除いて、西欧・中欧の略ぼ全域に及び、東欧のロシアやトルコすら一時は彼の鼻息を伺はざるを得なかつたといふから、今日のECどころではありません。ヨーロッパの殆んど全域が一人の皇帝ナポレオンの膝下にひれ伏したといふことになるのです。ところがどうでせう、その後の推移は……。御承知のやうにスペイン征服の蹉跌、ロシア遠征失敗と転落の一途を辿るわけですが、絶頂期が華々しかっただけに一層空しさが感ぜられます。傾いた船から遁れ出る鼠のように、多くの知己や部下が彼を見棄て、裏切つてしまふのです。英雄一世の功業も所詮は空しいものに過ぎないことを、ナポレオンの例ほど雄弁に物語るものはありません。

さういふわけで、天才とてもはかない個人の生命の限界を免れ得ないのです。かかるが故に真面目に生きようとする人間は、個人の限界を超えた何か永遠なるもの、高貴なるものを求めて止まないのです。その対象としては、普通の場合は宗教が挙げられるでせう。特殊の場合には、芸術や科学的研究がこれに代ることもあるでせう。いづれにしても、自分一個をむやみに押し出すのではなく、自分自身よりもっと大きな、もっと高次なものに自分を投げ入れて行

く……、さういふ生き方が貴いのであり、さういふ貴いものを求めようとする気持が、人間には本来の性として備はつてゐると思ふのです。

しかるに、今日わが国に遍満してゐる風潮は、まるでその逆を行くもののやうです。云はばエゴイズムの全盛と言つていいでせう。自制・克己・奉仕・献身といった言葉は、今日の日本人の字引きから全く姿を消したと言つていいでせう。自分の利害の打算と欲望の充足に、国全体が浮足立つてゐるやうな感じがしてなりません。昨年の石油危機に際してそれが端的に現はれました。石油値上げに便乗した企業者エゴ、買物に殺到する消費者エゴ、それらのエゴの葛藤が一時期の日本経済を狂乱状態に陥れたではありませんか。その他毎年スケジュール闘争に狂奔する組合エゴ、事あるごとに集団で騒ぎをおこす住民エゴ、農協や医師会の横車から政党の派閥エゴに至るまで、まるでエゴイズム全盛の今の世の中です。しかも重大なことは、戦後の憲法は個人の権利を至上と見做すやうに解釈されるのが例となつてをり、戦後の教育もまた個人の尊重をもつて所謂民主教育の支柱としてゐるところから、このやうなエゴイズム全盛の風潮を制御する方法を持たないといふことです。一体このやうなことでもいいのでせうか。

世界的な数学者であると共に、すぐれた思想家でもある岡潔先生は、その多くの著書の中で「個我より大我（真我）へ」といふことを主張されてゐます。個我といふのは金銭とか名声とか権勢とか、或ひは一身の幸福といふやうな次元の低いものを意味します。さういふものに拘

泥してゐては駄目なのであつて、心眼を磨ぎすまし、悟りを開いて大いなる我に到達せよと言はれるのです。それは一見卑小な自我を否定することになりますが、さうした否定によって我そのものは更に大きく飛躍し、真の我を実現することになると、岡先生は独特の仏教哲学に基づいて説かれるのです。このやうな説き方は洋の東西を問ひません。今日なほ数億の信者を擁する回教の聖典コーランにも

「この世ははかない惑はしにすぎない。……この世は一つの戯れであり、いちやつきにすぎない。華美や名声欲や、富と子供の増殖をはかる欲望は、雨に養はれ、生育によって農夫をよろこばせはするが、そのあとでは枯れ凋み、つひには干からびた茎になる植物のやうなものである。」とあります。

仏教や回教などは古い考へで、現代の我々には通用しないなどと思ふ人があるなら、次のヤスパースの言葉を味読してほしいものです。

「生命の神聖視は、生命そのものを絶対唯一の意味あるものと見なすのは、真実なものではなく、偽りのもので、生命のあり方自体にとっては有害である。……人間はおのれの任務をやり遂げることよつてのみ、自分の生命を聖化することができる。」

これは戦後間もない頃、世界が原子爆弾の出現に恐れおののき、絶望と自暴自棄の風潮がみ

なぎつてゐた時、『原爆と人間の未来』といふ論説でヤスパースが言った言葉です。有限の肉体的生命に至上価値を置いてはならない。それよりも人間は自分に課せられた本来の任務に忠実に、こつこつと倦むことなくこれを果すことによって、真の価値を実現することができると説いたものなのです。

このやうに先哲の言葉は、洋の東西を問はず、時の古今を問はず、我々の志のあり方についてまるで同じことを示唆してゐるのです。ヤスパースの言った「おのれの任務」とは、自分にとって一体何なのか……、ここに思ひをひそめていただきたい。それが区々たる個我にまつはるものではなく、もっと高い、永遠の生命の流れに連なるものであることは、言はずとも明らかでせう。

二、祖国への愛と信を回復しよう

先程、「永遠の生命の流れ」と言ひ、それが我々にとって何を意味するかを考へてほしい、と申しました。これに対して、それは宗教であると答へる人もありませうし、或ひは芸術や科学であると答へる人もあるかも知れませんが、成程、俗世を超越して宗門の確立・普及に身を投じた人は数多くありますし、芸術的創作のために心血をそそいだ人も、科学的研究のために野

口英世博士のやうに一身を捧げた人もありました。その意味では、これらの先人達が個我への迷執を去り、永遠の生命の流れに身を投じた人達であることを、私も疑ひません。

だがしかし普遍的に言つて、さうした高貴な生き方ができるのは、何も宗教や芸術・科学などの特殊の分野に限られるとは、私は思ひません。宗教に縁のない人であっても、芸術や科学の技能や知識のない人であっても、つまり普通一般の人であっても十分に永遠の生命を確認しつつ生きることができると私は思ふのです。その場合の永遠の生命とは、私をして言はしむれば、民族の悠久の歴史であると思ひます。我々はそれぞれの生き方をし、ある限られた時間を生き且つ死んで行きますが、たとへいかなる生き方をしようと、これすべて共に民族の歴史を形成する一齣となつてゐるのです。諸君は、自分は勝手に生きてゐるんだと言ふかも知れませんが、それは浅薄な錯覚なのであつて、歴史といふものはどんなに微細なものであつても、それをすべて例外なく広大な因果連関の中につつま込んでしまふものなのです。特に民族・国家の歴史は端的にさうなのです。諸君は意識するとしないと拘はらず、日本民族の一員として国家の営みの一部分を担つて生きてゐる、これは紛ふかたなき現実なのです。私がこのことを痛感させられたのは、シベリア抑留の二年間でした。明日知れぬ生命であつたけれども、最後まで日本人としての姿勢を崩すまいといふ一念が、あの言語に絶する虐待に堪へる力源となつたし、それ以来の私の生き方の基本になつたと、自ら思ふことです。

しかしこのやうに言ふと、戦後教育を受けて育つた諸君には少なからぬ抵抗があるかも知れません。何故なら戦後教育は、戦前・戦中に対するリアクションとして、我々の祖国の歴史を悪しざまに軽蔑し、国家などは一種の権力機構に過ぎないと教へて来ました。国への忠誠などは権力への屈従・迎合だとして、むしろそれへの抵抗に力点を置いて教へて来ました。しかし私が先程言つた「民族・国家」とは、決して単なる権力機構としてのそれではないのです。朔風すさぶシベリアの凍原において、私を支へてくれたものは、私の内心を捉へて離さぬ魂のふるさととしての国家であり、民族であつたのです。さう言へば、一昨年の導入講義を担当された山田さんが、「外なる国家」と「内なる国家」について言及されてゐたことを想ひ出します。国家にはもとより権力機構としての「外なる国家」の側面もあるが、より直接に我々の生にかかはつて来るのは、命であり、仰ぐべき価値、献身の対象としての「内なる国家」である……と。具眼の士は皆同じことを言つてゐます。例へばドイツの哲学者フィヒテです。征服者ナポレオン軍の鉄蹄とどろくベルリンにおいて、彼が「ドイツ国民に告ぐ」といふ烈々たる愛国の演説を行なつたことは、あまりにも有名ですが、その中で次のやうに言つてゐます。

「地上における永遠の担ひ手としての、そして、この世で永遠なりうるものとしての民族と祖国は、ふつうに使はれる意味での国家、社会秩序といったものをはるかに超えた存在である」と。

フィヒテにとっては、「民族・祖国」とは、天上のゴッドにも比すべき、そのゴッドに代るものとして地上における永遠性を担ふものであったのです。この呼びかけに応じて、多くのドイツの青年学生達がナポレオンの圧制をはねのける『解放戦争』にはせ参じ（フィヒテ夫妻も従軍、病死）、更にその時のドイツ民族魂の燃焼が、十九世紀を通してドイツの歴史の方向を決定する「自由と統一」運動に結実したのでした。

ひるがへって我が日本の現状はどうでせうか。唯一度の敗戦に動転して民族の魂を喪失し、利欲の虜となつて右往左往してゐるのが実情ではありませんか。今こそまやかしの眼隠をとり去るべきです。先にも言ひましたやうに、祖国は、我々の「内なる国家」は、我々の魂のふるさとであり、我々の生のよすがなのです。現に我々は、肉体的に言へば、量り知れぬ昔からの多くの祖先達の血脈をひいてこの世に生れて来た民族の子ではありませんか。精神的に言へば、言語や習俗等多彩な祖国の文化伝統を背に負ふて成長して来た国民の一人ではありませんか。そしてこのことは、未来永劫絶ち切ることでできない我々の運命そのものではありませんか。さうだとすれば、我々の母なる祖国に愛着を持たないといふ法はありません。我々の肉体・精神を生み育んでくれた祖国に信愛の情を持つといふことが、何で右翼でありませうか。何で全体主義であり、権力主義でありませうか。愛着を持たないといふ方こそ、厳然たる歴史的事実に背を向けた、背理そのものの姿ではないでせうか。

祖国の歴史のすべてが、栄光と至福の歴史であったとは、私も申しません。人間の営む歴史である以上、善因善果もあれば悪因悪果もあり、多くの欠陥のあることを否定はしません。けれども先刻「母なる祖国」と言ひましたが、仮に皆さんのお母さんが種々な意味で欠点のある人だと仮定した場合、皆さんは自分を産み育ててくれた母親を、欠点があるが故に軽蔑したり、見棄てたりされるでせうか。さうではないでせう。たとへ欠点のある母親であっても、心を尽くして仕へ、ある場合には心をこめて諫められるでせう。それが理窟を超えた人間らしい態度です。「母なる祖国」に対する場合も、全く同じです。歴史上の欠陥に真摯に反省すべきも、それをことさらとり上げて祖国に白眼を向けるのは、もっと大切なものを冒瀆することになります。善ければ善いなりに、悪ければ悪いなりに、信愛を尽くして変らないのが、祖国と我々とのつながりであると思ひます。当今の進歩的文化人と云はれる人達は、我々の祖国に対して必要以上に自虐的な感覚を持つ人々なのでせう。

このやうな祖国に対する侮蔑と憎悪の念が出て来るのは、結局祖国日本の文化伝統に対する無知からである、と私は思ひます。いや無知と言ふと失礼に当るかも知れませんが、個々の史実については、随分詳しく知ってゐる人もありますから……。けれども先程言った「母なる祖国」に対する「きざざる愛着」といふ基本姿勢を欠いたのでは、いくら個別的な知識があつても、正しい知見とは云ひ難いと思ひます。そのやうな意味で敢へて無知と言つたのですが、これら進

歩的文化人の口舌にあき足らなく思ふ人は、どうか祖国日本の文化伝統に対する真の知見を開いてほしいと思ひます。合宿教室にはそのために古典の輪読や、和歌の創作の日程も組んであるのです。単に観念的ではなく、具体的・体験的に祖国の文化伝統に触れてみていただきたい。そしてそこに生まれるであらう感銘を、思考の中軸に据ゑてもらひたいと念願します。

三、学問の正しい筋道とは何か？

この問題については、西洋流の専門分化した学問論よりも、東洋流の総合的な学問観を手引きにして考へた方が、より有益であると思ひます。と言ふのは、最近の西洋流の学問論は非常に専門分化した個別科学のそれぞれの方法論がクローズアップされ、学問全体をどう捉へるかといふやうな立論は色褪せてしまつてゐます。これに比して東洋流の学問観は、単にそれぞれの対象の分析による知識の体系の樹立といった域を超えて、例へば「道」と云ひますが、人間の生き方そのものに体験的・実践的に取り組んだ点に特徴があります。端的に言へば、西洋流の学問は事物についての知識の探求であるのに対し、東洋流のそれは自分自身の生き方の探求であると言つていいでせう。私がここで論じようとする学問の筋道とは、無論後者の意味合ひにおいてなのです。

吉田松陰の名は、幕末の志士として諸君も御存知だと思ひますが、彼は痛烈な実践家であると共に、すぐれた学者でもありました。松陰の書いた『講孟余話』の中に、学問を論じた箇処として次のやうな一文があります。

「学問の術固より端緒多し。訓詁の学あり。詞章の学あり、考拠の学あり。老仏の学あり。是れを皆曲学とす。……吾が党の志とする義理經濟の正学と異なり。」(梁惠王下首章)

簡単に意味を言ふと、学問のやり方には当然にいろいろな入口がある。例へば經典の註釈をこととする学問もあれば、詩や文章を練る学問もある。言語学的な考証の学もあれば、道教や仏教の冥想的な学問もある。しかしこれらは皆曲学に誤まれる学問である。我々がめざすのは「義理經濟の学」、つまり人間の正しい生き方を明らかにし、国をととのへ、民をすくふ学問であり、これと明らかに異つてゐる、といふ意味になるでせう。これを要約すると、いかに知識や理論に詳しく、豊かな情感の流露する学問であっても、実人生を離れた抽象概念の学問や、耽美・冥想の学問では誤つた曲学となる。真に正しい学問とは、人として踏むべき道を確立し、国の秩序を正しく保ち、国民生活を豊かにする学問でなくてはならぬと云ふに尽きるでせう。この正学と曲学の弁別が、山鹿素行の「実学」と「文字の学」との區別に相応するものであることは、改めて言ふまでもないでせう。

そしてこの正学を求めゝる気持がいかに切実であるべきかについて、次のやうに言つてゐるま

す。すなはち

「樂しむに天下を以てし、憂ふるに天下を以てすと、是れ聖学の骨子なり。……もし天下を以て任とせんならば如何。先づ一心を正し、人倫の重きを思ひ、皇国の尊きを思ひ、夷狄の禍を思ひ、事につけ類に触れて切磋講究し、死に至る迄他念なく、片言隻語も是れを離るることなく、縦令幽囚に死すと雖も、天下後世必ず吾が志を継ぎ成すものあらん。是れ聖人の学と志なり。」(梁惠王下四章)

実に切々として胸を打つ言葉です。寝ても覚めても天下国家のことを思ふのでなければ、正学(＝聖学)とは言へないと云ふのです。しかも天下のことを思ふと言っても、主観的に思ふだけでは駄目なのであって、先づ自分自身を正すことから始めて、次に手の届く周囲に思ひを及ぼし、いかなる苦難に逢ふともこの学問の姿勢を崩してはならない、と云ふのです。「縦令幽囚に云々」と言ったあたりは、松陰自身がこの文を書いた時に獄中であつたことと思ひ合はせて、決して架空の覚悟ではなかつたことを偲ばせます。年令三〇才で刑死した松陰は、所謂老熟した学者ではなかつたのですが、この若々しく純粹で犀利な言葉は、学問のあり方の真髓をついて余すところがないと思はれます。

さて、今の大学で一般に行なはれてゐる学問は、この松陰の気魄のこもつた言葉と較べてみて、果してどうでせうか。松陰によれば、正学と曲学とのけじめは、学問をする志、その志の

向け方がありました。「義理経済の学」と云ひ、「天下に任ずる学」と云ひ、それは要するに自らを正し、国を思ひ、同胞を思ふという確然たる方向づけを持った志に、貫通された学問のことでした。今諸君が講義などで聴く所謂学問には、果してこのやうな志が脈打つてゐるでせうか。真に教育者の人格を持つ教官ならば、そのような講義をされることでせう。だが、私の関する限りでは、一般は遺憾ながらさうでないのが実情のやうです。

今の大学の所謂学問は、大体において科学(サイエンス)を教授するだけに止つてゐる、と私は思ひます。科学といふのは、前にも申しましたやうに、事物に関する客観的知識なので、私から、それ自体は云はば学問の材料を提供するものに過ぎません。例へばある社会事象を分析して得られた統計資料は、まさしく科学の所産にちがひありませんが、それ自身は学問をする志と何の關係もありません。或ひはまた自然科学の実験で得られた結果が、研究者の生き方と何の關係があるのでせうか。科学はそのやうに、素材を提供するといふ意味では学問の一部を形成しますが、あくまで全部ではありません。学問全体を完結させるためには、科学によつて得られた客観的知識のみに止まらず、その個別的な客観的知識を駆使して人生に役立てようとする、より高次の思考が、何としても必要になって来ます。このより高次の思考が、すなはち志としての学問であつて、これを欠き、科学の客観的知識の伝達の域に止まつてゐる限り、今の大学の所謂学問は学問として完全ではないと言はざるを得ません。諸君が今の大学の所謂学

間に満たされぬものを感じるの、総じてこの点にあるのではないでせうか。諸君は科学上のあれこれの客観的知識をうんとこき詰め込まれる。それでゐてこれらの客観的知識を綜合し、人生に密着させるやうな精神的訓練は何一つ受けることがない。これでは個別的な知識は豊富であるけれども、いざ君自身は何を考へ何を意志するのかと問へば、まるでブランクだといふ学生が一般ではないでせうか。(極論すれば、今の大学は一種の精神的不具者を大量に輩出してゐる、と言つてもいいでせう。)

これではいけないのです。こんな勿体ないことがあつていいはずはありません。吉田松陰の「正学」の主張は、今の大学の学問上の欠陥に対し、鋭い示唆を含んでゐると思ひます。どうかその痛烈な言葉を手がかりにして、諸君自身の志のあり方を摸索し、練り固めて行つてほしいと思ひます。

四、マルクス主義の偏曲性

あます時間が少なくなつてしまつたので、簡単にしか触れられませんが、前章との関連から言ふならば、日本の学界に今日なほ蟠踞してゐるマルクス主義は概念思弁と抽象理論のサンプルだ、と言つていいかと思ひます。勿論マルクスはマルクスなりに、彼の生きた時世に対して痛

切な志を持ったに違ひありませんが、それを一つのイズムとして理論化する場合に、啓蒙思想の余流たるにふさはしく、きはめて抽象的な概念理論の枠づけに頼ったのでした。所謂唯物史観がそれで、それによれば人類の歴史は物質の運動法則によって決定的に支配される、といふことになります。もう少し詳しく言へば、人類の歴史といふものは、物質的生産力の発展と生産関係との均衡↓（矛盾の発生による）攪乱↓（社会革命といふ形の）爆発↓そして再均衡といふパターンの繰返しによって、段階的に発展して行くと云ふのです。そして最後の階級社会である資本主義社会にあっては、生産力は未曾有の大きさにまで発達してゐるので、階級闘争も最も大規模且つ熾烈に闘はれ、やがて必然的に到来する社会主義革命により、階級社会そのものが廃絶されて、無階級無搾取の社会が実現すると予言したのでした。

この唯物史観の理論構成はさすがに精緻なもので、もし仮に人類の歴史は人間の意志とは無関係な物質によって構成され、物質の運動法則によって変化発展するといふ大前提が正しければ、間然するところのない理論であると私も思ひます。けれどもこの間然するところのないはずの理論が、その後の歴史の現実の上に理論通りの結果をもたらさなかつたことも、恐らく諸君は御承知のことです。実際資本主義の成熟した国に、必然的に社会主義革命が実現した例は、未だ一つもありません。逆に社会主義革命が実現したのは、例外なく中ないし後進国においてであり、しかもそれらの国々の実情は、無階級無搾取の天国と云ふにははるかに遠いこと

も、我々は知つてゐます。どうしてそのやうな誤差が生じたかといふことについて論及するには、もう時間もありませんので、詳しくは拙著『歴史と人生観』なり、その他類書を見て研究してほしいと思ひます。

ただ一つだけ言つて置きたいのは、先程述べた大前提そのものに誤りがある、つまり歴史の最有力なファクターとしての人間の精神の持つ役割を唯物史観がネグレクトした——唯物史観では、人間の精神は物質の様態の反映に過ぎないとされる——ことに、最大の誤りがあるといふことです。初期資本主義が深刻な社会問題を生み出したのは事実ですが、このやうな事態に敏感に反応し対処した人間の精神の側からの働らきかけが、資本主義のさまざまな修正・改革の方途を実現した。これによって、理論上は破局に至るはずの資本主義が見事な立ち直りを見せた、といふことを強調して置きたいと思ひます。

これだけでは無論、意を尽くせませんが、要するにマルクス主義は具体的な人間を除外し、物質にのみ偏倚した抽象理論にとちこもることによって、実人生を乖離して行つた一つの例証と見ていいかと思ひます。

五、祖国の危機に真剣に対処しよう

さて、今の日本の政治状態を一言にして言ひ表はすならば、残念ながら衆愚政治（モボクラ

シー）と言ふほかはないでせう。衆愚政治といふのは、国民大衆は自己及び集団の利を求めて相争ひ、為政者また大衆に阿つて、上下ともども国富を喰ひつぶして行くといった状態のことです。古代ギリシア・アテネの末期に、このやうな状態が典型的に出現したことは、諸君も御存知でせうが、当然のことにこれは亡国への途を辿ることになります。今の政府与党も、概して言つてこのおぞましい前例にびったりあてはまるやうです。野党側もいろいろと甘言を弄してはゐますけれども、結局は大衆を利益でもつてつり上げるといふ基本姿勢においては、大同小異であると云つていいでせう。このままで推移すれば、分裂と相剋はいよいよ昂進するばかりで、その結末は言はずとも明らかであるやうに思はれます。

ところで今の日本には、安閑としてをられない難問が踵を接して発生しつつあります。エネルギー・食糧等の資源窮迫もその一つでせう。経済成長鈍化の兆候もその一つです。加へて台湾を切り捨て、韓国と軋轢を生じつつある今日、国防の問題も依然として重大です。これらの難問はどれ一つとして、小手先の政策や擱み金の放出によって解決されるべくもないことは、言を俟ちません。いづれをとつてみても、国民全体の生き方・考へ方に決定的な転換を要請される問題であるのに、そのやうな高次元の方面のことは旧態依然、と云ふよりまるで無策放任の状態にあります。一体これでいいのでせうか。我々は一体何をなすべきでせうか。

ただ一つ言へることは、いかに困難な状態に立ち至つたとしても、我々にとって不可欠なこ

とは、国民的連帯感の確保といふことです。国民的結合さへ強固であれば、いかなる難局に逢着しても、乏しきを別ち合ふことによつて被害を最少限度にくひ止めることができるし、それはやがて起死回生の出発点ともなるでせう。この最も基本的な課題が、我々に課せられた至重至大の使命であることを、ここに確認しようではありませんか。合宿教室はその重大使命を感得するための、こよなき修練の場なのです。充分に心を開いて、国民的連帯のひな型をここ霧島の地に形造つて行かうではありませんか。

(鹿兒島大学教授)

イデオロギーに勝るもの

——心ことば——

小田村 寅二郎



日本人の言語感覚

「頭ことば」と「心ことば」

言葉と心

イデオロギーの固定性

イデオロギーと人生

リアリティに対する西欧と日本

天皇について——歴代天皇の御歌——

日本人の言語感覚

最初にお手許にさしあげましたレジュメにはひります前に、ことばの問題、特に日本人独得の言語感覚について少しお話し申し上げておきたいと思ひます。まづ身近かな例を挙げますと、英語では自分のことを、*I*、と言ひ、相手のことを、*you*、と言ふ。さらに、詳しく見てゆけばもっと沢山の言ひ方があるのかも存じませんが、一応はその二つの言ひ方で男も女も用を足してゐるやうであります。ところが日本では自分のことを言ふのにも相手のことを言ふのにも実にさまざまな言ひ方がある。男性の一人称には私、僕、俺、拙者、手前、我輩、相手に対しては、君、お前、貴様、あなた、貴殿などと言ふ。なぜそんな多くの言ひ方をするのか。それは付き合ふ相手によつて、それにふさはしいやうに自分や相手を呼ぶ呼び方が違つてくるからでせう。そのことを考へてゐると、日本に敬語が発達してきたのもなるほどと思はれるので、日本人は具体的に付き合ふ人間関係の現実といふものを非常に重んじてきたので、その状況にびたりするやうに会話を交はし、言葉を探し求めてきたと言へるのではないでせうか。日本人は常に事実関係を細心の注意を払つて見てきた。そしてその中に自分を自然な形で配置しようとしてきたのです。その場合あくまでも自然に、ぎこちなくないやうに自分を位置

づけてきた。日本人は大昔から美しい日本の大自然をこよなく愛してきたのですが、それは単に大自然だけでなく、人間自身もまた自然の姿の中におきたいといふ心配りがあつてのことだらうと思はれるのです。

ともかくこのやうに対人関係を重んじてさまざまなケースにびったりするやうな言葉を作り出したのは、いふまでもなく漢字が渡来したよりも遙かに以前の時期だったに違ひない。日本人はそのやうな沢山の言葉をすでに持つてゐた。だがこれを表現する文字を持つてはゐなかつた。その時、隣りの支那に大変すばらしい漢字が沢山用意されてゐることを知つた。そこで例へば「ちち」や「はは」といふ日本古来の言葉を表現する文字として、「父」や「母」といふ字を見つけ、それを確かめて行つたのでせう。だがそこで注目すべきことは、日本人が支那では「父」といふ字を「フ」と読むことを知つたはずですが、父といふ字を「フ」と読まず、それにあへて「チチ」といふ訓をつけたことなのです。それは日本人が漢字にひきずられないで、日本の言葉の読み方を何よりも大切にしたからだと理解する外にはないやうに思はれます。かうして古事記などはすべて漢字で書かれてゐますが、それは大和言葉で読まれてきた。かうして片仮名が生れ、平仮名が生れ、今日、私達は世界に類を見ない、「漢字仮名混り文」といふ表現をもつやうになつたのです。だがそれに達するまでにわれわれの祖先の言語感覚や言語を駆使する能力がいかに大きな働きをしたか、深く心をはせるべきではないでせうか。

「頭」と「心」と「身」

では本論にはひって参りますが、現在、よくみなが口にするのですが、世界を平和にするためには、今のやうに沢山の国に別れてゐるのではなく、世界が一つの政府をつくれればいいといふやうな主張がある。いかにももつともなやうにきこえますが、果してそれでいいのか。政府が一つになれば当然そこでは共通語として使用する言語を決めなければならぬ。とすれば常識で考へて日本語が共通語になることはあり得ないのですから、結局日本語は地方語としてしか存続を許されないことになるでせう。それでは一体日本人はどのやうに生きていけばいいのか、日本独自の文化は一体どうなるのでせうか、一国の文化とか日本人独自の感覚といふものは、「言葉」をぬきにしてはあり得ないはずです。それを思へば、世界政府の成立が日本文化自体の存否を問はれる大変な問題につながつてくることは自明のことではないでせうか。その重大さに気付かないで単純な論理で世界政府を構想するなどとは全く許せないことだと言はなければなりません。

このやうに、現在は世界を全体とし国家を部分として考へ、世界国家Ⅱ平和の実現といふやうに理路整然と考へをすすめてゆくやうな発想法が盛んに行はれてゐる。だがそれとは違つ

て、一人一人が実際に生きていきながら、そこでさまざまに心を働かせて、現実的に、具体的に日本の運命を考へていくといふも一つの方があることにも心をとどめていただきたいのです。その二つの違ひを端的に申しますなら前者は頭がよく働くといふこと、後者は心がよく働くといふことになりませう。すなはち頭は物を理解し、記憶し、整理し、論理づけもするし、理屈づけもする。ではそれに対して心は何をするのかといふと、あまり正確な表現ではありませんが、物を感じるといふ働きをやってよからうかと思ひます。

このやうに二つに分けることが許されるとすれば、私は心の働きの中から生まれた言葉を、昔から用ひられてきた「心ことば」といふ言ひ方で呼んでみたいと思ふのです。これに対して心の作動を棚上げにしたままで、頭の働きの結果だけを言葉にしたもの、それは「頭ことば」と言へるのではないでせうか。先程申しました世界国家Ⅱ平和の実現といふやうな言葉がそれにあたるのです。確かに頭の働きの中では、その論理は整然と構成されるのですが、実際にその国家が出来たときに果して一人の人間として心豊かに生きることが出来るだらうかと、その時の気持ちになって考へてゆけば、その論理をそのまま素通りさせるわけにはいかなくなるはずで、そのやうな言葉を私は「頭ことば」と呼ぶのです。

さう考へてみると現在学園の中で、あるひは自治会の大会で、組合の集会で議論されてゐる言葉はすべてがこの「頭ことば」なので、みんながその「頭ことば」で相手をやっつけようとし

てゐるといふことにお気付きになると思ふ。そこでは相手の心を感じるといふ様な心の働きは全く見られないと言つても過言ではないと思ひます。

江戸時代、土佐藩の国学者に鹿持雅澄といふ万葉集を研究された方がをられますが、その著「万葉集古義」の中に大変面白い言葉がある。

それは「口さきの深さくらべ」といふのです。雅澄は柿本人麻呂の「丈夫と思へる我もしきたへの衣の袖は通りてぬれぬ」といふ歌について「そのまことの心のあるがままをつくるはず、丈夫と思へる吾なれど、なほしのびあへず、袖とほるばかりに泣きぬらしつといへるをば、たれかはあはれと思はざらむ」と深い同情を示したあと、古今集の「あかずして別るゝ袖の白玉は君が形見とつゝみてぞゆく」といふ歌を「心



ふかきに似てあさきところあり」と評し、それはこの歌に誇張があり、結局は「口さきの深さくらべ」に終つてゐるからだといふのです。口さきだけで、いかに自分が悲しいかといふことを、これでもかこれでもかと表現しようとする、それを雅澄は「口さきの深さくらべ」といふのです。全身からものを言ふのではなく、口さきだけで相手を言ひ負かす、或ひは相手を感じさせる、さういふことに時間と労力を費すのがいかにつまらないかといふ指摘なので、この言葉は現代にも生きてゐると思はれます。

言葉と心

同じ江戸時代、八代將軍吉宗の子供の田安宗武といふ人が「歌体約言」といふ書物の中で、歌をつくる時の心の動きについて次のやうに書いてをります。

「心にうかみいづる事を、そのままにえ言ひ難ければ、詞のために心を変へて、つひにうかびたることにいたる」

すなはち心に浮かんだことをそのままの言葉にして相手に伝へるのは大変難しいので、つい自分の知つてゐる簡単な言葉で表現してしまふ、誰かが使つてゐる言葉をかりてきて自分の言葉として伝へてしまふ。さうすると今度はその言葉の意味するものに自分を合はせていかなけ

ればいけないやうになる。さうしなければ嘘を言ったことになるからです。すなはち「詞のためには心をかへる」のです。かうして人の心は「うかびたること」(浮薄なこと)になつてしまふといふのです。これも又現代の世相の中でわれわれが常に体験してゐることではないでせうか。

例へばデモの行列で行ふシュプレヒコールを思ひ出してください。行列の最先端でリーダーが一つの政治的な主張を大きな声で叫ぶ、すると全員がその言葉をくりかへす、さういふことになりかへしているうちに、人々の心はそのシュプレヒコールの言葉の方にピッタリ合ふやうになつてゆくのです。かうしてデモに参加する前にはそれほど気持ちが決つてゐなかつたのに、シュプレヒコールをくりかへしてゐる中に、政府に対してはげしい敵意をいだくといふやうになる。「詞のために心をかへる」典型的な例ではないでせうか。そこでは心に感じるといふ作用は完全に停止してしまつてをり、頭の働きにすべてを委ねてしまつてゐる。そしてリーダーの発言を自分なりに判断し、納得するのではなく、ただその言葉のままに心がひきずられてゆくのです。これなどは人間の尊厳性を足蹴にしてゐる典型的な状況ではないかと思ふのです。しかしこのやうなことは日本だけではなく世界のどこでも行はれてゐるやうですが、もしさうだとすれば、それはどこの国民にとつても、民族の文化から見て、人間が最も低劣なところに落ちこんでゐる状況を示してゐると言へるのではないでせうか。そのことについて二五

○年前の一人の国学者が端的に指摘してくれてゐる。そのことに心をとどめていただきたいと思ふのです。

このことに関連して申し上げますが、一つの言葉がもつてゐる意味は、単に「頭」で理解するだけでなく、「心」を駆使して、その中にこめられてゐるものをつかみとらなければなりません。例へば明治の初め、札幌農学校で教鞭をとられたクラーク博士が、学校を去る時に、「少年よ大志をいだけ」といふ言葉を残したのは有名ですが、実はそのあとには「キリスト教において」といふ言葉がつづくのです。とすれば大志の「大」といふ言葉にこめられた意味は、小さな商人になるより大実業家になれとか、県会議員になるより国会議員になれといふ様なことではないので、もっと本質的な、宗教的な意味で使はれてゐるのです。言葉といふものは非常にむづかしいので、大といふ字が出てくればそれをすぐ小と対照させて量的に考へる人が多いのですが、そのやうな粗雑なことでは、クラーク博士の大志も単なる立身出世主義になつてしまふ。それではこの言葉のもつ真意は到底伝はりやうはないのです。このやうに一寸した言葉のほしほしにも心を働かせて、その意味をかみしめるやうにしていただきたいと思ひます。

イデオロギーの固定性

われわれは以上述べてきたやうな状況の中で生きてゐるわけですが、特に現在目立つこととして、われわれは大変なイデオロギーの氾濫の中に生きてゐるといふことです。資本主義、社会主義、共産主義はいふまでもなく、何かと言へば〇〇主義といふ言葉が唱へられてをります。では一体イデオロギーとは何か、それは人間の生活そのものにとつてどういふものでせうか。思ふにイデオロギーとは元来ある社会形態に対応する「觀念形態」を意味するのですが、一般には「ある人（または人々）が、ある時点で、ある事について、考へついたことを、その人（または人々）が、それを秩序立てて整理し、かつ論理的に書きあらはしたものである」といふ意味に使はれてゐるやうです。とすれば、その人（または人々）はその時点でその事についてかういふ考へに到達したといふところで思考を一時停止させる、さうしてそのことについての情感の作用、心の動きの作用を静止させて、そこでまとめあげたもの、それがイデオロギーだといふことになるのです。従つてイデオロギーはどうしても固定的な静止的な性質をもつやうになるし、それが教条化されるとそこに一つの枠組みが出来上つてくるのです。ところが人間は頭の働きのしろ、心の働きのしろ、生きてゐるかぎりそれを停止させたままであること

は不可能です。そのやうに絶えず動いてゐるのが人間であり、社会といふのがそのやうな人間によつて作られてゐるのであれば、その社会が○○主義といふ一つのイデオロギーによつて運用されていくといふことにはどうしてもならないはずです。

となると人々は、誰れかがまとめ上げて示してくれたイデオロギーなるものを駆使したり、活用したり、場合によつては否定することは出来ませんが、しかしある種のイデオロギーに身を捧げたり、生命をかけたりますといふことは、口ではそんなことを言つてゐる人々は沢山ゐるけれど、人間の眞実の姿から見れば、どうしてもそんなことはあり得ないと思ふのです。何故ならイデオロギーは動かない。停止したものです。人間は絶えず動いてゐる、その動いてゐる人間が、主義の中に自分を固定させることはあり得ない、「動」が「停」に従ひうるわけはないからです。だがそれはをかしい。現実には革マルのために「反帝と命をかけて戦ふ」といふやうに、学生同士のイデオロギーのゲバ騒ぎが各所に見られるではないかと反論する人があるかもしれない。しかしその場合も○○主義に殉ずるなどといふのは本当はおかしなことであつて、実のところ、さういふ人達は○○主義を引きずつてゐる或るリーダーの人物に共感し共鳴してその人と一緒ならどんなことでもやらうといふことになつてゐるのではないか。それが人間関係から見た眞実の姿ではないか、私にはさう思はれてならないのです。勿論その場合、リーダーとその部下の間に、その旗印である○○主義について、共通の理解があるに違ひない。しか

し生命をかける行動に出るといふ場合は、主義に対する理解といふぐらゐでは決定的な動機にはならないはずです。自分の命を捨てる最大の動機、それはリーダーと部下の間の、イデオロギーを越えた、人間的な紐帯だと思ふ。そのむすびつきがあればこそ、敵の陣営に、肉弾となつてぶつかつてゆくことも出来ると思ふのです。さう思はなければ、すなはちその人が固定したイデオロギーに殉じて、尊いいのちを捨てたとするならば、それはあまりにもみじめではないか。その人達の人間性をあまりにも無視してしまふことになるのではないか、私にはさう思はれてならないのです。彼らは一見イデオロギーに殉じたやうに見える、しかし実際はそこに、まともな、生きて働いてゐる人格が跋扈してゐたことを信じたいのです。イデオロギーといふ固定したものに、いのちを捨てるといふ、まったく無味乾燥な人生がそこにあると考へるのは、あまりにも残酷です。そんなことは考へたくもないし、また事実にも反することだと思ふので、私はあへてさういふ風に理解すべきだと考へてゐるのです。

イデオロギーと人生

このことをじっくりつきつめてゆくと、イデオロギーなるものは、たいして権威のあるものではないといふことがわかつてくるはずです。先程申しました通り、イデオロギーは言葉に表

現されたある時点で、静止した概念の表白ですから、それなりの意味もあるし、人々の理解を共通にさせるといふ役目はもつてをりますが、そんなに最高の権威あるものではない。われわれは今こそイデオロギーに対する過信から抜け出さなければいけない。さういふ時期がきてゐると思はれてなりません。

現に人生にとって非常に大切な男女の問題を考へてみても、それにイデオロギーが絡みあふことは本質的にはあり得ないはずです。勿論イデオロギーが絡みあつた恋愛とか、家庭争議といふものがないわけではない。しかしそれはさう口で言つてゐるだけで、生身の、生きた血の通つてゐる男女が、イデオロギーによって恋愛をしたり、離婚をしたりするのはあまりにも冷たすぎるやうに思ふのです。それでその二人を尊敬するためにも、血の通つた二人として見てあげるためにも、イデオロギーの絡み合つた男女の關係といふものは本質的にはあり得ないし、もしあつたにしても、ほどほどのものではなからうかと思ふのです。

また親子の情愛についても、イデオロギーとは縁の遠いものでありませう。母親たる女性が、その身を二つにして生み出した赤子に対する慈愛の心、限りなく注がれる母性愛、それが一体どこでイデオロギーとつながるのでせうか。イデオロギーは元来固定した性質をもつてゐる。一方恋愛にしても母性愛にしても、瞬間、瞬間に常に生き生きと動いてゐる、その動くもの同士が絡みあつてゐる中にどうして静止したイデオロギーが介入する余地があるか。だが現在大

学の講義の中で、或ひは学生同士の討論の中で、みんながイデオロギーといふものから抜け出すことが出来ないでゐる。イデオロギーを駆使するといふのなら話はわかる。しかしイデオロギーにがんじがらめにしばらく生きてゐるといふのでは、あまりにも情ないではないか。われわれが折角この世に生まれてきて、無限に発展する人間としての生きる素地をもちながら、それを自分の手で蹴とばして生きてゐると同じではないか。それでは全く惜しいので、さういふ意味からしても、もっと自分を大切にするやうに立ち上るべきではないか、私にはさう思はれてならないのです。

このやうに現在の日本ではイデオロギーの対立の中で大変な混乱がおきてゐる。だからもうそろそろ日本人の英知を出し合つてイデオロギーの奴隷からわれとわが身を救ひ出さなければ、日本はもうだめになつてしまふと思ふのです。例へば資本主義と共産主義との対立、その対立だけが世の中すべての問題のやうに思つてしまふ、かうしてそれらを野放図につけ上がらせ、イデオロギーを主張する人たちだけがいかにも学者であり、政治家であるといふやうな風潮をつくり上げてしまつてゐる。これをどうにかしなければ本当に日本はだめになつてしまふと思ふのです。

われわれは口先きで言ふだけではなしに、自分自身の人間としての尊厳性を、いま一度確認し直さなければいけない。そのためには労働組合にしても大学自治会にしても、そのやうな団

体に所属するのは、イデオロギーの制約を強制されない限りといふ前提に立った上でなければならぬといふことを、お互ひに確認し合ひたいと思ふのです。さう考へてゆけば、革マルや反帝や民青や、そのやうなイデオロギーに支配されたグループに牛耳られてゐる大学自治会に、どうしていつまでも自治会費を納めつづけてゆくかも反省されてくるでせうし、人間の尊厳性よりもイデオロギーを重視する日教組にいつまでも会費を納め続けるのかについても考へなほすべき時期に来てゐることも確認されてくるはずで、ましてや実質的にすでに人民管理が実現してゐるやうな教育現場を、多勢に無勢と言つていつまでも見送り続けることが、いかに人間性の名において許されないことであるかといふことも明確になつてくるはずで、

リアリティに対する西欧と日本

ここで西欧人と日本人の物の考へ方との間に見られる一つの差異についてお話し申し上げたいと思ひます。西欧でも日本でも、おそらく地上の人類すべてについて同じことが言へさうですが、人間は、自分自身、敬虔な気持ちで相対する何物かを求めないではをられないものだと思はれます。すなはち生きてゐる自分といふ人間だけですべてを解決してきたのではなく、自分以外の「もの」のあることを考へてきたのが人類であつたと思ふのです。

聖徳太子は十七条憲法の中で「共に是れ凡夫のみ」とおっしゃってゐる。人間はすべて欠点だらけなのだ。人間は修業をすれば完全な人格に近づくと云ふ人は多いが、実際に人間は自分を磨けば磨くほど、それまで自分で気がつかなかつた欠点に気付いてくる。かうして「共に是れ凡夫」といふやうな人間、平凡な人間が集つてゐるのが人間の社会だといふことに気づいてくるのです。さういふことで、全人類は何か敬虔な、相対するものを求める気持ちはずつともちつづけてきたやうです。それを私は「真理の現はれとしての実体」とレジユメに記しておきました。それは神といつてもいいし、仏と言つてもいいがそれを英語で言へばリアリティ (Reality) といふことになるでせう。このリアリティを西欧人と日本人はどうしてきたのか、そのちがひを考へてみますと、このリアリティを人間的なレベルで、自分の心の中にリアライズ (Realize) してきたのが日本人なので、自分の外、人間の外にそれを対象化して把へようとしてきたのが西欧人ではなかつたでせうか。

日本人は自分自身の心の中に「真理の現はれとしての実体」をしみじみと実感してきたので、そこには全知全能のゴッドといふやうなものは登場してこないのです。ゴッドを想定するのではなく、亡くなった祖先の御霊を偲んだり、ありし日の人の姿を思ひ返して、胸の中に自分で味あふといふことをする。死んだ人の姿がフツと心に浮んでくるのです。このやうに人間的なレベルで自分の心の中にリアライズしていく。すなはち「真理の現はれとしての実体」を

自分の心の中にしみじみと実感してきたのです。別の言ひ方をすれば事実通りに受けとめるからこそ感ずるといふ心の働きのほかに活潑に躍動して「感ずる」といふ作業に重点がおかれてきたと思ふのです。

先程木内先生が御講義の折に「一葉落ちて天下の秋を知る」といふ言葉を引用されて、天下の秋を知るためには、それがわかるだけの心が用意されてゐなければならぬとおっしゃいました。昔の人はさういふ心の準備が出来てゐた。今の人は、理解する心、頭の用意は一〇〇%出来上つてゐる。ところがそれを心で感じる、さうした心の用意は殆んど訓練されてゐない。教育の場でもさういふ訓練は全く行はれてゐないといつてもいいのです。その訓練の爲には、平素、自分の心が森羅万象悉くに、風の音にも嵐の響きにも、人の声にも人々の語らひにも、川のせせらぎにも、敏感に心をすつと移して、その対象と自分の心の巾の広さをつきあはせながら、感動を敏感にし、感動の巾を次々に拡げてゆくやうにつとめなければいけない。大和民族は長い間さうした訓練をつづけてきたのではないでせうか。

昨年の合宿の御講義で木内先生が日本人は虫のなき声を聞きながら、秋を感じたり、夏の夜更けを感じたりする。しかし西欧の人はそのやうな虫の音の聞き方を知らないといふ御話をなさいましたが、虫が鳴いてゐるといふ事実を単なる物理的、音響的事実としてうけとめる人と、虫とおもひをかよはせあひながら虫の音を心にうけとめようとすると、そのちがひに心

をとめていたいただきたい。それにおもひをいたすことなしに、日本人のうけとめ方には客観性がないとか、主観的だとか言ってみたところで、それに一体どんな意味があるのでせうか。

日本人はこのやうなりアライゼーションを実現してきてをり、それが日本人の伝統的な心情であり、素質でもあったのです。

これに対して西歐人はリアリティを例へば全知全能のゴッドの如く、人間の外に対象化して扱へようとした。従つて人間は決して神にはなれない、ゴッドにはなれないのです。しかし日本人は死して護国の鬼となると言ひ、死して神と祭られるといふ、それだけみてもゴッドと日本語でいふ神との違ひは明らかですが、ともかく対象化されたものは、これを説明しなければならぬ。そのためには概念の力をかりてそれを表現しなければいけない。それが西歐人のものの考へ方、感じ方の中核をなしてゐるやうに思ひます。そのやうにリアリティを人間の外にあるものと考へる考へ方と、心の中にリアリティをライズしてきたものとの違ひ、その違ひをあきらかにすることこそわれわれにとって欠かすことのできない学問であり、人生価値を追求する一番大切なポイントではないでせうか。

天皇について—歴代天皇の御歌

このことをふまへて、最後に天皇の問題を考へてみたいと思ひます。さつき申し上げたやう

に虫の音一つを聞いても、それを音響として聞く人間と、虫のいのちをしみじみと感じとらうとする人々と、そのちがひがわかれば歴代の天皇方が沢山残してをられる御製（御歌）を通して天皇のことを考へるといふことの意味がつかめるのではないかと思ふのです。日本には沢山の文化遺産がありますが、古くから天皇が敷島の道として和歌を残してこられた。この天皇の御歌ほどすばらしい文化遺産はないと思ひます。歴代の天皇方が胸の中に感じられたそのままを言葉に表現された和歌、それをわれわれは同じ日本人として生きてゐるが故にこれを読むことが出来、理解することができなのです。私たちの心が天皇の御歌に感応するとき、天皇の御心は私たちの胸の中に蘇る、そこに日本独自の生き方があり学問の世界があるはずです。この文化遺産を考へないで、天皇を論ずることなど学問的に言つても言語道断のことだと言はなければなりません。

ここに二百年位前の天皇方から数名の方を選んでそれぞれの御歌をいくつか拾つて準備しておきましたので、御自分で読んで味はつて下さい。詳しく申しあげる時間はございませんが、私がここで申し上げることが出来るのは、この御歌のいづれも、言葉を外からもつてきて表現してをられるのではない、どの御歌にも真実のおもひがこもつてゐるといふことです。時間の許すかぎりいくつかとりあげて御説明しておきませう。

最初は桜町天皇、この方は今から約二百二十年程前、一七五〇年に三十一歳でなくなつてを

られる青年天皇なのです。天皇二十八歳の時、幕府は天皇に恐れをいだいて御退位を迫るので、何故さういふことになったかと言へば、桜町天皇は二十一歳の時、二百八十年間断絶してゐた「新嘗祭」を復活された。それが幕府の忌避にふれたのです。そのことにもうかがはれるやうに断固として強い意志をひめた天皇であられたと思はれます。次の御歌がその二十一歳の時におよみになった歌です。

述 懐

身の上はなにか思はむ朝な〜国やすかれといのるころに

次の桃園天皇は桜町天皇御譲位のあと御即位、二十二歳といふ若きでお亡くなりになられた方ですが、この天皇の時、竹内式部の宝曆事件がおこつてゐます。

聴

身の恥も忘れて人になにくれと問ひ聞くことぞさらにうれしき

十六歳のまだ少年であられた時の御歌です。作者がいかにか素直で、敏感な、すき透るやうな心の持主であつたかが偲ばれます。

神 祇

もろおみの朕われをあふぐも天てらす皇御神すめらみかみのひかりとぞおもふ

これは十七歳の折の御歌です。多くの臣下が自分を天皇として仰いでくれてゐるけれども、それは天皇の御祖先、とりわけ天照大神のお志、その余榮をうけてゐるので、自分の偉きではないのだといふ御歌です。それから二十一歳、お亡くなりになる前年の御歌

逢 恋

新まくら待ちえてかはす今宵よりよを隔てじと契るうれしさ

私はこの御歌に接したときに本当に目のさめるやうなおもひがいたしました。御新婚の初夜の思ひをこんなに美しく言葉に綴ることが出来るだらうかと思つたのです。

同じやうな御歌が次の光格天皇にもあります。十八歳の時の御歌です

逢 恋

新まくらかはせる今宵もるともおもはゆながら契るむつ言

「おもはゆながら」は恥しいおもひはするけれどもといふことでせう。

次は孝明天皇、いふまでもなく明治天皇の父君です。

書

日々日々の書につけても国民のやすき文字こそ見まくほしけれ

国の内外から届けられる数多くの情勢の報告を見るにつけても、日本の国がいつまでも安心できるやうな、さういふ報道が毎日見たいものだといふことでせう。

述 懐

天がした人といふ人こころあはせよろづのことにおもふどちなれ

天下の人すべて、勤王派であらうと、幕府側であらうと、すべての人が心を合はせて日本の生命を永遠たらしめるために、すべてのことに心を寄せあふ仲間にならうではないかといふことでせう。幕末の動乱のただ中で国民のおもひを一つに統べようとなさるはげしい天皇のお心のしのばれる歌です。

述 懐

さまざまになきみわらひみかたりあふも国を思ひつ民おもふため

この御歌にも国民と心一つになして国の運命に心を寄せてをられる天皇の御心が生き生きと感じられます。

次は明治三十七年、日露戦争のさ中におよみになった明治天皇の御歌です。
をりにふれたる

はからずも夜をふかしけりくのため身をすてたりし人をかぞへて

淋しい夜更けにただ一人、国のため命をすてた人々を偲びながら、すべての責任を我が身に負ふて生きてをられる天皇の御姿、総理大臣には辞職することが出来るが、自分にはそれが許されないとおっしゃったと伝へられる天皇のお立場の中に偲ばれる、しみ透るやうな御痛感が感じられる御歌だと思ひます。

時間がありませんのでこれで終りにしますが、これらの御歌には天皇の御心の真実の表白がある。従つてかういふ御歌を数々拝誦してゐるうちに歴代の天皇が何を考へてこられたかがわかる。さうするとわれわれの祖先がかうした天皇の御人柄をどんなに大切なものとしてきたかも諸君の心の中に感じられてくると思ふのです。頭の中ではさまざま論理に災されて何らかの抵抗を感じられるかも知れませんが、すなほに読んでさへいただけば心の中ではきつとわかつていただけはらずです。歴代の天皇方はこの一千年ほどほとんど実権をもつてをられなかつた。しかもなほ天皇が存続してこられたのは、その当時の日本人たちが天皇といふ方が何を思ひ、何を考へて生きてゐる人であるかといふことを理解してゐたからであつて、単に保守的に現在の体制を守らうとする姿勢から天皇制が保持されてきたといふやうな考へは誤りだと思ふのです。幕府は何時でも天皇制を崩壊させる実権をもつてゐた。それをやらなかつたのは、国

民がこのやうな御心をもちつづけてこられた天皇について大変な誇りと理解をもち、無上の宝だと思つてゐたからといふより他にあり得ないと思ふのです。事實は事實として理解するしかない、天皇のことを理解する急所は歴代の天皇が残された御歌にあると思はれますし、その背景には、先ほどから申し上げてきた日本人独自のものの考へ方、感じ方がある。それを明確にすることと天皇の問題を考へることは不可分のことであつて、そこにこそ日本人としての学問の一番大切なポイントがあると思ふのです。

（亜細亜大学教授・国民文化研究会理事長）

感ずべきことにあたりて感ずる心

——他と共なる生——

小柳 陽太郎



瑞々しい心

真淵と宣長

素行と松陰―他と共なる生

十七条憲法について

明治維新の意味

武装石人（石神山古墳）

瑞々しい心

合宿もいよいよ最終日を迎へたわけですが、この五日間、小林先生、木内先生をはじめ多くの先生方が登壇されてさまざま、心のこもったお話をして下さいました。その間、それぞれの先生方がとり上げられた素材もちがふし、それぞれのお話にニュアンスのちがひはあったと思ひますが、先生方が一様に願つてをられるもの、訴へようとされたもの、それは結局一つのことには帰着するやうな気がしてならないのです。ではその一つのものとは何か、それは人間が本来もつてゐるはずの、瑞々しい心を何とかして蘇らせたいといふことではなかつたでせうか。現代は思想が非常に混乱してゐるとよく言はれます。しかし現代の大きな特徴は、思想が乱れてゐるといふより、むしろ思想が衰弱してゐるといふことではないでせうか。現代の人々はすぐれた価値を見失つてしまつたと言はれますが、見失はれたものはすぐれた価値ではなく、さういふ価値にむかつて迫つてゆくその潑刺とした、人間らしい生き方そのものではないか、私にはさう思はれてならないのです。その低迷した思想界の中から人間そのものを回復させたい。先生方の御心はすべてそこにむかつて注がれてゐたやうに思はれます。では何故そのやうになつてしまつたか、それを小田村先生は人間がイデオロギーにふりまはされてしまつた

ために、人間の心が衰弱したと言はれましたが、たしかに、物の考へ方の誤り、学問の誤りがこのやうな結果を生んだ大きな原因だと言へませう。

先程私はある班の学生さんから次のやうな話を聞きました。「大学といふところでは、何かの考へを述べる時には、その背景には一つの理論体系が整へられてゐなければならぬ。おれはかう思ふのだといふ実感を話さうとしても、それが理論化されてゐないと、幼稚な感想として片付けられてしまふ。ところがこの合宿ではどんなに素朴な考へでも、それに実感がこもつてさへゐれば、皆が心をこめて聞いてくれる。自分の心が人の心と直接反応し合ふといふことを具体的に実感出来て非常に嬉しい」

私は本当に有難い気持でこの感想を聞きましたが、それと一緒に、理論体系といふものの前でいかに人間の心が萎縮し切つてゐるか、さういふ現代の風潮を身にしみて感じました。例へば共産主義はだめだといふ、さうするとお前はそれに代る理論をもつてゐるかと問ひ返される。それに答へることが出来ないとは結局は馬鹿にされるのがおちなのです。かうして共産主義運動のなかに、なにかをかかしたいところがあるとは思ひながらも、人々は、マルキシズムといふ理論の網の目からどうしてもぬけ出すことが出来ないでゐるのです。勿論私も理論が大事だとは思ひますが、ただ理論に対するに理論をもつてする、それが出来ない間は沈黙しなければならぬといふことはどう考へてもおかしい。そのやうなやりとりの中で人間の心が萎縮してし

まふことは、どうしても許せない。そのやうな低迷した空気の中から人間の本来の心をどうかして蘇らせ、その瑞々しい生き生きとした心を起点にして現実のさまざまな問題にとりくむ以外に、思想問題を克服する道はないと思ふのです。そしてまた真実の学問もこの生き生きした心の働きがさらに活潑になるやうに展開されるべきであつて、理論の整備を急ぐあまり、人間の心を封じこめてしまふ様な、現在の大学を支配してゐる学問のあり方に対しては抜本的な反省が求められなければならないと思ふのです。

真淵と宣長

では瑞々しい心の働きを中心に展開される学問とは何か、それを江戸時代の二人の先人の言葉によつて偲んでみたいと思ひます。最初にとりあげるのは賀茂真淵の言葉です。

およそ
凡物は理りにきとかかる事はいはば死にたるがごとし。天地とともにおこなはるるおのづか
ことわ
らの事こそ、生きてはたらく物なれ。

（国意考）

「理りにきとかかる」といふのは理論にびったり合ふ、理論を先に立てて、それに人生をは

めこむといふことでせう。複雑微妙に展開する人生、その人生は理論通りに整理されるはずはない。だから理論にピッタリあてはまるやうなことは「いはば死にたるがごとし」といふことになるのです。従つて「天地とともにおこなはるるおのづからの事」、この天地が生れた時から、自然の運行と同じく、脈々と伝へられてゐる「おのづからの事」、すなはち人のさかしら、知的な理論構成をはなれた自然さながらのことこそ「生きてはたらくもの」だといふのです。生きるだけでなく、さらに働くといふ言葉がそへられてゐることに注意して下さい。生きて、それが潑刺とした姿を示すことが出来るもの、それは「おのづからのこと」だと真淵は言ふのです。

さう見てくると理論といふものによつて人生が見えなくなるといふのは、現代のイデオロギ―氾濫の時代ばかりではなく、真淵の時代でもさうなので、それは人間が生きてゐる限り、常に迫ってくる危機であつて、われわれの先人はその危機と常にたたかひながら、人間らしさを守ってきたとも言へるやうに思ふのです。

次は本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」といふ有名な評論の一節です。源氏物語についてはそれまでいろいろな価値評価が行はれてゐたのですが、宣長は源氏物語を貫くもの、それは「もののあはれ」の表現であつたといふ、文学史上画期的な評価を下したのであります。そのことについてはここではふれませんが、その「もののあはれ」とは何かといふ説明の最後に次の言葉が記

されてゐるのです。

人は何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきことを知りて感ずるをものあはれをしるとはいふを、かならず感ずべき事にふれても心うごかず、感ずることなきを物のあはれしらずといひ、心なき人とはいふ也。

「ものあはれ」といふと、ともすればセンチメンタルな情感と結びつけて考へがちなのですが、宣長は人間であれば当然感ずべき事にふれた時には、どのやうなことであつても、敏感にそれに反応する、さういふ潑刺とした、真淵の言葉をかりて言へば「生きてはたらく」心を、ものあはれを知ると言ふのだと定義づけるのです。喜びにも悲しみにも、人間らしい感動を示すのがものあはれを知ると言ふことなのです。さういふ意味では、「ものあはれを知る」といふことは単に源氏物語に限らず、遠く古事記もふくめた、日本古来の精神の端的な表現であると言つてもいいし、事実、宣長が生涯をかけて、古事記伝を書きあげた眼目もそこにあつたのです。宣長が「からごころ」を排したのは有名ですが、道徳律に身をしばられたやうな、理論やイデオロギーに身うごきが出来なくなったやうな、いはば硬直化した精神を排除して、人間本来の生き生きとした心の働きを中心に学問をおしすすめてきたもの、それが、真

淵——宣長とつながる日本本来の学問の道筋であったことをここで確認しておきたいと思ひます。

素行と松陰——他と共なる生——

では先人には何故そのやうに生き生きとした心がたたへられてゐたのか。そのことを考へていただくために、副題に出しておきました「他と共なる生」といふことばに心をとめていただきたいと思ふのです。

昨日皆さんは和歌をおつくりになつて、班毎に相互批判をなさつたでせう。あの時、皆さんは友達の歌一首をとりあげて、ここをこのやうに直したらどうか、もう少しいい言葉はないかと一所懸命にお考へになつたと思ふ。その結果その歌がよくなつたかどうか、それは別にして、ともかく皆さんは友達の心になりきるといふ時間をもたれたはずで、和歌を批評するためには、相手の心をそのまま自分の心にしななければいけない。批評といふ言葉も実は不正確なので、ここでいふ批評といふのは相手の気持になり切つて、相手の気持を正確に表現するため力を貸すといふ本当の友情の世界、協力の世界を実現することなのです。昨日の夜皆さまはそのことを、まぎれもない事実として体験された。さう考へていくと、このやうな経験は現在

の学生々活の中では実に貴重なことだといふことにお気付きになるのではないでせうか。ここに実現された「他と共なる生」といふ経験が、現代の学生々活の中でいかに稀薄になつてゐるか、そのことに深く心を寄せざるを得ないのです。

しかし日本人古来の生き方の中には、さらに日本人がこれまで学んできた学問の中には、常に他とともに生きてゆくといふ、いのちのかよひあふあたたかな世界があつた。それは先に述べた真淵、宣長たちの国学の人々であらうと、これと一見立場を異にする儒学の人々であらうと同じであつて、私はそこに日本人の学んできた学問の一番大切なポイントがあると思ふのです。ここでは先人のいくつかの言葉にふれながら、そのやうな学問のあり方について考へてみたいと思ひます。

最初にとりあげるのは山鹿素行の「謫居童問」といふ書物の一節です。この書物は山鹿素行が、その著書「聖教要録」が当時幕府の官学であつた朱子学に相容れないといふことで播州赤穂に流されるのですが、謫居といふのは流されたところ、そこで童問——子供の出した数々の質問に答へるといふ形で書かれた書物です。

聖人の道は楽しむときは人と共に楽しみ、患うれふ時は人と共に患ひ、人を立てて己れを後にし、人を利して身を後にす。異端の道は一己の道、人これを以て自ら楽しむべくして、若し是

れを家に施せば家ととのはず、況んや国天下に及ぼすに足らんや。

一般には聖人の道と異端の道とのちがひは道德的な所謂正邪の問題として扱ふ。素行も一応さう考へてはゐるのでせうが、その正邪の基本をなすものを、素行は人と共に楽み、人と共に憂へるか否か、そこに見出してゐるのです。「人を立てて己れを後にし、人を利して身を後にす」といふのも単なる謙讓の徳といふやうなことを言つてゐるのではなく、相手の身になつて考へるといふ心のもち方の大切さを言つてゐるのでせう。これに対して異端の道は「一己の道」、すなはち自分の中に閉ざされた世界だといふのです。これを「私」の世界とすれば聖人の道は「公」の世界、すなはち開かれた世界なのです。万人共通の、みなが一緒に生きてゆく世界、そこに素行は「聖人の道」を見出してゐるのです。そこには道德律で正邪を別つといふ儒教的な世界とは微妙なニュアンスの相違がある。他と共なる生を実感することを別にして聖人の道はあり得ない。素行はさう言つてゐるのです。

このやうなことは次の吉田松陰の言葉にもうかがふことが出来ます。松陰は山鹿流の兵学を勉強した人で、その点素行との学問的な系譜にむすばれてゐるのですが、ここでは単にそのやうなつながりだけではなく、その二人の間には日本の学問の大切な伝統が脈々と流れてゐるのが察せられるのです。次の文は松陰が獄中で孟子を講じた「講孟余話」の一節です。これは最

初の日川井先生がとり上げられた個所ですが、少しその前後の幅を広げて味はってみたいと思ひます。

民と楽しみを同じうする時は、韶かく渡にても鄭衛にても皆可なり、楽しみを同じうせざる時は韶渡にても鄭衛にても皆不可なり。

この部分の意味は次のやうなことです。韶といふのは中国古代の聖王舜が広めたすばらしい音楽、渡といふのは殷の湯王が作った、これも非常にすぐれた音楽、鄭、衛はいづれも当時のつまらない流行歌なのです。一般に考へられるのはいふまでもなく韶渡はすばらしいが、鄭衛は駄目だといふことでせう。だが松陰は別の観点からこれを見るのです。すなはち音楽で大切なことは「民と楽しみを同じうする」か否かといふことである。従つて「民と楽しみを同じうする時は」韶渡でも鄭衛でもいいが、「楽しみを同じうせざる時は」どちらも駄目だと言ふのです。それをふまへて次の文が出てまゐります。

今是れが為に一つの切当なる譬喩を得たり。学問の術固より端緒多し、訓詁の学あり、詞章の学あり、考摛の学あり、老仏の学あり、是れを皆曲学とす。楽に世俗の楽あるが如し。吾が

党の志とする義理經濟の正學と異なり。義理經濟の學は譬へば古の樂の如し、故に樂の善惡を論ぜば古樂を貴びて俗樂を賤しめ、學の善惡を論ぜば正學を崇んで曲學を排するは固よりなり。

ここ迄の意味はほほ次の通りです。自分は今音樂の話をしながらこれにびつたりする譬喩を思ひついた。それは學問のことである。すなはち學問にはさまざまの道がある。例へば訓詁の學（言葉を細かに研究する學問）、詞章の學（言葉を美しく飾るための學問）、考擧の學（儒教の理論體系を研究する學問）などがあるし、儒學とは別に老子の學、仏教の學がある。それらは皆誤った學問である。（もつとも誤ったといつても絶対に許せないといふのではなく、本質的な學問とは言へないといふやうに考へるべきでせう。）それは丁度音樂の中に世俗の樂があるやうなものだ。ところが自分たちが志してゐる義理經濟の學、義理とは人のふむべき道理、經濟とは經國濟民、國を正しく治め、民を救ふこと、そのやうな本質的な學問は「譬へば古の樂の如し」——丁度古典的な秀れた音樂のやうなものである。だから音樂においてその善惡を考へてゆけば古樂がすぐれ、俗樂が劣つてゐるやうに、學問の善惡を論じていけば、義理經濟の正學を貴み、それ以外のものもろもろの曲學を排すべきは當然であらう。だが——それから松陰が最も言ひたいことなのです。

然れども今茲に一人あり、真に志を立てて己れを益し、人を益せんとの心なれども、偶々たまたま正学を知らず、曲学を主とする者あらば、豈に一概に是れを非とするを得んや、又其の学ぶ所、正学に似たれども、其の志却つて名の為にし、利の為にする者ならば豈一概に是れを是とするを得んや、然れば学を言ふは志を主とす。其の曲と正とに至りては第二義に落つるなり。

読んでいただければわかると思ひますが、或る人がすぐれた志は立ててゐても、たまたま正学を知らず曲学を主とする場合、どうしてこれを誤りだと頭からきめつけることが出来よう。又逆に学ぶ所は正学のやうであつてもその考へが自己の利欲のためであればどうしてこれを一概に立派だと認めることができよう。さういふわけだから——そこが大切なのですが——「学を言ふは志を主とす、其の曲と正とに至りては第二義に落つるなり」といふことになるのです。大切なことは、先程の音楽の例で言へば民と共に楽しみ、民と共に悲しむといふやうに、さういふ開かれた世界の中に身をおいて、我が身を忘れて人につくすといふ志が学問を支へてゐるか否かである。そこで行ふ学問が正か曲かといふことは次の問題であると言はれるのです。

例へば自分たちは大事な学問をやつてゐる、自分は愛国者であると自任してゐても、日本人すべての人とあたたかく心を通はせ合はうとする軟らかな心を失つて傲慢になつてしまつてゐる

るならば、それに一体どんな意味があるだらう。そのやうな人に日本の運命を任せることは出来ない——松陰先生はそのやうに言はれるのです。国家主義、日本主義、そのやうな主義主張よりも、日本人が喜びと悲しみを共にするその心情こそ何にもまして大切なものではないか、その松陰先生の言葉は、人と共に楽しみ、人と共に患ふところに聖人の道を見出した素行の言葉とまっすぐにつながつてゐるのではないでせうか。素行が学んだのも儒学ですし、松陰も同じです。しかし彼らを儒学者といふ枠の中に閉ぢこめてしまつてはいけないので、中国の古典を学びながらも、他と共に生きる暖かな心を限りなく大切に、さういふ学問の道を見出しながら、それをしっかり守りつづけてきたのが日本人ではなかつたか、私にはさう思はれてならないのです。

十七条憲法について

今度は時代をずっと遡つて聖徳太子の十七条憲法の一節を読んでみませう。第十条のところ
です。

十に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各執あり。彼是とす

るときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鑿鑿の端なきが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。

忿は心の中にはげしくもえる怒り、瞋は表情に表はれた怒り、そのやうな怒を棄てて他の人が自分の意のままにならぬのを怒るべきではない。人にはそれぞれの心があり、それぞれの執着心がある。従つて人の心は常に対立的に動く、しかし我も彼も所詮は同じく愚かな人間にすぎないではないか。その愚かな私たち一人々々にどうして是非の理を定める力があらう。お互ひに賢くあるひは愚かであること、それは丁度、端のない環になつたあの鑿のやうなものではないか。だから相手が怒つても自分が誤つてゐなかつたかを考へ、自分だけが正しいと考へてもそのことにこだはることなく、皆と一緒に生きて行くべきである。

さういふ教へなのです。しかし私は最初このことばにふれたときには、この最後の「我一人得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ」といふところがどうしてもわからなかつた。自分が正しいと信じればその所信を断行するのに何をばかることがあらう。さう思ひました。勿論それはそれで間違ひではないと思ひますが、今にして思へば、やはり読み方が非常に浅かつたや

うに思ふのです。この太子の御言葉に表現されたもの、それは「共に是れ凡夫のみ」といふ御言葉から直接に導かれてくる、人間性に対する深い洞察なのです。おれが正しいのだ、おれについてこい、さういふ威張った心のもち方はどうしても許されぬ。所詮はお互ひに、心を通はせ、悲しみも喜びもわかちあひながら生きてゆく外に道はないではないか。その愚かな自分の姿をじつと見つめながら、お互ひに通ふ暖かな心を信じて生きようとする時に生まれてくるおもひがこの最後の「衆に従ひて同じく挙へ」といふことなのでせう。太子がくりかへしおっしゃってゐる「和」といふこともさういふ御体験の中から生まれた言葉なので、「和を以て貴しとなす」といふことも、「他と共なる生」の表現として味はってはじめ、それが「大和の国」の「和」として日本の国柄の中を一貫して流れる意味もわかつてくると思ふのです。（「日本への回帰」第九集一一八頁参照）

明治維新の意味

このやうな、他と共に生きてゆくといふ思想生活が日本の国を背後から支へてゐる一番大きな力になってゐると思はれますが、それは国家の危機においてさまざまな大きな力を發揮してきたと思はれます。ここではその一つの例証として、孝明天皇の御歌について述べてみたいと

思ひます。孝明天皇はいふまでもなく明治天皇の父君、幕末の国難のただ中に全生涯の力をかたむけつくして三十六歳の一生を終へられたお方です。この天皇にはすでに小田村先生も引用されましたが、

天が下人といふ人心あはせよろづのことに思ふどちなれ

といふ御歌がある。天下のあらゆる人はそれぞれの立場はいかに異らうとも一つのこと、すべてが心をよせ合つて生きて行く「どち」——同士、仲間にならうではないかといふお歌ですが、この難局に処するためには、国民すべてが、喜びも悲しみもわかちあふ一つ心につながる以外に道はないと念ぜられるその痛切なおもひがこの一首の歌全体に漲つてをります。また天皇には次のやうなお歌もある。

群がりて何を語るぞ我が思ひひとしく思へ池の水鳥

池に群つてゐる水鳥にむかつて、自分のこの苦しい思ひを自分と一緒に思つてくれと訴へかけてをられるのですが、まさしくその水鳥を自分の懐の中に抱きしめるやうな御歌で

す。この重大な国家の危機を前にしては自分の悲しみを共にわかちあふ以外に何があらう。さういふ切々とした御心がひしひしと伝はって参ります。

さまざまに泣きみ笑ひみ語りあふも国を思ひつ民思ふため

古来、世界中に無数の帝王がゐたにちがひないけれども、これほどまでに自分の心の垣根をとりはらって、国民と一緒に泣き、一緒に笑ひ、国の運命に心を砕いた帝王が、一体世界のどこにゐたでせう。この、何のいつはりも飾りもなく、赤子のやうな御心で、国民と語り合はうとされたからこそ、その天皇の御心に「天が下人といふ人」の心が一つにすべをさめられて行ったのではないでせうか。明治維新の大業はかくして行はれたのであって、かかる天皇の御心をよそにして維新の歴史は綴られないと思ふのです。そこには天皇についてのこまごました議論を越えた、ゆるがない天皇政治の本質が示されてゐると言へませう。

幕府といふ時代は、士農工商といふ蔽しい階級に区分されてゐたし、国々もまたお互ひに睨み合つて生きて来た。この国全体が分断された体制、それは先程から述べてきた「他と共なる生」をおよそ実感すべくもない、それとは全く無縁の時代であったといへませう。さういふ点からみても、幕藩体制が日本本来の姿から見て許すことの出来ないものだといふことが歴然としてゐるのです。その不自然な、人の心を寸断した壁を破って、人の心を一つにつながうとし

た運動、それが維新の大業だったと言っている。さう見てくると、あの時代の思想をリードした言葉として、孝明天皇のこれらの御歌や、吉田松陰の講孟餘話の一節が、どのやうな役割を果してきたかが、おわかりいただけると思ふのです。

明治維新の最初に「五ヶ条の御誓文」が發布されます。その第一に

広ク會議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ

といふ御言葉があるのは皆さま御存知の通りですが、その「広ク」といふ言葉に注目していただきたい。そこには一人一人の世界に分断されて、かたくなに生きてきた世界を解き放つて、お互に心をつつに通はせながら生きてゆく、さはやかな、おほらかな心がいみじくも表現されてゐる。「私」の世界にあらず「公」の世界、閉ざされた世界にはあらずして開かれた世界、それを高くかかげた時代の感激がこの一句にこめられてゐる。そしてそれこそが、最初から述べて参りました、最も日本的な、日本人が遠い古から、限りなくいとほしんできた「他と共なる生」の世界だったのです。

さう考へてくると明治維新といふのが、単に前時代に対する批判としてではなく、それまで人の心を寸断してきた幕藩体制の中から、いかにして日本人本来の瑞々しい心を蘇らせるかといふ重大な役割を荷つてきたかがおわかりいただけると思ふのです。その道筋の中に真淵も宣

長も、素行も松陰も生きてゐた。すなはち人間の精神をこの上もなく潑刺たらしめようとした真淵や宣長の学問も、他と共に生きることとを大切にしてきた素行や松陰の学問も、国学とか儒学とかいふ範疇をのりこえ、すべての概念的な整理を拒否して一つの大きな流れの中に統べられてゆくのです。その流れを孝明天皇の御歌と五ヶ条の御誓文につないでゆくときに、日本思想史を貫く最も大切な糸筋が見出せるはずです。この糸筋にどのやうにつながって生きてゆくのか、それを現代にどのやうに生かしてゆくか、それが現代に生きるわれわれに課せられた課題でもあるし、この合宿教室にこめられてゐるねがひもそこにあることに、深く心をとどめていただきたいと思ふのです。

(福岡県立修猷館高等学校教諭)



講

義

新しい世界と日本文化

木内信胤



この題目を選んだわけ

過去一年の日本の出来事

―金大中事件・石油危機・狂乱物価・国民春闘など・日中航空協定・参議院選挙

過去一年の世界の出来事

「新しい世界」への行進開始

―西欧文化は使命を完了したのか・新しいグローバルベーンズの煩悶

日本国の特異性とその文化の特質

世界と日本は、これからどうなるか、どうすればいいのか

日本文化はどのやうな意味を持つのか

結論

一、この題目を選んだわけ

今日のお話の題目ですが、「新しい世界と日本文化」とつけました。世界は確かに新しい世界に移りつつある、その中で、日本文化といふものを身につけてゐる日本国民の生き方は、どうすればいいのだらうか。正しく生きれば、それは新しい世界に対して、非常な意味を持つてせう。正しい生き方を発見して、そのやうに生きる以外には、我々は満足感をもって生きる道はないのではないか、などと考へて、この題を付けました。

世界は大きく変りつつある。日本もその影響を受けて、えらいことになりつつあるわけですが、その世界の転機に、日本人が主動的に対処していくには、日本文化といふものを世界との対比において考へなければならぬと考へるわけです。

二、過去一年の日本の出来事

始めに、例によって最初に、過去一年の出来事を総ざらへしてみます。

△金大中事件▽

昨年このこの合宿教室の直後に金大中事件といふのが起った。金大中とは、この前の韓国の大

統領選挙の時に、朴正熙の対抗馬として相当の票を獲つて、朴正熙危ふしと言はせた人です。その人が東京九段下にあるグラウンド・パレス・ホテルから連れ去られて、韓国まで持つて行かれた。日本の国土において、韓国の官憲が、相手は韓国人とはいひながら、勝手に連れ去ったといふことは、日本の国法を侵したことになる。それを大袈裟に主権が侵されたといつて大問題にした。これがいまだに解決してゐないのです。

日本側は「現状回復」と言つて、金大中を日本に戻せと言つてゐる。連れ去つたのは違法行為だから、その前の状態に戻せと言つてゐるわけです。金大中自身は、ハーバート大学に留学したいと言つてゐるから、それをさせたらいいともいつてゐるわけです。一見、これは正当な主張のやうだが、金大中は別途韓国の国法を侵してゐるのですね。連れて行つたのは悪いけれども、国法を侵した者が、すでに韓国の中にある以上は、韓国としてそれを手放すわけにいかない。もし外国に出したら、必ず彼は韓国にとって非常に悪状態を作り出すだらう、と韓国政府は思つてゐるのですから、離さうとしないのは当然でせう。

私は韓国問題には随分首を突っ込んでゐるので、この問題は大概の日本人よりはよく知つてゐる。もともと金大中が日本に来たのが違法なのですが、その後日本で、韓国政府を覆さうといふ活動をしてゐたのは、許されることではない、といふことは日本の新聞には一つも出ない。また日本は、ただ、警察権を阻害された、とだけ言つておけばいいのに、日本の主権侵

犯だ”といふ大げさな言葉を使ふ。しかし日本の警察権といふものは、実は度々犯されてゐる。三億円事件の犯人はいまだに捕らないでせう。これは警察権が行使不能に陥つてゐる例です。日本が韓国に本当に友好的であるなら、連れて行ったのは悪いけれども、一言あやまれば勘弁してやる、後は韓国の国法に照らして然るべくやりなさい、といふべきです。それで少しも差支へはない。ところが日本政府は、さうはおやりにならない。なぜかといふと、北鮮びいきのマスコミが、いつも北鮮に都合のいい言論を展開してゐるから、それに政府は遠慮するわけです。北鮮がどのやうなものであるかを知らず、間違つて観察し、身びいきに見て非常にいいもののやうに思つてゐる。

とにかく韓国から見れば、苟も国家の転覆を図らうとしてゐた人物を、もしも韓国政府が日本やアメリカの圧迫によって、おめおめと日本に返したとしたら、



韓国には大変に悪いことが次々におきてくるにちがひない。ある韓国人が言ひましたが、もし日本とアメリカの圧力によって金大中を日本に返したら、韓国政府は潰れてしまふだらう。なぜかといふと、俺達の政府はアメリカや日本に全く頭が上がらない独立性を欠いた政府だ、と韓国民が思ふ。さう思はれたが最後、朴正熙の政府は成り立たない。朴政権が成り立たなかつたら北鮮が入つて来る。さうなれば韓国は潰れてしまふといふのです。この韓国人の言つたことは本当だ、と私は思ふ。少なくとも韓国人の人はそこまで考へてゐる。韓国は、日本からの微々たる援助は、切られても実はさまでこたへないのだが、しかし本当に援助を打切るとなれば、日本と韓国は喧嘩になる。それはやはりいやだ。だから向ふさんは我慢に我慢を加へて、憤慨が爆発するのを押へてゐる。かういふことは日本のマスコミは書かないから、日本のみなさんには日韓関係の真相はおわかりにならないでせう。

金大中問題とは別に、日本人学生と称する早川、太刀川といふ兩名の事件が起つた。彼らは韓国をひっくり返さうといふ北鮮の陰謀に加担した。計画の基地は日本ですね。彼らの計画は次のやうなことだった。すなはち四月三日、暴動といふほどでもないが国法で禁じられてゐる集会、デモ、座り込みをやる。ある程度盛り上がったら、お巡りさんが排除に来る。さうしたら彼らの仲間が、警官と全く同じ服装をして現はれて、ピストルで自分の仲間の学生を一人二人撃ち殺す。そこで血を見るから、ワツといふ大騒ぎになる。日本の新聞はワンワン書く。その



（中央 木内、小林先生）

警官の服装は日本で作って持ち込んだものなのです。資金も日本から行くし、資材も日本から行くといふ段取りだったのです。日本から何を持ち込むことも、彼らにとってはほとんど自由自在なのです。

日本がなかったら、韓国はすこぶる安泰です。韓国からみれば日本は自分たちを助けるどころか、まるで北鮮を助けるやうなことをしてゐる。それを口に出して言へないのが今の韓国の立場です。この、学生をおだてて撃ち殺して騒動を起すといふ計画は、四月三日の直前にわかり、未遂に終わった。しかし早川、太刀川の二人は、明らかに韓国政府転覆の陰謀を認めてゐます。この計画がバレたので、いまのところ北鮮は工作をやめてゐる。彼らの計画では、六月二十日を最終期限として、準備工作を完了するといふことであつたのですが、このプランが狂ったわけですね。こんなのが金大関係で知つてゐるべきことです。そのなかに、

日本の国情はよく顯はれてゐますね。

△石油危機▽

眞の危機は昨年十一月から本年の一月までで、一月以降はまあ収つてゐる。十月六日に「中東戦争」が始つて二十六日に一応終つた。しかし和平協定は今年の六月までかかつて、キシンジャーのお蔭でやつと出来た。この中東戦争が石油危機に化けたのは、根底に「資源問題の登場」といふことがあつたからです。この地球の、特に地下資源がそろそろ枯渇する。いま石油は、海底三〇〇〇メートル位まで掘れるやうになつたから、日本海や東支那海の下からも出る可能性はあるが、毎年の使用量がどんどん多くなつて来てゐるので、やがて石油がなくなるだらうといふのは、必ずしも、うそではない。

いまから二年前にローマクラブといふのが地球の資源は枯渇すると言ひ出した。これは極端に過ぎる主張ではあつたが、手遅れにならないうちによき警告を發してくれたと言へる。そこで急に石油がやがてなくなるといふことが問題になり始めた。そこで中東戦争の時に、石油といふものがその稀少価値ゆゑに有力な武器として使はれたのです。戦争が始つたら、珍らしくアラブが団結して、大事な品物だから、これからは余り掘りませぬ、余り輸出しませぬ、と言ひ出した。そしてイスラエルを助ける国、即ちアメリカとオランダには輸出しないし、日本そ

の他の親イスラエル国には、毎月5%づつ減らしていくといった。石油といふ資源を、外交の武器に使ったわけです。アラブ諸国がさういふ団結力を發揮するとは思ひもよらなかつた。いつの間にか彼らはそこまで進歩したといふか利巧になって来て、よくも石油を使ったものだと思いますが、ローマクラブの警告がなければやれなかつたでせう。いくらでも石油はあるのだと世界中が思つてゐれば、脅しても効かなかつたでせう。かうして石油危機といふものが突発したわけです。

日本の如きは、輸出をだんだん減らすと言はれたのに驚いて、アラブに使節を出した。日本はアメリカ追随ですし、そのアメリカがイスラエルを作つたやうなものですから、日本は自然親イスラエルです。イスラエルについてはいろいろ言はれますが、とにかくあの砂漠地帯を緑にしたのだから立派な国です。それにイスラエルはキリストの出たところでもあるので、日本人は何となく尊敬心みたいなものを持つてゐる。だから日本が親イスラエルであるのは当り前なのです。それが急にお前はいけないと言はれて、三木副総理がアラブ諸国を巡つて、援助するとか何とかお世辞を言つて廻つた。

十二月のクリスマス頃の頃になると急に値段が倍に上がった。これはアラブだけではなくイランやベネズエラやインドネシアを含めたOPEC（石油輸出国機構）が団結して、世界の資源不足に便乗して値段の吊り上げをやつたわけです。その上げ幅が、一挙に二倍だといふのだけ

ら随分ひどい。その頃四ドルだったものを八ドルに上げたのですが、その四ドルといふ値段も、実はこの一九七三年の一月には二ドルであった。それが一年の内に四ドルになつてゐたのです。それも九月頃には、まだ二ドル九〇セントだった。それが十月の末には四ドルになり、年末には八ドルですから無茶です。しかしこの引上げに対して「彼らはけしからん」といふ声は国際的な公式な場では出なかつた。昔なら、あの辺を占領してしまへば済んだでせう。ところが今はさうはいかない。如何に世界は變つたか、ですね。ソ連だつて油は足りないから、ソ連と妥協してあの辺を押へてしまへばいい。

かういふわけでいまでも場合によっては戦争に訴へることはあり得る。大義名分はちゃんと立つわけで、たとへば石油の輸出を全廃したとしたら、我々は生きられない。そこで、なぜ我々の生存権を侵すのだ、といふ言ひがかりで、堂々と兵隊を進めて占領してしまふことも出来る。その可能性はある。

ところが彼らは上手で、アメリカとオランダには輸出を禁止し他の国には五%づつ減らしていくと言つた。こちらは弱いから、副総理が頭を下げに飛んで行く。さうすると今度は、輸出を押へることは止めて値上げをして、涼しい顔をしてゐる。翻弄されてゐるのだが、こちらもそんなにひどく怒れないのには理由がある。たしかにローマクラブの言ふやうに、石油資源は三十年か五十年先きには、確かに枯渇しさうなのだから大事に使はねばならない。大事に使つ

でもらふには値段を上げるのが一番いい。また石油が安いと石油に代るエネルギー資源の開発が進まない。アメリカのオイルシエール、カナダのタールサンド、あるひはアメリカの地下に眠っている石炭、これをガス化するといふアイディアもある。さらに原子力、太陽熱、地熱、海流発電などがある。黒潮で発電が出来る。しかし石油が二ドルでは、代替エネルギーの開発は引合はないからやれない。石油が八ドルになってくれればみんな引合ふ。代替資源の開発には十年も二十年もかかるのですが、人類の将来にとって、開発はしなければならぬといふ大きな理屈がある。だから私は、産油国が値上げしたのはちょっと憎らしいけれども、ああそれで助かった、これで世界は正しい軌道に乗るだらうと考へてゐます。

いままで安い石油を無闇に使って、日本の工業は伸びて来た。しかしいままでのやうだと日本は、公害で汚なくなり、大自然がそこなはれてどうにもならないことになる。だから値上げのお蔭で助かったとも私は思つてゐます。しかし今後また輸出货量を制限するとか、値段を大いに上げるといふことになったら危い。これが石油問題です。日本はこれでその産業を新しい姿に変へざるを得ないことになったのです。

△狂乱物価▽

石油危機を受けて十一月から二月ごろまで、物価が荒れ狂った。これをインフレの昂進と言

ひますが、インフレといふものは何かといふことを、明確に心に描き得る人はあまり多くはないでせう。インフレは、卸しのこととは忘れて、消費者物価で考へるのがいい。消費者物価の全体が年率で一割以上あがったら危険信号です。定期預金の利息の六分五厘とかいふものよりずっと高い。国民みんなが物価を非常に気にし始める。ところが、政府は必ず物価上昇を止め得る、と国民が思つてゐればいいのですが、さうではない場合には、お金があつたらなるべく何でも早く買つておかうと思ふ。財界は、借金をしてでもなるべく早く設備投資をして、増産をしようとする。必ず儲かるからです。その設備投資をする財界の行為、お金があれば早く買はうとする庶民の行為、それが物価を上げる。一割以上になったら、それが加速して来る。

私は昨年の夏、この日本国は、かうしてゐたらあと三年で目茶目茶になると思つた。勿論いざとなれば、大騒ぎをしてでも止めるだらうから、結局さうはならないとは思ふが、もしも止めることが出来ないと、信用組織がこはれてしまふ。人に金を貸すのは、この金は返してもらへると思ふから貸すのでせう。それが「信用」といふものです。銀行に預けた金が、引き出す時にはゼロみたいになるとしたら、預けるものはないので、信用組織は壊はれて行きます。汽車に乗るのは、大むね定期に目的地に着けると思ふから乗る。世の中はさういふ信頼の上に成立つてゐるのだから、その信頼が持てなくなつたら何うなるか。誰しも自分だけの生存を図ることになるだらうから、世の中は修羅場になる。一億一千万、お互ひに信用し合はなければ到

底暮せませんから殺し合ひになりますね。大へんおつかないことを言ふやうだが、このことを十分に自覚してみれば、もしも幸にインフレが止まって、消費者物価指数の総平均が上がりなるといふ状態になったら、何といいことか。物価が本当に上がらないとなったら、何と清々（せいせい）することか。何と安心して暮せることか。ベースアップなどといふこともなくなつて、全てに計画性を持てる。世の中の能率は物凄く上がります。これがインフレのない状態です。

ひと月で三%、四%と上がったのが十二月乃至二月でした。ひと月で三%とすれば年率で三六%だから、これは物凄い危険状態です。これは石油危機であつたからさうなつたので、それが二月で終つたといふのは、三月は〇・七%しか上がらなかつたからです。その後は月によつて若干の幅はあるが狂乱物価と言はれた時のやうには上らない。やうやく日本人のインフレ意識も少しは進歩したやうですが、国民の理解が進まないといふインフレは止まりません。

△国民春闘など▽

四月には狂乱物価の勢ひを受けて、三二%といふベースアップがあつた。すでに狂乱物価で三〇%近く消費者物価は上がつてゐるのだから、それを追ひかけたやうな形になつた。少しはみ出してゐるが、私はあんまり気にしません。物価といふものは、上がる原因を与へた以上、その原因が「原因力」を失ふところまで、物価は上がるほかない。上がったのは悪いことだか

ら、下げろ、下げると主婦連をはじめ国民は言ふが、あれは駄目です。上がったら上がったところで、もうそれ以上は上がらないやうにするのが「インフレの終熄」です。インフレを処理するには「高値安定」しかない。高値でも、止まってくれたら、前述のやうな大変いい状態になる。上がったことは悪いけれど、もう後の祭りですから我慢しようではないですか。本當言ふと物価を上げる原因を与へたのが悪い。例へば田中総理が「日本列島改造論」を打ち出したのは、原因を与へた。適例ですが、それは実際に消費者物価が上がって来る半年も前のことです。だから、いまさら仕方がないのです。ですから、上がった物価はそのまま我慢して、これからは絶対に上昇原因を与へないことです。

春闘の最中に「交通ゼネスト」があった。二日間、飛行機も含めて交通機関は全部とまった。一般労働者はストをやってもいいが公務員、公共企業体従業員はストをやってはいけないといふ法律がある。憲法二八条には団結権、団体交渉権が保障されてゐる。総評や社共の人達は、団体交渉権の中に争議権といふものがあるのだから、憲法は争議権を認めてゐるのだと主張する。しかし憲法には争議といふ言葉は使つてゐない。ただ団体交渉といふ言葉だけ使つてゐる。そこで国会は別の法律を出して、公務員、公共企業体従業員は争議行為を行つてはいけないと言つてゐるのですが、左翼の人達は、その法律は憲法違反だと言ふわけです。

今度政府はゼネストが始まる前の日に、彼らの主張は間違つてゐるので政府はいままでの態

度は変へない、と宣言してしまった。だからいよいよストに入ったら、二日やってもおさまりがつかない。無期限ストになりさうになって、彼らも大いにあわてたらしい。そして三日目の午前十一時にストは解除した。

かうして今度こそ、特定な人達に対してストを禁止してゐる法律は違憲かどうか、大きくクローズアップされて問題になったのですが、別にこの騒ぎの最中に事件があった。ストがいよいよ始つた四月十一日に、警察が日教組の榎枝委員長をはじめ、多くの幹部の自宅捜査その他の強制捜査をやつた。榎枝さんは公務員ではないが教員は地方公務員ですから、今度の日教組のストは法律違反です。その指令を出した榎枝さんは三年以下の懲役になる筈です。とも角必ず起訴になるでせう。さうなれば明確に有罪です。私は榎枝さんその他が有罪になって日教組が潰れないはずはないと思ふ。教員の方は、多数日教組を脱退されるだらうと思ふからです。さういふ風に今度政府が追ひつめたことは非常にいいことで、これは近頃めづらしいプラスの事件です。

△日中航空協定▽

一昨年七月、田中内閣が出来て中共と国交を開始した。その時に、よせばいいのに中共の言ふ通り台湾を否認した。それを受けて中共は、航空協定を結ぶには台湾さんの青天白日旗、あ

れは国旗ではないと言へると大平外相に要求した。中華航空といふ国策会社の支店が日本にあるのも怪しからんと中共は言ふ。中共さんは台湾を何とかして潰しちゃうと考へてゐるが、兵隊ではかなはない。それでヒョロヒョロしてゐる日本を押し、日本を台湾から引き離す、といふ方向でいけば、台湾は潰れると思つて、その方針を日本に対して実行してきた。

大平さんは一月二日に北京に行つて、中共の申出をみんな聞いて来た。それで四月の二十日に、中華民國の青天白日旗は国旗ではない等々のことを言つた。中共はそれでよろしいと言ふので日中航空協定は調印された。国会も承認した。九月までには細目が決つて、やがて飛ぶやうになるでせう。しかし、これと同時に、日台関係は極度に悪化し、日航と中華航空とは、共に飛行を取りやめた。

しかしいま台湾に行く便は、日華以外のどの便もお客がいっぱいです。北京への便は、日本人が大勢行けば相当になるかもしれないが、ちょっと考へられない。この間筑波大学の福田信之といふ人が一行六人で上海から北京に飛んだ。ソ連製のイリュージン、八〇人乗りか何かあまり大きい飛行機ではなかつたさうですが、向ふの研究所のご招待で行つた学者達です。他に乗客は、北京からお迎へに来た人三名と他に外人が一人ゐて全部で十名しか乗つてゐなかつた。北京と上海といふ大事な都市を結ぶのに、一日に一往復乃至二往復しか便がない。それで十人しかお客がゐない。それが中共の状態です。これと引き換へに、日本航空の台湾への航

空路が中断したのだから、企業的にみても実につまらないことをしたものです。

大平さんは向ふに行つて、そんなことは出来ない、日中国交開始のときも台湾との関係は、文化経済に関する限りは元通りだと言つてあるではないか、と言へばよかつた。台湾の飛行機が来るのは当り前で、それに国旗がつけてあるのも当り前だ、と言へばよかつた。それが嫌ならお前さんとは航空協定は結ばない、と言つて少しも差し支へなかつたのだが、それが田中内閣、大平外相には出来ないのです。これは私の考へですが、中共と国交を開始するのは大変いい、しかし台湾とは元通りでなければならぬ。現実に二つ国があるからです。もしも二つの国が一つになったら別の話。現に一つでない以上仕方がない、と言つてゐればいいのです。何でもないことなのだが、それが出来ないといふのは、日本の姿勢がいかにか駄目か、といふことを示してゐるのです。

△参議院選挙▽

この選挙では、自民党が勝つと思つてゐたら、意外にも負けた。その結果、三木さん、保利さん、福田さんが田中内閣から脱けて、妙なことになつた。七月二十四日から三十一日までの「臨時国会」は、議長と委員会の構成を決めただけで、所信表明演説もなしで終つた。自民党はいろいろな非難に対して自己改造をやると言つてゐるが、どういふ風におやりになるかは、

国民の一番聞きたいところです。ところが田中さんは臨時国会には法案を提出しないから所信表明演説はしなくていい、といふ窮した理屈で押し切った。会期の八日間を先に決めてゐたので所信表明なしで押し切れたのですが、それが田中内閣の姿です。

市川房枝とか青島幸男とかいふ人が、お金を使はないといふことを強調して高位当選した。このことはお金を使ふ選挙が悪いといふことを、国民が強く思つてゐるからでせう。確かに自民党は財界からお金をもらつて生きてゐる。いけないと言へばその通りですが、それならば労組からお金をもらつてゐる社会党その他は一体どうなのか。共産党が得意なのは、「赤旗」の販売などで儲けてゐるので誰からも貰つてゐないと言ふのですが、財界からお金をもらふのは、それ自体としてはさうひどく悪いことではない。ところが田中さんの場合は田中個人のお金だから差支へないのだ、といふのです。使つた額は五〇〇億とか六〇〇億とか言ひますね。しかしどこからそれだけのお金が入るか。田中さんは自分で貯めておいたといふが、とても何百億の金をいままでに儲けたとは思へない。誰かが貰いでゐるのでせう。もっとも「あの人はいい政治家だ、国家のためにあの人が入り用のお金はいくらでも出させよう」といふのなら、決して悪いことではない。問題はその使ひ振りでです。何にしても「やみ金」が何百億も動くやうで、国政がまともであるはずはない。そんなことに対しても「所信表明」が欲しいのだが、うっかり質問されるとどうにもならなくなると思つたのでせう、田中総理は所信表明なしで押し

切ったのでした。

以上が過去一年、日本であったことの概観ですが、それをみて何が言へるかといふと、私はこの秋九月から先の政界は、大荒れに荒れると思ふ。参議院選挙の結果、保革伯仲ですから、参議院では委員会の委員長もいくつかを野党に譲らざるを得なくなつた。それでも委員会の中には、野党の委員の方が多いのも出るといふわけで、いままでのやうな国会運営はできない。いざといふとき多数で無理押しすることができない。参議院で出来なければ衆議院でもやれない。だから国会運営に「地殻変動的变化」が起つたと新聞は言ふ。福田さんは辞職したことによつて、体よく内閣から追ひ出されたのだと思ふが、田中さんはこれで自民党は完全に俺が一手に掌握することが出来た、と思つてをられるでせう。しかし田中さんにとつて困ることは、野党が不信任案を出した時に、三木、福田派が欠席すれば不信任案は通つてしまふ。もつともこれは道義上は脱党するか党を割るかしなければ出来ないことですから、やらないかもしれないが、何かほかのはずみで不信任が通るかもしれない。とにかくさういふわけで現在は全く容易ならざる形勢です。占領終了の一九五二年から二十二年間、日本では世界でも珍らしい一政党による安定政権であつたわけですが、今度はそれが大いに變つた。だから何にしても政界は一応荒れに荒れるでせうが、その結果いい政治が生れてくれれば幸ひ、益々悪くなるかも知れ

ない。

日本もいづれはいい政治になると思いますが、それは半年や一年ではどうにもならない。一度は慘憺たることになって、心ある日本人は皆青くなって心配するといふところを経なければいけないのかも知れない。しかしなるべく軽く、あんまり青くならないで済むやうにしたいといふのが我々の志です。突き落さないといくならないのなら、突き落す側にまはってもいいが、私の人生経験から言っても、どんな場合でも最悪の状況を予想し、禍ひを少しでも避けようといふやうな姿勢で考へ、努力し、それを続けてゐれば、実際に悪くなった時に心も落ちついてゐるし策がある。しかしさういふ覚悟なしに仕様がなとして投げてゐたら、実際に落ちた場合に、どうしたらいいかわからなくなる。たとへば戦争中、私は勝てるとは思はなかつたが、せめて負けないで済むといふために、上海にゐるやうが東京にゐるやうが、渾身の力を使つてゐた。終始一貫、誠心誠意努力してゐたといふところから来る心の落着きからでもありませうか、負けた後も、これからどうしたらいいかといふことは、割合楽に考へられた。

三、過去一年の世界の出来事

前述の中東戦争、資源問題、石油危機に続いて、「人口問題」が世界の意識のなかに登場した。これは「食糧問題」と言つてもいい。石油の次は食糧だと誰しも言ふ。ところで食糧は増産

すればいまの倍ぐらゐにはなる。ところが人口の増加はそれでは止まるまい。先進国はあまり殖えないが、問題は後進国だ。ワンジェネレーション、約三〇年で人口は倍になる。いまの三七億は三〇年後には七四億です。六〇年後には一四八億といふことになる。六〇年先といふのは、実際は目の先です。その間に食糧を四倍にすることは、地球といふ天体からみて、不可能でせう。だから後進国に対して先進国のやうに人口制限をしてもらふほかはない。また一方、食糧に関しては、作れるところは自分でお作りなさい、作れないところは、自分のお金で買ひなさいと突き放すほかに手はない。いまの後進国はみな独立だと言つてゐるのだから、自分で責任をとらせるのがいい。いままでのアメリカのやうに、お世話やきで、食糧が足りないといへば援助する、といふのではいけない。インドでアメリカ人は産児制限を教へ廻つてゐるが、これも向ふにまかしておけばいい。習ひたかったら教へてあげると言つてゐればいい。私は人口問題は各国の自己責任に追ひ込めといふ意見です。

ウォーターゲート事件はいよいよ裁判沙汰になるでせう。下院でニクソン弾劾の裁判をやれといふことになるでせう。さうしたら上院が裁判所を構成する。そこで三分の二が「ノー」と言へばニクソンはアウト。三分の二が得られなくて、一票、二票の差でニクソンは免れるかもしれない。その中間においてニクソンが、「世間をお騒わがせして済まなかつた。これは不徳の致すところだから、法律上はやめなくてもいいが、道義的責任上辞める」といふことで辞職

することも考へられる。これは十一月か年内いっぱいには決まるでせう。どちらにしてもニクソンは惨憺たるものです。満身創痍です。もしも勝って生き残ったら、なほ悪いかも知れない。これはしかしニクソン一人が悪いのではなくて、アメリカの政治が悪いのです。アメリカといふ国がいかに落ちぶれたかといふことです。議会制民主主義、二大政党政治をいいものとして信じてきたが、さうでないことを実証してみせてくれてゐるわけです。朴正熙大統領を叱るときに、お前は民主的でないからと言ふでせう。そのアメリカ自身が、何といふ不様なことか。日本も同じで、議会制民主主義は全く駄目だといふところに追ひ込まれた。ではどうしたらいいか。

アメリカは落ちるばかりではなく、この頃はよくなって来たといふ観察もある。何かアメリカの中にこれではいけないといふ新しい動きが始つてゐることが認められる。しかしそれが何なのかは、まだ私にはわからない。イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、オーストラリア、カナダに至るまで、全部指導者が交代したやうですね。先進国とは言へないかもしれないが、スペインも変つた。同じくチリでは、革命政権が潰れてあとどうなるか。アルゼンチンもペロン大統領が亡くなり夫人が後を継いでゐる。かうして世界中は、政治的に惨憺たるものです。ソ連が一番無事です。その代りさっぱり冴えない。ソ連の国民がおとなしいからでせうね。ソ連は宇宙開発なんかすばらしいのだが、国全体は大したことはない。

妙なことになってきたわけですが、全世界が。

石油輸出国が団結したことは先ほど述べましたが、その他にイスラム教国の団結といふものもあるのです。さうなるとインドネシアまではひびいてくる。産油国はいまあり余るドルを持つてゐる。そのドルでアフリカなどの後進国の援助をやると言ひ出した。イスラム教国を助けるともいふ。もしさうなると、世界に珍らしいことが起る。この間パキスタンのラホールでイスラム教国は会議をやった。かうして宗教による団結が、意外にも、この物質的な世の中、ヨーロッパ文明に支配されてゐる世界に、突如として現はれるかも知れません。

第三地域はどうかといふと、インドもパキスタンもえらいことになつてゐるが、パキスタンとパングラデッシュとの関係も、和睦したかといふと必ずしもさうでもない。あの王様のゐるエチオピアでも異変があつたでせう。先に述べたチリ、アルゼンチンもさうですね。タイ国でも学生が騒ぐ。タイは非常におとなしい国民性で、騒ぎをやるとは考へられなかつたのですが。

全世界が蜂の巣をつついたやうに実に妙なことになつて来てゐる。中共は孔子さまを反撃し始めた。つまり文化大革命の推進といふのですが、それで文化を潰してゐる。では毛沢東はそれに代はるどういふ文化を持つてゐるかといふと、私は彼自身の頭の中でも明確になつてゐると思ひません。代はる文化の提出なしに、旧文化をただ我武者羅にやつつけてゐるのだから永持ちしない。しかもいま中共では知識の一般的低下といふ事態が起つてゐる。まるで情報

を流さないのだから当然です。たとへば林彪が殺されたことさへ知らない中国人がまだ多いのではないでせうか。周恩来の病氣も新聞に出ない。大学で言へば、世間の事は全然知らずにマルクスや資本主義を論じても意味をなさない。ですから中共の場合に一番注目すべきことは知識の一般的低下です。我々が知識過剰で悩んでゐるのに対して、ソ連、中共、北鮮等は、何も聞かされてゐない。彼らは彼らなりの欠陥がある。その結果としてでせう、中共はどうもかしい。あと三年持つかな、といふのが私の考へ方です。それと対照的に、台湾はすばらしい。石油危機も日本との外交関係途絶も、うまく処理して耐へてゐる。経済もすごくいい。その点、台湾は世界の模範国です。

四、「新しい世界」への行進開始——

△西欧文化は使命を完了したのか▽

さて以上述べてきた日本及び世界の情勢をどう解釈するか。ひとこと言へば「新しい世界」への「行進の開始」であると言へる。三年ぐらゐ前から私は気が付いたのですが、過去一年の状況を見たら全く誰の目にも、全世界は猛烈な勢ひで変わりつつあるといふことがわかるはず。なぜ変るかといふと、理由はいろいろあるのですが、その中で先づ気づくことは西ヨ

ヨーロッパの文化は使命を完了したといふことです。

西ヨーロッパの文化といふと、キリスト教文化ですが、実はギリシャ文化ですね。ギリシャ的な考へ方では、人間が最高のもの、つまり神様です。ギリシャ神話では、神様が人間と同じスタイルで恋愛もし喧嘩もする。しかしさういふ文化が、物質世界を料理していく技術を發明するのには最も適してゐたのでせう。歴史的経過でいふと、ギリシャ文化はローマに引きつがれたのですが、そこにキリスト教が入ってきて、ローマがキリスト教を国教とするやうになつて中世になる。ギリシャ的に見れば、これは「暗黒時代」です。それが十四世紀頃からギリシャ精神の復活、いはゆる「ルネッサンス」になり、近代ヨーロッパが生まれて来る。彼等は依然として中世流のキリスト教国でしたが、「宗教改革」もあり、宗教戦争を盛んにやつてゐるうちに、宗教にあきて個人の精神的安心とか満足とかいふ方に重心が移り、宗教が国家を動かすことはなくなつて来る。そして、ギリシャ的な考へ方で自然、物質をどう料理するかに専念する。かうして自然科学がものすごく発達し、生活内容は充実し、現在みるやうに世界は一体化することになった。この現状は、ヨーロッパ文明が達成してくれたことです。嫌な面はたくさんあるが、今日の我々の高度に富裕な生活は、これによって支へられてゐる。日本を例にとれば徳川時代は三千万人しか日本といふ島に生きられなかつた。それが現在は、一億一千万人がせいたくに暮してゐる。寿命も永くなつた。これらはみなヨーロッパ文明のもたらしたもので

す。全世界の大きな歩みは別にあるのかも知れませんが、その中で「ヨーロッパ文明」は世界の富裕化と一体化といふ大きな仕事をした。いま世界中どこへ行っても自動車走り、飛行機が飛び、同じやうな考へ方が通用する。さうですね。

ところがいまやこのやうな自然征服的な人間の生き方に、大自然の方が負け色になって来た。たとへば石油はみんな使ひ切つてしまふかもしれない。水産資源もかなり危ぶまない。これは大しておいしくもない海老が、駅弁の中にまで入つてゐる結果かも知れませんが、日本は水産国といふが、水産資源では入超です。随分とせいたくの出来る世の中になったものですが、その行き過ぎで大自然を汚したのみならず、人間の心をも汚してゐる。だから人間はいま見る如くだらしくなつて道に迷ふのでせう。いまや進歩した国では、人間の自然征服は上限に達したと言へる。もっと自然を上手に使つて、もう少し精神的に上等な生活をしたらいいと思ふ。後進国はこれから大いにいまの先進国を習はねばならないところだから、そんなことを要求しても無理でせう。世界は非常に偏頗です。自然征服的な生き方では自分の心がすさんでしまふからもうたくさんだといふ国があるかと思へば、さうではないこれからだ、といふ国もある。世界は一体化してゐるから、その違ひが非常に目立つわけです。だから遅れてゐる方はブービー言つてゐる。

そこで新しいスタイルの質的に深刻化した抗争が起る。戦後今日まで「自由主義と共産主義

の喧嘩」といふやうに割り切つて来た。戦前なら「列強の争覇戦」だった。ところが今度は、アラブのやうに後進国に團結されて資源を握られたら、戦争に訴へざるを得ないことも起り得るし、名状すべからざる混乱状態になることも考へられる。その混乱抗争は、大抵の場合、国内の方が熾烈です。例へば、イギリスでは国会に爆弾が投じられたでせう。ごくつまらない北アイルランドをどう治めるかといふことから。あの常識的な、悟りきつたやうな政治のやり方を自慢してゐたイギリスで、そんなことがおこつてゐる。いまのウィルソン労働党政権の与党は少数です。これまでは労働党あるひは保守党は互に勢力が均衡してゐても自由党と組めば多数を制することが出来た。ところが今度は自由党と握つても多数にはならない。スコットランド党とかウエルズ党とかが進出して来たからです。スコットランドをもつと可愛がるといふのがスコットランド党ですが、北海に油田が発見され、ノルウェーと協力して開発することになった。するとこれはスコットランド沖だから、あれを使ふのはスコットランド人だと言ふ。我々から見れば仲よくイギリスといふ国を盛り立てたらよささうなものに思ふのですが。実際に入様のことはわからない。だから世界がわかつたやうなことをいふのは大嘘で、実にわからないのです。インドの国内なんかどうなつてゐるのですかね。とにかく名状すべからざる乱戦状態が起つてゐるが、要するにヨーロッパ文明といふものが、使命を完了して新しい文明の登場を待つ」といふところにさしかかつてゐるからこそおきてきた現象でせう。

△新しいグローバルベインスの煩悶▽

以前の日本では、国のためだと言つてゐればみんながついて来た。ところがいまはナショナリズムでは国をひっぱるほどのものがない。ただのナショナリズムでは、何を何うするかはつきりしない。単純に敵兵が攻めて来るやうだといひのだが、狙ひ方が高級で高次元になつて来た。中共もソ連も日本を狙つてゐる。原子力をちらつかせながら日本を脅し、脅しながら台湾を潰してしまふ、といふやうなことになる。それが成功すれば日本は国内分裂を起して、本当に弱体化するし、中共にとっては日本を征服することもむづかしくないことになるでせう。さういふやうなやり方をされると、単純なナショナリズムではとても対抗できない。

何を何うしていいかわからない以上は、努力目標の喪失となるので、「生き甲斐」といふ問題が登場する。一体何のために生きてゐるのか。私の子供の時ですが、日露戦争の頃であつたら、本当に挙国一致で戦勝のために努力することが生き甲斐だつた。実は明治維新以来、さういふ時代がずっと続いてゐた。ところが大東亜戦争ともなると、この戦争は嫌だなんて言ふ者も出て来たし、従つて、戦勝のための努力に一所懸命になれない、といふことになる。私の場合は、どうにかして負けないやうにと努力することが、戦争当時の生き甲斐だつたが、さういふ努力に生き甲斐を感じ得る境遇に身をおけるといふことは、今日ではむしろ例外的になつて

きた。つまり各人が国の運命と直結しないわけです。だからあなた方も、よほど上等な人間にならないと、国の運命と自分とが直結しない。生き甲斐とは何か。自分より大きなもののために何かをやってゐれば、それを感じます。昔はそれが單純に国であつたわけだ。ところがいまは複雑で、一体生き甲斐はどこにあるのだなどといふことが真面目な論議の対象になつてゐる。これは日本だけのことではない、世界の文明国を通じて、同じでせう。

五、日本国の特異性とその文化の特質

日本の国といふのは独特の歴史をもつてゐる。一言で言へば、外部の侵略を受けたことがないし、そもそも国が誕生するときも、大した喧嘩はなかつた。支那と比べるとよくわかる。孔子さまの時代は春秋時代ですね。その時代も戦国と同じやうに戦争ばかりしてゐた。その前に夏、殷、周といふ大帝國が盛衰興亡したことになるが、夏といふ国のことはほとんどわからない。何にしても黄河のほとりで、北方から異民族の脅威を受けながら、相互の争ひにあけてゐた。その争ひの中から文明が生まれて来るのです。日本では少しは争ひはあつたが、ほとんどなしに国を成して来る。大和朝廷の出来たのは何時頃か知りませんが、飛鳥時代には国の姿は固つてゐた。ベンダサンが言ふやうに、それ以来、国内で戦争らしい戦争はない。保元の乱や平治の乱は問題にならない。少数の源平両氏の兵隊が、馬に乗ってやり合つた

だけです。一番大きな戦争は関ヶ原の合戦だらうが、実際にはわづかの時間の戦争で、すぐに勝負がついた。百姓が弁当持参で見物に来たといふ戦争です。国内にはむごたらしいことはほとんどない、ややむごたらしかったのが応仁の乱です。しかしその応仁の乱の頃、足利時代です、その頃に謡曲が出来てみたり、日本の文化はものすごく進む。徳川時代は戦国の後で、みんなが殺し合った後ですから、非常に永い平和が三百年も続く。明治維新といふ大変革が大政奉還といふことでほとんど血をみずに成就する。その徳川の最後の將軍の徳川慶喜さんが少したったあとでは、非常に尊敬された身分になる。さういふ動きといふのはよく考へてみると実にすごい、世界に類を見ないものなのです。

どうしてそれが世界に独特かといふと、先ほど述べました今年四月の「交通ゼネスト」が収束された時、「五項目の合意」といふものが出来ましたが、これは読んでもわからない。わからないやうに書いてある。この頃のはやり言葉で言ふ「玉虫色の文章」といふものです。玉虫はあちらからは赤く見えて、こちらからは青く見える虫です。双方から自分の有利なやうに解釈出来る協定を作つて、それで妥協した。総評も政府も、これでいいのだと言ふ。ああいふ文章が書ける国民は、全世界に日本国一つです。絶対によそにはない。ほかの国にはさういふメンタリテイがないのです。これが日本語の神秘不可思議なところですね。日本語といふのは、もとは大和言葉ですが、そこに漢字漢文学が入つて来た。中国では漢字は、勿論支那読みにし

てゐる。日本では、その支那読みに近い「音」のほか「訓読み」といふものを発明して、支那語を日本語として読む。返り点、送りがなをつければ、文章も日本語として読める。お経でも何でも日本語読みといふのが発達する。さういふ特異なやり方を発明した国民です。

また日本人は、めつたにノックアウトをやらない国民です。泥棒にも三分の理といふわけです。ものごとは全て良し悪しだと言って、常に対立を容認してゐる。交通ゼネストでみても、相手をコテンコテンにやっつけて根だやしするやうなことはしない。ヨーロッパ人特にユダヤ人は、徹底してやっつける。アラブもさうだ。全世界がさうでせうね。だから彼らはむごたらしい闘争をする。それを全然やらなかったのが日本国です。実に不思議な国民です。それは天皇制があつたからだとも言へるし、だからこそ天皇制といふものが出来上り、維持されて来たとも言へる。さういふ特殊な歴史、特殊な国民性を持つてゐるのが日本の文化です。日本文化とは生け花やお能にばかり見られるのではなく、ものの考へ方の全部、国の動きの全部にあるし、またそれらを支へてゐるものが文化だと言へるのです。その文化に着目すれば、そこにわれわれがものを考へるべき拠点が出来るわけです。

六、世界と日本は、これからどうなるか。どうすればいいのか。日本文化はどのやうな意味を持つのか

世界がかうもわからなくなって来たのだから、世界の現状を意識しながら、各自は、自分自身、あるひは自分の所屬する身近な家庭、学校、会社の問題に、自分の力の及ぶ範囲で取り組みながら、日々に処してくれたらいいと思ひます。

「それは世界の問題だから俺は知らない」といふやうなことは言はないことです。個人も家庭も、会社も何もかも、世界に影響されてゐるのだから、それを意識しながら、しかも自分の力の範囲で自分に直接関係のあることに、全力をつくす。世界の問題を意識しながら、自分の問題に対処することが出来たら、それが悟りでせう。一人でもそれが出来るやうなら、全部が出来るとせうね。全部が出来た時は、日本の救ひになるでせう。

国単位で考へても同じことです。日本といふ国が、全世界の問題を意識しながら、うまく生きて行けば、それは即ち世界の救ひだと思ふ。日本人は、全世界の問題を意識して、それに対応しながら、「ああ、これでいいのだなあ、かうすればいいのだなあ」と思へるやうな日本国を作ればいい。それは日本の救ひであると共に、世界の救ひになる。日本は東西融合文明を作る運命にあるのだが、さういふ世界の救ひになるやうな日本国を作る場合の手引きは、申すまでもなく日本文化です。ですから、日本文化の理解が、どのくらゐ深く正確であるかといふところが実に肝要です。それが個々の人間と日本との運命を左右する。それでは一体どのやうなイメージで考へればいいのか。二十年かかるものなのか、五年で済むものなのか。かういふ問

題の解決は、三年でいいつもりが実は五年かかり、振り返ってみたら十年、二十年かかってゐた、といふものでせうね。だが、二十年かかってかうなるのだ、と今日の瞬間にわかれば、一日で問題は解決したわけでせう。ただし、二十年待ってゐなければ、実証が出て来ない、といふだけです。だから解決には、必ずしも時を待つ必要はないのです。ただし実証が得たいなら待つ必要があるといふだけです。実証といふものは急には出て来ない。

さてそこにまた、「理解」といふことの限界があるのです。いくら勉強しても、理解といふものはしれてゐます。いまは情報過剰でみんな情報に溺れさうになってゐる。溺れるといふのはどういふことかといふと、頭が悪くなって、どうにも意欲がなくなる状態と思つていいでせう。どうか理解といふものの限界を弁へていただきたい。さうしてただ情報を集めればいいのだといふやうには考へないでもらひたいのです。では理解に限界があるとすればもう駄目かといふとさうではないのです。

私のものを考へる基礎になつてゐるのは「一葉落ちて天下の秋を知る」といふ東洋の言葉です。私に『社会科学方法論』といふ短かい論文がありますが、その中にたった一枚の葉が落ちるところを見て天下の秋を知る、天下といふ全体がたった一枚の葉でわかるのだといふことを書いた。一枚の葉が落ちるのでは足りないと言つて百枚でも千枚でも葉の数をいくら増やしても、天下の秋は見えない。千枚の葉は千枚の葉で、天下の秋ではない。言ひ換へれば一葉で知

る以外に天下の秋の知りやうはないといふこと。わかりますか。葉っぱが一万枚落ちたから秋だと言へるのではないのですね。また葉が落ちるばかりが秋ではない。夏が秋になりやがて冬となり、また春になり夏になる、その全体のなかの秋なのです。さうお考へになれば、たった一枚の葉、つまり部分を捉へて全体がわかるといふこと以外に、ものはわかりやうがないのだといふことがわかる筈。さうなると「理解の限界」なんてものは、あるやうでないやうなもの、たった一つのことです。全部がわかる。金大中事件を知っただけで、いまの日本がわかるといふことです。問題はそのやうな眼光をどうして養ふかといふことなのです。

結 論

結論の出し方はいろいろありませうが、不明・不可思議と知るところに救ひがある。

要するに世の中のことは、本当にはわからない。不可思議といふ言葉がありますが、それは思議すべからずであって、思議してはいけないといふことですよ。思ひめぐらしては本当はいけない。心が狂ふのです。生意気なことは考へてはいけない。それを不可思議といふ。わからないことは、そっとしておきなさいといふことです。本当のことはわからないのだ。それでいいのだといふところに到達するに至って、始めて何でもしゃべることも出来るのです。ここで私がいくら一所懸命話したところで、皆さんには本当はおわかりにならない。またあなた方

が一葉落ちて天下の秋を知るといふ心境に立つてゐれば、私がこんなにおしゃべりをしなくても、おわかりになる筈です。だからうまくしゃべれば、うまく考へれば、論理を整へればわかるといふものではない。さういふことがわかるのが、ものがわかることなのです。それが東洋思想ですから、いまの世界の難局はこのやうな見地に立つ以外に解決はないと思ふ。さうすると議会制民主主義のやり方、インフレの処理の仕方、農業のあり方、人口配置のあり方、医療制度の問題等々、ありとあらゆる問題に対して、解決が出て来る。これらの問題の解決を、日本は日本らしくやってみせることが、世界に対して日本の使命を全うする、あるひは世界に対して何かものを教へてゐるといふことになるのです。教へようとして教へるのではないが、どこかで一人が悟りを開けば、それが他に及ぶ。人を教へようが教へまいがどうでもいい。しかし自分は、かうしてはをられないから、自らの力の及ぶ限り、自分の問題を解決すべく、最高の努力をするのです。それでいいと考へる、その背後にあるものは、日本文化の特異性です。日本文化の特異性に十分めざめることが、とにかく救ひの第一歩だと私は考へてゐます。

（世界経済調査会理事長）

信ずることと知ること

小林秀雄



近代科学の方法

信ずることと知ること

△質疑応答▽

鏡の浮彫（大戸南古墳）

近代科学の方法

この間から、ユリ・ゲラーといふ青年が念力の実験といふのをやりまして、大騒ぎになったことがありますね。私の友達の今日出海君のお父さんといふのが、今は亡くなりましたが、日本郵船の、日本で一番古い船長さんでした。その人が船長をやめてから、心霊学といふものに凝って、インドの有名な神秘家、クルシナムルケといふ人の会の会員になりました。だから僕はああいふことは学生の頃からよく知ってゐました。ただ念力といふやうな超自然的現象についての話が、世間を騒がすといふ事は、時々ある。私は、さういふ現象は常にあるが、これが世間の大きな話題となるといふ事には、いろいろな条件が必要だ、たださう考へてゐます。ああいふ不思議がいつもある、いつも私達の生活には随伴してゐる事を疑ひません。ところが、これを扱ふ新聞や雑誌を注意して見てゐますと、その批評は実に浅薄なのです。世間には、不思議はいくらもあるのですが、現代のインテリは、不思議を不思議とする素直な心を失つてゐます。テレビで不思議を見せられると、これに対し嘲笑的態度をとるか、スポーツでも見るやうな面白がる態度をとるか、どちらかでせう。今の知識人の中で、一人くらは、念力といふやうなものに対してどういふ態度をとるのが正しいかを考へる人がゐてもいいでせう。ところがゐない。彼等にとって、理解出来ない声は、みんな不正常なのです。知識人は本当に墮落

してゐます。皆おしゃべりばかりしてゐますが、さういふことに対する正しい態度がないので
すね。

僕が丁度大学に入った時分、ベルグソンの念力に関する文章を読んだことがあります。諸君
に何かお話ししようと思つて、この間また読み返してみました。その文章は一九一三年に、ベル
グソンがロンドンの心靈学協会に呼ばれて行つた講演の筆記なのです。（註・白水社刊・ベルグ
ソン全集第五卷「精神エネルギー」の中の「生きてゐる人のまほろし」と「心靈研究」—渡辺秀訳）その大
体のところをお話しませう。ベルグソンがある大きな会議に出席してゐた時、たまたま話が精
神感应、テレパシーに及んだ。ある人が、フランスの名ある学者——この人は医者ですが——
に向つてかういふ話をした。この前の戦争の時、夫が塹壕で斃れたところを夢に見たのです。パリにゐた
その夫人は、丁度その時刻に夫が塹壕で斃れたところを夢に見たのです。それをとりまいてゐ
る数人の兵士の顔まで見たのです。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫はその夫人が
見た通りの恰好で、側を数人の同僚の兵士がとりかこんで、死んだのです。これは、夫人が頭
の中に勝手に描き出したものと考へることは、不可能です。どんな沢山な人の顔を描いた経験
を持つ画家も、見た事もないたった一人の人の顔を想像裡に描き出す事は出来ない。見知らぬ
兵士の顔を夢で見た夫人は、この画家と同じ事です。夢に見たとは、たしかに念力といふ知ら
れない力によつて、直接に見たに違ひない。さう仮定してみることは、何の不合理もないので

す。ところがその話を聞いて、医者がかう答へたといふのです。私はその話を信ずる。夫人は立派な人格の持主で、嘘など決して言はない人だと信じます。しかし、困ったことが一つある。昔から身内の者が死んだ時、死んだ知らせといふものは数限りなく多い。けれども、その死の知らせが間違つてゐたといふ経験も非常に多い。無数の正しくない幻があるでせう。どうして正しくない幻の方をほつといて、正しい幻の方だけに気をつけるのか。たまたま偶然に当つた方だけをどうして取上げなければならぬか、とかう答へたといふのです。ベルグソンは横でそれを聞いてゐたのです。さうすると、そこにもう一人若い女の人がゐて、その医者、「先生、先生のおっしゃることは私にはどうしても間違つてゐると思ひます。先生のおっしゃることは、論理的には非常に正しいけれど、何か先生は間違つてゐると思ひます」と言つたといふのです。



ベルグソンは、私はその娘さんの方が正しいと思つたと言ふのです。

これはどういふことか。ベルグソンはその講演で、かういふ説明をしてゐます。一流の学者ほど自分の方法といふものを固く信じてゐる。それで、知らず知らずのうちに、その方法の中に入れて、その方法のとりこになつてゐるものだ。だから、具体的ないろいろの現象の具体性といふものに目をつぶつてしまふ。今の場合でも、その医者は夫人の見た夢の話を好きやうに変へてしまふ。その話は正しいか正しくないか。夫人が夢を見た時、たしかに夫は死んだか、あるひは間違ひで夫は生きてゐたかといふ問題にしてしまふといふのです。しかし、その夫人は問題を話したのではなく、自分の経験を話したのです。夢は余りにもなまなましい光景であつたから、それをそのまま人に語つたのです。それは、その夫人にとって、たった一つの経験的事実なのです。医者はそれを主観的だといふのです。そんな馬鹿なことはないぢやないか。本当に切実な経験といふものは、主観的でも客観的でもないですね。つねられて痛いと感じる経験と同じです。痛いといふのは主観的なことか、客観的なことか。どっちでもないぢやないか。本当に直接には僕の心の中の経験ぢやないか。夫人が夢に見たなまなましい話を、たしかに夫は斃れたか、斃れなかつたかといふ問題にすりかへてしまふと、夢が正しい場合の数と、間違つた場合の数を比較しなければならぬし、さうすれば間違つた場合の方が無限に多いでせう。當つた方は偶然といふことになるでせう。なぜ偶然といふ結論が出るかといふと、

夫人の経験の具体性を信じないで、果して夫は死んだか、死ななかつたかといふ抽象的問題に置きかへるからだといふのです。

かういふ話では諸君なかなか分りにくいでせう。その底にベルグソンの大きな哲学がありますから。今日学問といへばみな科学です。しかし、この科学といふものは、始まってからまだ三、四百年しか経ってゐないのです。科学的精神などといふのは、ほんの近頃の風潮なのです。経験科学といふことを言ふでせう。ああいふ言葉が非常にまどはしい言葉なのです。経験といふものは、人間昔から誰でもしてゐることですが、この人間の経験なるものを、科学的経験といふものに置き換へたといふことは、この三百年來のことなのです。そのために今日の科学は非常に大きな発達をしましたが、この科学的経験といふものと、僕らの経験といふものとは全然違ふものなんです。今日科学の言つてゐるあの経験といふものは、合理的経験です。大体、私たちの経験の範囲といふのは非常に大きいだらう。われわれの生活上の殆んどすべての経験は合理的ではないですね。その中に感情も、イマジネーションも、道徳的な経験も、いろんなものが入つてゐます。それを、合理的経験だけに絞つたのです。だから科学は、人間の大きな経験を、非常に小さい狭い道の中に押し込めたのです。これをよく考へなければいけないのです。科学といふものは、計量できる経験だけに絞つたのです。いろいろな可能な方向に伸ばすことができる広大な経験の領域を、勘定することのできる、計量することのできる経験だ

けに絞った。さういふ狭い道を行つたがために、この学問は非常に発達したのです。だから、今日の科学といふものは、数学がなければなり立ちません。一番先に天文学ができたでせう。それから力学、物理学、生物学、化学といふ風に、だんだん発達して来たけれども、理想とするところは、いつでもはつきりした計算です。だから、近代科学といふものの法則を定義すれば、それは一つの計量できる変化と、もう一つの計量できる変化との間の、コンスタントの関係といふことです。科学はいつでも、この法則の下にあるのです。科学は法則に従ふ経験だけに人間の経験を狭めたのです。さういふことを諸君ははつきり知つてゐなければ駄目です。

科学では計量といふことが一番大事なことだから、十七世紀以来科学が一番困つたのは精神の問題、心の問題だったのです。精神といふものは計れないだらう。科学は君の悲しみを計算することはできないだらう。だから科学は、人間の精神といふものを、人間の脳に置き換へたのです。脳の分子の運動さへ正確に計れば、精神といふものが正確に計れる筈であるといふ仮説を立てたのです。これが心身並行論といふ仮説です。脳髄は分子の運動から成り立っているのだから、その運動をたどればこれは数学に乗っかります。まだ未知だけでも、だんだん精密に計つてゆけば、「遂には精神に到達する、精神の法則が分るといふ道を科学は進んだのです。ベルグソンは、長いこと信じられてゐたこの脳と精神との並行関係を、始めから疑はしいものと思つてゐたといふのです。常識で考へてみよ。一体この自然には、無駄といふものがない

い。ある一つのもが、片方では脳髓の原子の運動に翻訳されて表現される。同じものが片方では意識の言葉となつて表現される。一体自然にとつて、こんな贅沢は許されるだらうか。もし本当に脳髓の運動と、人間の意識の運動、精神の運動が並行してゐるならば、どうして自然はこの二つの表現を必要としたのだらう。それなら、精神なんかいらぬぢやないか。盲腸は人間の器官として役に立たない不用のものだから、なくなつてしまつたぢやないか。無駄なもの、とうの昔になくなつてゐる筈ではないか。第一、習慣になれば意識などはいらぬでせう。そんな時には、諸君の意識といふものは、すっかり退化して、なくなつてゐるでせう。もしも、脳髓の運動と精神の運動が、同じものの二つの表現ならば、表現はたった一つでいいわけだといふのです。

それで、彼は記憶の研究に入つていったのです。なぜ記憶の研究をしたかといふと、人間の言葉の記憶といふものが、脳髓のある一個所にあることが分つてゐたからです。脳髓のある個所に言語中枢があり、その限られた局所が傷けられると失語症になるのです。あの人は失語症の研究を長い間したのです。さうして、あの人は天才的な発見をしたのです。今日細かいところはだんだん発達してゐますが、この発見の根本のところは動かないのです。それはどういふ発見かといひますと、精神と脳髓の運動は並行してゐないといふ発見なのです。脳髓の、記憶が宿つてゐると仮定されてゐるところが損傷されますと、人間は記憶が傷けられるのではなく

て、記憶を思ひ出さうとするメカニズム、記憶を感知する装置が傷けられるのです。そのため人間は記憶を失ふので、記憶自体は少しも傷けられてはゐらないのです。もしも並行してゐるならば、さういふ局所に損傷を受ければ、記憶そのものがなくなってしまうわけです。しかし、記憶自体はなくならないのです。ただそれを呼び起すメカニズムが損傷されたから、記憶がまるでなくなってしまうやうな状態になるのです。だから、脳髓の分子の運動を詳しく研究して行つて分ることは、ベルグソンのたとへでいひますと、それはオーケストラを指揮してゐる指揮棒だといふのです。指揮棒は見えるが音は決して聞えないといふのです。指揮棒は脳髓の働きで、音は精神なのです。僕らの脳髓はパントマイムの器官なのです。パントマイムの舞台で俳優がいろいろな仕草をするのを、僕らは見ることが出来る。脳髓の運動はさういふ仕草をしてゐるのです。けれども台詞は決して聞えない。この台詞が記憶なのです。精神なのです。だから脳髓は精神の機能ではないのです。脳髓は人間の精神を、この現実の世界に向けさせる指揮をとる装置なのです。だから彼は、人間の脳髓は现实生活に対する注意の器官であると書いてゐます。注意の器官だが、意識の器官ではないのです。意識を、この現実の生活につなぎとめる作用をしてゐるのです。人間はみな、忘れる忘れるといひますが、人間にとって忘れるくらゐむづかしいことはないのです。例へば溺れて死ぬ男が、死ぬ前に自分の一生を見るとか、山から転落する男が、その瞬間に自分の子供の時から歴史をばっと見るとかといふ話はよく聞

くでせう。それは記憶なんです。その時、その人間は、この現世、現実生活といふものに対する注意を失ふのです。この現実に対して全く無関心になるのです。けれども人間はこの脳髓といふものを持つてゐるお蔭で、いつも必要な記憶だけを思ひ出すやうになってゐるのです。脳髓はいつでも、僕に現実の生活をするのに便利な記憶だけを選んで思ひ出させるやうにしてゐるのです。その注意の器官たる脳髓の作用が鈍ると、記憶はぱつと出て来るのです。だから諸君はいつでも、諸君の全歴史をみんな持つてゐるんです。それを知らないだけです。それを無意識といふのです。諸君が意識してゐるといふことは、諸君がこの世の中にうまく行動するための意識なのです。無意識はいつでも諸君の中にかくれてゐるのです。

丁度ベルグソンがさういふ発見をした頃に、心理学の方で無意識といふことが非常に大きな問題になったのです。だから、不思議なことといふものは、この世に溢れてゐるのです。精神といふものは、いつでも僕らの意識を越えてゐるのです。そして、いつでも表はれる機を狙つてゐるのです。さう考へれば魂といふものの存在も、頭から否定する事は出来ない。僕らが死ねば、靈魂はなくなるとみんな考へてゐる。だが、しっかりした根拠によつてさう考へてゐるのではない。それはやはり、この三百年來の科学といふものの考へ方にばかされてゐるんです。もしも、脳髓と人間の精神が並行してゐないなら、僕の脳髓が解体したつて、僕の精神は独立してゐるかも知れないではないか。これは常識で考へられることです。記憶と脳髓の運動

といふものは、並行してゐない、お互ひに独立してゐるのです。人間が死ねば魂もなくなると考へる、そのたった一つの理由は、肉体が減じるといふ理由しかないではないか。これは十分な理由ではないではないか。

僕がかうして話してゐるのは、僕の理性が話してゐるのですし、ベルグソンが一所懸命に説いてゐるのも、理性に従つて説いてゐるのです。けれども、これは科学的理性ではない。僕らの持つて生れた知恵です。持つて生れた理性です。科学は、この持つて生れた理性といふものに加工をほどこし、科学的方法とするのです。計算できるといふことと、理性があるといふこととは違ひませう。計算できるといふことは、ある学問の、ある方法だらうが、学問の種類は非常に多い事も考へなければならぬ。そんな方法だけに従はなくても、立派な学問をしてゐる人もあるでせう。

僕らはいま月に行けるでせう。科学の方法が僕らを月に行かせてゐるのです。それは、僕らが行動の上において、非常な進歩をしたといふことです。けれども、僕らが生きてゆくための知恵といふものは、どれだけ進歩してゐますか。例へば論語以上の知恵が現代人にありますか。これは疑問です。僕らの行動の上における、実生活上の便利さは、科学が人間の精神を非常に狭い道に、抽象的な道に導いたおかげだといへるでせう。さういふことを、諸君はいつも気をつけてゐなければいけないのです。理性は科学といふものをいつも批判しなければいけな

いのです。科学といふのは、人間が思ひついた一つの能力に過ぎないといふ事を忘れてはいけません。心理学といふものも非常に発達しましたが、それも、人の心を物的に扱ふ線上に発達するので、人間の人格といふやうなものになると、うまくあつかへない。この線では少しも発達してゐません。今は昔のやうに狐憑きなどといふものはない。しかし、ノイローゼ患者はいっぱいゐる。あああれはノイローゼだといふレッテルを貼るだけです。狐憑きといふレッテルと、レッテルたることにおいてちつとも違ひはありません。ただ現代の知識人は、自分の合理的な意識といふものに対して、非常に傲慢な自惚を持つてゐます。「あのノイローゼは、近頃の研究によると、ちよつと違ったノイローゼらしいよ」などといふのです。それで事はすんだと思ひ込んでゐるのです。それでおしまひですね。さういふ風なことになつてしまつた。

信ずることと知ること

この間、こちらへ来る前に柳田国男さんの『故郷七十年』といふ本を読みました。前から聞いてゐたのですが、まだ読んでゐなかつたのです。柳田国男さんといふ人は、諸君もよく読むといひです。今の新しい顔してみたみたいな本は、大体ろくな本はないです。日本だけぢやない。どこの国もいけませんね。その『故郷七十年』といふ本は、あの人が八十三の時に口述筆記をした本で、神戸新聞に連載されたものです。その中にかういふ話があつた。あの人の十四の時

の思ひ出話が書いてあるのです。その頃、あの人は茨城県の布川といふ町の、長兄の井上鼎さんの家にたった一人で預けられてゐたのです。その家の近所に小川といふ旧家があって、非常に沢山の蔵書があった。柳田さんは毎日そこへ行って本ばかり読んでゐたので、身体を悪くして学校にも行けなかった。その旧家の奥に土蔵があって、その前に二十坪ばかりの庭がある。そこに二、三本樹が生えてゐて、石で作った小さな祠があった。その祠は何だと聞いたら、死んだおばあさんを祭つてあるといふ。柳田さんは、子供心にその祠の中が見たくて仕様がなかった。ある日、思ひ切つて石の扉を開けてみた。さうすると、丁度握り拳くらゐの大きさの蠟石がことんとそこに納つてゐた。実に美しい玉を見たのです。その時、不思議な、実に奇妙な感じに襲はれたといふのです。それで、そこにしゃがんでしまつて、ふっと空を見た。実によく晴れた春の空で、真青な空にいっぱい星が見えた。その頃自分は十四でも非常にませてゐたから、いろんな本を見て天文学も相当知つてゐた。今頃こんな星がある筈がない。今頃出る星は、俺の天文学の知識ではあんなところにある筈はない、といふことまでその時考へたさうだ。けれども、その奇妙な気持はどうしてもとれない。その時鴨が高空でびいっと鳴いた。その鴨の声を聞いた時に、ぞつとして我に帰つた。そこで柳田さんはかう言つてゐるのです。もしも、鴨が鳴かなかつたら、私は発狂してゐたらうと思ふと。ただ私はその後非常な生活の苦勞をしなければならなかつたので、そのために私は救はれたのであると書いてあるんです。

僕はそれを読んだ時非常に感動しましたね。ははあ、これで僕は柳田さんといふ人が分つたと思ひました。さういふ人でなければ、民俗学なんてものはできないのです。民俗学も一つの学問だけれども、科学ではありません。科学の方法みたいな、あんな狭苦しい方法では、民俗学といふ学問はできないのです。それから、もっと大事なことは、鴨が鳴かなかつたら発狂するといふやうな、さういふ神経を持たなければ民俗学といふものはできないのです。さういふことを諸君よく考へてごらんさい。僕はその時はっと感動して、ああ柳田さんの学問の秘密は、かういふ感受性にあつたのだと気づきました。柳田さんは沢山の弟子を持つてゐる。けれども、柳田さんの著述は非常に面白いが、弟子の書いたものはどうも面白く思へない。何故かといひますと、弟子どもは学問はしてゐますが、或る感受性に欠けてゐる。その感受性といふのは何ですか。柳田さんは、祠の中の蠟石の中に、おばあさんの魂を見たのです。柳田さんは、後から聞いたと言つてゐますが、おばあさんは中風になつて寝てゐて、いつもその蠟石で体をこすつてゐた。お孫さんが、おばあさんを祭るのに、この玉が一番記念になるだらうと言つて、祠に入れてお祭をしてゐたのです。少年がその玉をみて、怪しい気持になつたのは、その玉の中に宿つたおばあさんの魂が見えたからです。何でもないことです。だから柳田さんは、馬鹿々々しい話なら沢山ございますよと言つてさういふ話を書いてゐる。けれども本当の話です。馬鹿々々しいから嘘といふことはありません。柳田さんは、さう言ひたいのです。柳

田さんは、幸ひにして後に生活の苦勞をしなければならなかったから、私は救はれたといつてゐます。しかし、生活の苦勞なんて、誰だつてやつてゐます。特に、これを尊重するのは馬鹿々々しいことでせう。当り前の事です。おばあさんの魂の存在など、とり上げて論ずるまでもない、当り前の事です。生活の苦勞も、取り上げて論ずるまでもない、当り前の事だ。柳田さんは、さう言ひたいのです。諸君はみんな自分の親しい人の魂を持って生きてゐます。死んだおばあさんをなつかしく思ひ出す時に、諸君の心に、それはやつて来ます。それが、昔の人がしかと体験してゐた魂です。それは生活の苦勞と同じく凡なこと、又同じく凡るアルなことです。柳田さんはかういふ思想を持つてゐるから民俗学ができるのです。けれども、現代のインテリには、なかなかかういふ健全な思想が持てないので。だから民俗学が生氣を失ふのです。

柳田さんの話になつたので、ついでにもう一つ話ませう。柳田さんに『山の人生』といふ本があります。山の中に生活する人の、いろんな不思議な話を書いてゐる。その序文に、今では記憶してゐる者が私のほかに一人もあるまいから書いておく、といふ言葉があります。それは美濃国の或る囚人の話です。その人は牢に入る前は炭焼きだったので。深い山で炭を焼いて、里に持つて行つて売つてゐた。おかみさんは早く死んで、十三になる男の子がゐた。それから、どういふ事情か知らないが、同じ年頃の女の子を一人貰つてゐた。三人で暮してゐたの

ですが、大体里に下るとお米一合にはなつてゐたのに、炭が全然売れなくなった。ある日、炭を持って里に下るのですが、やはり売れない。手ぶらで帰つて来る。さうすると、もうひもじがつてゐる子供の顔を見るのが恐しく、余りに子供がかわいさうで、こそこそ自分の部屋に入つて、ころんと昼寝をしてしまふんです。ふつと目がさめると何か音がする。のぞいて見ると、男の子がなたを研いでゐるのです。女の子はしゃがんで見てゐる。夕日が小屋の入口に一面に當つてゐた。男の子は、そのなたを持って夕日の當つてゐる入口の丸太の上にころんと寝た。女の子もころんと寝た。そして「おとう、俺たちを殺してくれ」といった。その時、その炭焼きが、くらくらと目まひがして、何か分らないが殺してしまふのです。なたで子供の首を打ち落してしまふのです。自分も死なうと思ふのですが、うまくゆかないで里をうろろしてゐるところを警察につかまつたといふ話なのです。それを序文に書いてゐる。その時柳田といふ人は何を考へてゐたのでせうか。

丁度その頃は、西洋直輸入の自然主義文学の盛んな時だった。心理的な恋愛小説などいくつも書いて、これが人生の真理であると言つて得意になつてゐた。それが柳田さんには実に氣に食はなかつたのではないかと思ひます。子供を二人殺してしまつた囚人の単純な話は、大変悲惨な話ですが、装ひを知らぬ健全な話ではないでせうか。子供は、おとつあんがかわいさうでたまらなかつたのです。ひもじかつたには違ひないけれども、俺たちが死ねば、少しはおと

つつあんも助かるだらうと、さういふ気持ちでいっばいなんぢやないか。さういふ精神の力で、平気でなたを研いだんでせう。さういふものを見ますと、何と言っていいか、言葉といふものにとらはれない、と言ふのは心理学なんかにとらはれない、本当の人間の魂が感じられます。僕がさういふ話に感動すれば、さういふ子供の魂はきつとどこかにゐる筈です。さういふところまで、今のインテリゲンチヤは下りてみなければ駄目なのです。それでなければ、この思ひ上った精神の荒廃といふものは、おさまることはないと、僕は思ふのです。余りに言葉が多過ぎるのです。人類をどうしたらいいかといふやうな空疎なおしゃべりが多過ぎますね。僕は信ずるといふことと、知るといふことについて、諸君に言ひたいことがあります。信ずるといふことは、諸君が諸君流に信ずることです。知るといふことは、万人の如く知ることです。人間にはこの二つの道があるのです。知るといふことは、いつでも学問的に知ることです。僕は知っても、諸君は知らない、そんな知り方をしてはいけません。しかし、信ずるのは僕が信ずるのであって、諸君の信ずるところとは違ふのです。現代は非常に無責任な時代だといはれます。今日のインテリといふのは実に無責任です。韓国のある青年を救へといふ。責任を取るのですか。取りやしない。責任など取れないやうなことがかり人は言つてゐるのです。信ずるといふことは、責任を取ることです。僕は間違つて信ずるかも知れませんが。万人の如く考へないのだから。僕は僕流に考へるんですから、勿論間違ふこともあります。しかし、責任は取りま

す。それが信ずることなのです。信ずるといふ力を失ふと、人間は責任を取らなくなるのです。さうすると人間は集団的になるのです。自分流に信じないから、集団的なイデオロギーといふものが幅をきかせるのです。だから、イデオロギーは常に匿名です。責任を取りません。責任を持たない大衆、集団の力は恐しいものです。集団は責任を取りませんから、自分が正しいといって、どこにでも押しかけます。さういふ時の人間は恐しい。恐しいものが、集団的になった時に表に現れる。僕は本居宣長を読んでみると、彼は「物知り人」といふものを実に嫌ってゐる。ちよつとをかしいなと思ふくらゐ嫌ってゐる。嫌ひ抜いてゐます。彼の言ふ「物知り人」とは、今日の言葉でいふとインテリです。僕もインテリといふものが嫌ひです。ジャーナリズムといふものは、インテリの言葉しか載ってゐないんです。あんなところに日本の文化があると思つてはいけませんよ。左翼だとか、右翼だとか、保守だとか、革新だとか、日本を愛するのなら、どうしてあんなに徒党を組むのですか。日本を愛する会なんて、すぐこさへたがる。無意味です。何故かといふと、日本といふのは僕の心の中にある。諸君の心の中にみんなあるんです。会を作つても、それが育つわけはないからです。こんな古い歴史を持った国民が、自分の魂の中に日本を持ってない筈がないのです。インテリはそれを知らない、それに気がつかない人です。自分に都合のいいことだけ考へるのがインテリといふものなのです。インテリには反省がないのです。反省がないといふことは、信ずる心、信ずる能力を失つたといふ

ことなのです。

ここで、考へるといふ言葉についての宣長の考へをお話したいと思ひます。「考へる」の古い形は「かむかふ」です。宣長はこれについて次のやうに説明します。「か」は特別の意味のないことばです。「む」は「み」すなはち自分の身です。「かふ」は「交はる」といふことです。だから、考へるといふことは、自分が身を以て相手と交はるといふことです。宣長の言によると、考へるとはつきあふといふ意味です。ある対象を向ふに離して、こちらで観察するといふ意味ではありません。考へるといふことは、対象と私とが、ある親密な関係へ入り込むといふことなのです。だから、人間について考へるといふことは、その人と交はるといふことなのです。さうすると、信ずるといふことは、考へるといふことは、大變近くなって来はしませんか。万人のやうに考へるといふことは、ある共通な方法といふものがあつて、その方法に従つて対象をいろいろに吟味するといふことです。今の学問的に考へるといふのは、さういふ意味です。それと、信ずるといふことは大變違ひます。しかし、宣長のやったことは文献学です。あの人のいふ古学です。人間の表現についての学問でせう。だから要するに人間を考へることです。人間といふものは、死んだ物質ではないから、対象化して、こちらから観察するわけにはいかないものです。さっきも言ったやうに、人間といふものを考へると、どうしても人間の精神の活動といふものを考へなければならぬ。精神といふものを科学的に考へると、前に

お話ししたやうに、どうしてもそれを計算できる肉体にすりかへねばならぬ。科学の方法ではさういふことになりません。人間をその生きてゐるがままに考へるといふやうなことは、科学の方法ではできないのです。だから、これと交はるといふことしかないんだ。その人の身になつてみるといふことですね。だから、考へるためには、非常に大きな想像力がいります。科学、科学といふけれども、本当の発明や発見をした人はみなさうだったのです。長い間事実と人間のやうにつき合つてゐたのです。交はつてゐたのです。自分の実験してゐるいろんなものが、本当に親身なものになつたのですね。知るといふことも、熟知といふ言葉があるでせう。諸君は知つてゐるつもりでも、本当には知らないのです。本当に知るためには、浅薄な観察では駄目でせう。あるものを観察するとか、解釈するとかいふ時には一つの観点といふものがいりますからね。ある観点到立つて、そこから観察する。本当に知るためには、そんな観点などみないらなくならなければ駄目です。「人間は考へる葦である」といふパスカルの言葉も、僕は昔あれについて書いたことがあります。(註、新潮社刊、小林秀雄全集第七卷「パスカルの『パンセ』について」)おそろくパスカルの真意は、人間はいろいろのことを考へる事の出来る能力を持つてゐるが、葦の如く弱いものなのだといふ意味ではないでせう。むしろ、人間は葦の如く弱い存在だが、さういふ人間の分際といふものを忘れずにものを考へなければならぬといふのが真意ではないか。これは勝手な僕の解釈ですが、人間は抽象的に考へるといふ時には、人間であるこ

とをやめます。僕は自分の感情に従ふといふ弱い状態を忘れます。けれども、人間が人間の分際をそのまま持って相手を考へるといふ時には、その人と交はるといふことになりはしないか。相手の心の中に飛びこむのです。子を見ること親に如かずといふでせう。親は子と長い間つき合っているから、子供について知っているのです。母親は子供を見るのに観点といふものを持ってゐないでせう。科学的観点に立って、心理学的観点に立って、子供を観察したりはしません。子供の内部に入りこむ直観を重ねるのです。精神感応などとやかましいことを言ふけれども、僕らはみな感応してゐるのです。人間が分るなどといふのは、一目で分ることがあるのです。千里眼ですね。

△質疑応答▽

(問) 江戸時代まで余り読まれたことのなかつた「古事記」といふ書物を、宣長はどうして読まうとしたのですか。

(答) これは大変な問題で、また講演をやり直さねばならぬことになります。今本居さんについて書いてみますから(注、「新潮」連載、「本居宣長」)それを読んで下さい。なぜあの人が「古事記」を読み出したかといふと、第一当時は「古事記」といふものが読めなかつたのです。読めないから、あの人は読まうとしたのです。「古事記」は稗田阿礼がよみならつたといふ



(左、木内、右、小林先生—高千穂河原にて)

昔の言葉ですから、果して宣長が読んだ言葉通りであったか、甚だ疑問です。あれはいはゆる宣長の創作です。さういふ点でも、宣長の学問といふものは、実証主義とか何とかいひますけれども、そんなことばかり言っただけではないのです。あれは本当にあの人の直覚力とイマジネーションの産物なのです。その準備のために非常に実証的な準備はしたけれども、最後のところである仕事を完成させたのは、あの人のイマジネーションです。多分こんな風に読んであらうといふものを、あの人は書いたのです。さういふ仕事を誰もやる人はなかったわけです。

(問) 先生のお話の中で、宣長の考へた神といふものは、個人の願ひを聞いてくれる神で、それで十分ではないかとおっしゃいましたが、その点をもう少し御説明下さい。

(答) いや、それはさっきちょっと触れたのです

が、問題が大きくなるので止めたのです。僕は諸君に、いいかげんなことをしゃべってゐるのではなく、大変むづかしいことをしゃべってゐるのです。質問がありましたから簡単に言ひますと、宣長には神学といふものはいらなかつたのです。信仰があれば足りたのです。その生きた信仰といふものは、個人の宗教的な経験です。あの人は非常に古いところをやつたのですから、「古事記」に表はれたやうな神話をそのまま忠実に読んでみると、古人がどのやうな神様の信じ方をしたかといふことが、だんだん明瞭になつたわけでせう。古人には神学などといふものはなかつたのです。ただ信仰があつたのです。その信仰は個人個人みな別々のものであつたのです。別々のもので彼らが安心してゐたといふのはどうしてか。それはさういふ信仰の背後に民族の一つの統一感といふものがあつたからなのです。その統一感の中にあるれば、どんな神様を信じたくて俺の勝手だといふわけです。それで足りたのです。それが人間の最も古い、最も健全な神様のつかみ方であると宣長は信じたのです。神は常に僕の非常に私的な経験、僕の個人的経験を通じて経験されるのです。僕の哲学を通じて、あるひは僕の神学を通じて神を知るのではないのです。そんなものは、後からこしらへるものなのです。人間の知恵がこしらへるのです。けれども、知恵より経験の方が先なのです。だから、古代の信仰といふものは、まづみんな神を祭つたのです。畏い神を祭つたのです。私の家のことをやってもらふために祭つたのです。お供へを上げ、お礼をしたのです。さういふ行動を取つたのです。日本の

神道といふものは、さういふものであった。それに理屈をつけるのは後のことで、後から出来た教条はみな間違つてゐたといふのです。あの人の「神ながら」といふ言葉はさういふ意味です。これは非常に健全な神と人間との交渉であつたと思ひます。何であれ、畏いと思ふ人間の経験は、みな私的なものなのです。ある日僕はある山を見て畏いと思ふ。そこにはもう神がゐるのです。僕はその神と話をすることができなのです。お祈りをする事ができるのです。それから神様は何かを僕に命令されるやうに思はれます。僕はさういふ風に行動するのです。そこには神学といふものも、教条といふものもないのです。だから、僕などのやうな無宗教の男が宗教を考へる時には、さういふ考へ方しかできないのです。宣長はまさにさういふ風な考へ方をしてゐるなど僕は思つたのです。「古事記伝」を読みますと、ああ、これならわかると思ひます。僕にはキリスト教といふのは分りません。僕がドストエフスキーの仕事をつたうと駄目にしたのも、キリスト教が分らなかつたからなのです。

(問) 先生のお話の中には、歴史を学ぶポイントが指摘されてゐたと思ひますが、現代において歴史を学ぶ意味をお教へ下さい。

(答) これもまた大きな問題ですね。今は非常に歴史がはやってゐますが、今の風潮の中で悪い点が二つある。一つはいはゆるロマンティックな歴史観、要するに大衆小説歴史観です。これはいけません。もう一つは考古学的歴史観です。これもいけないのです。両方とも、歴

史、歴史といって、少しも歴史に触れてゐないのです。太閤秀吉は、テレビに出て来たやうな、あんな男ではありませんよ。あの人は現代のテレビ俳優などが演じられるやうな男ではありません。だから、テレビにのるやうな歴史は信じてはいけません。もう一つは考古学的歴史。神武天皇なんて嘘だといふやうな歴史。嘘だといふのは今の人の歴史に過ぎません。歴史はみな信じられたものです。信じられた通りに信ずることができなければ、歴史は読まない方がいいのです。本居宣長はさう考へた。宣長は「古事記」の神話を読んで、みなあの通りだと信じたのです。あれが神話時代の歴史だったのです。それが信じられなかったら、神話など読む必要はないのです。国生みといふ事が信じられてゐたといふその事が歴史ですけれども、そんな馬鹿なことはない、実はかうであつたといふ新井白石流のやり方。新井白石がこの頃評判がいいのは、現代の歴史家はみなあれをやつてゐるからなのです。本当はかうであつたといふ歴史、これは考古学であつて、ほんたうの歴史にはふれない。だから、歴史を己れの鏡にするといふことは非常にむづかしいことです。昔の人が信じた通りに、自分はそれを経験することができなければ、歴史など読まない方がいいのです。現代の歴史家で、さういふ点で一番徹底してゐるのはクローチェです。歴史といふのは、みな現代史なのだとかクローチェは言つてゐるのです。現代の人が、ある史料を持って過去に生きることができのなら歴史家と言へるので、けれども貝殻を生きることにはできないぢやないか。だから、考古学的歴史といふものは、

みな空虚なものです。みな空虚とは言へないまでも、まあ一種の学問なのです。けれども昔から僕らは歴史を鏡と言ったのです。鏡の中に自分自身が映るのです。歴史を読んで自己が発見できないやうな歴史は駄目なのです。歴史はどんな歴史もみな現代史であるといふことは、現代のわれわれが歴史をもう一ぺん生きてみることでできるといふ、さういふ経験をさしていふのです。それができなければ、歴史は諸君の鏡ぢやないぢやないか。君の顔が見えなければ駄目なのだ。君の顔が見えれば、歴史は君のためになるぢやないか。日本の歴史は諸君のためになるぢやないか。けれども、「古事記」の言つてゐることは、どこまで本場で、どこまで嘘だなどといふことを研究しても、それは一種の学問ではあるけれども、僕の言ふ歴史ではないのです。歴史といふ言葉が一番はやってゐるくせに、今一番忘れられてゐるのは鏡としての歴史です。「増鏡」とか「今鏡」とか、昔は歴史のことを鏡といったのです。昔の人がどういふ精神で歴史を書いたか、さういふ人の心持を今の人が忘れてしまったことがいけないことなのです。現代は、歴史についてもっと発達した、進歩した考へを持ってゐると自惚れてゐるが、それは違ふと思ひます。

(問) 柳田国男さんの「清光館哀史」といふ文を読んで、歴史の中に生きた名もなき人の悲しみを感じました。かういふ点について、先生のお考へをお聞きしたいと思ひます。

(答) 歴史といふものは、さういふ風に根本にあはれを感じずるものがなければ読まない方が

いいのです。歴史は詮索するものではなく、まづ共感しなければいけないものです。共感する時には、あはれが感じられるでせう。さっきも言ったやうに、人間は生活のための行動といふものに縛られるものだ。さういふ場合に、人間の記憶といふものは非常に制限されるものだ。行動に有益な記憶しか浮かばないやうな、さういふ根本的な神経組織のシステムを、僕らはみな持つてゐるのです。まづさういふものに余り頼らないことなのです。歴史を見るといふことは、生活のための行動といふものと直接結びつけることをやめることなのです。さうすると、そこにあはれといふものが表れて来るわけです。歴史が君自身の鏡になるのは、あはれを感じる君自身の心がなければ駄目です。あはれを感じる心といふのは、イマジネーションです。イマジネーションといふ言葉は非常に困った言葉ですが、まあカントなどが言つてゐる先験的イマジネーションです。これがないと、人間は本当の認識などできないのです。さういふイマジネーションが人間には非常に必要なので、これは理性よりもっと大きいものです。理性はその中のほんの一部の能力です。歴史を知るためには、イマジネーションが必要なのです。歴史は今ももうないので、呼び起きなければならぬのです。見えないものも、イマジネーションが働けば、ちゃんと見えるのです。不思議な働きです。こんな不思議なことはありません。さういふ不思議な心を、人間はみな抱いてゐるのです。諸君の中に全歴史があるといふのはさういふ意味だ。諸君は日本の全歴史を、諸君のイマジネーションによつて、諸

君の中に呼び起すことができるのです、心の眼によって。日本には心眼といふ面白い言葉があるでせう。諸君はみな心眼を働かさなければ歴史は見えませんよ。諸君の肉眼などで見えるものではない。幸ひ僕の肉眼には心眼が重なり合つてゐるのです。生物学がいふ僕の眼の構造などといふものは、非常に抽象的なものです。だからベルグソンは、「眼があるから見えると言つてはいけない。眼があるにかかはらず人間は見えると言ひ給へ」と言つてゐます。この肉体の眼は、僕の心眼の邪魔をしてゐるのです。本当に見える人は、ものの裏まで見るのです。生理学といふものは、水晶体がどうの、網膜がどうのと、眼の構造を絵に描いて見せるけれども、心眼といふものがそれに重なつてゐるといふことは、絵には描けないでせう。第一、生きた眼といふのは、肉眼の中に心眼が宿つてゐるのです。心眼がなければ、この僕の水晶体は働きませんよ。

(問) 柳田先生の感受性といふことについてお話しになりましたが、感受性は先天的なものだと考へると、自分が救はれないやうな気がいたしますが。

(答) やつぱり天才といふものはあるのです。僕らは天才ではないから、天才のものを讀みますと、自分が大変情なく思はれます。それは誰にもあることで、そんなことを僕ら凡人は余り気にしてはいけません。ただ、考へなければならぬのは、自分は感受性を持つてゐないのではあるまいかといふ考へです。感受性がないのではない。それをわざわざ隠すのです。わざ

わざ余計なことを諸君はしなければいいのです。柳田さんのやうな偉人はなかなか出て来ないのですよ。柳田さんの本当の弟子は、折口さんぐらゐるものではないでせうか。折口さんが上野の自動電話の下にしゃがんで、そのあかりで「遠野物語」を読んだ話を書いてゐますね。ああいふのを見ると、やはり非常に才能のある人同士の出合ひですね。これは仕方のないことです。しかし、僕ら凡人は、そんな余計なことをくよくよ考へてはいけません。感受性はみなあるのです。非常に鋭い人と、鋭くない人があるかも知れませんが、余り鋭すぎると気狂ひになりますからね。ただ、みな持つてゐる感受性を、学問で隠してはいけません。生意気な心で、傲慢な心で隠してはいけません。さういふ傲慢な心さへなければ、諸君の感受性はみな育つのです。どんどん育つのです。さういふ風に考へた方がいいのではありませんか。

(文芸評論家)

「日本のいのち」の人類史的意義

戸田 義雄



徹底して知るといふこと——本質の直観

自然をめぐる東と西

日本は「いのち」であると呼べること

人類が究極的に求めてゐるもの

靱と同心円の浮彫（千金甲第一号古墳）

徹底して知るといふこと——本質の直観

昨日の講義で小林先生は、知るといふことは万人に通じるやうな知り方でなければならぬし、同時に万人に通ずるやうな仕方を知ったことを表現していかなければならないと、さういふ意味のお話をされました。私はそのことに関しまして、万人に通じるやうに知るといふことは、知り方を徹底することなしにはありえないことだと思ひます。知り方を徹底すれば、それはものを考へるといふことは何であるのかに、どうしてもつき当ります。実は、万人にわかる仕方で知るといふことを徹底すると、「ものを考へる」といふことをどうしても本当に考へざるをえなくなるわけです。さうして、それは「ものを信ずる」といふことに近づいて来る。さういふ意味で私は大変至らないながら、徹底して知るといふことを営んでまゐりました。その場合に私がとりました方法は「比較」といふことです。例へば人間が生きていふことを徹底して考へる場合に、人間でない生きものの生き方との比較においてそれを知って行かうとするわけです。

そこで単純な例ですが、ダニといふ生きものを考へてみます。ダニには目玉といふものは特別になく、身体全体の皮膚感覚でもって光を受け取るやうになってをります。それで身体全体で光を受けると、その感覚から動き出します。たまたま高いところにダニがをりまして、その

下がある生きものが通ります。多くの場合哺乳動物です。すると、その哺乳動物の皮膚から、専門的に申しますと、核酸といふ、すっぱい酸の臭ひが発するんださうです。その臭ひが一つの行動標識になります。「おい、落ちろ」といふ信号になってダニに通じるんです。その臭ひをかぎ、行動開始の信号を得て、ダニは高い所からぱつと落ちます。落ちますと、その落ちた哺乳動物の皮膚の上で、大体二〇度から三〇度ぐらゐの、いはゆる温血動物の適当な温度にぶつかるど動き出すやうに仕組まれてゐます。この適温が「動け」といふ第二の行動の指令となるらしいのです。そして、動き出してから毛のない部分に到達しますと、「刺せ」といふ信号が出るんです。それで、ぶすつと刺し、哺乳動物の血を吸って、大体豌豆ぐらゐにふくらんで栄養をたっぷり吸ひ込みます。それがダニといふ生きものの活動生命の終りです。このダニにみられる姿は非常に簡単な生物の生き方の典型です。実は、ユクスチュールといふ大変注目すべき動物行動学者が、『生物から見た世界』といふ研究書の中で、そのやうな研究をやつてをるのです。そこで彼は、例へば今のダニに代表されるやうな下等なる生物の生き方は、さういふ一定の信号のみをうけるとそれに基づいて決つた行動のみをおこすやうにきちんと決められてゐることを分析して、それは要するに「確実に生きるため」であると結論しました。実は、ダニを取りかこんでゐる世界そのものは、私ども人間の場合と同様、非常に広大なものです。しかし、さういふ世界の中で生物は確実に生きるために必要な刺激だけを選んでそれに反応し

て生きていく。世界は広大であるが、関係をもって生きる環境は非常に狭められてゐる。これは一番確実なるが故に、一番簡単な生き方をさせられてゐる典型的な姿なのです。

その点、一人人間の場合はどうでせうか。人間にとつては、ただ生きる、確実に生きるといふことは自明なことなのです。それでは、「確実に生きる」といふことのほかに、人間にはなにが加はつてゐるのかと問ひ直してみませう。さうするとあるではありませんか。それは一言にして言へば、「豊かに生きる」といふことだと思はれます。では、豊かに生きるといふのはどういふことを考へてみます。人間を取りかこむ広大な世界といろんな関係をきり結んで、自分の生きる環境世界を非常にひろげて豊かにしていくといふことなのです。そこで、豊かで広大であるためにはどういふ働きがあるのかといふことを突きつめてみたいと思ひ



ます。

例へば、ここに十字架があつたとします。この十字架を、例へば「あゝ 十字架、あれは死刑の道具だ」とかうお考へになる方も多いと思ひます。ところが、キリスト教徒にとつては、單なる死刑の道具ではなく、それは神聖なシンボルです。なぜか。イエス・キリストは十字架において死に、そして三日にして死から蘇へった。パウロが新約聖書の中で言つてゐますが、それはイエスの死と復活といふ事件に対する意味付けです。それによると、人間の祖先は神の命に背く根源的な罪をおかしてをり、その子孫なのだから、所詮救ひにあずかれない。だから、十字架のイエスと一緒に接ぎ木されて一緒に死ぬ。そして、今度はイエスと一緒によみがへつて来るほかない。その象徴物が十字架なのだ、とかう言ふのです。

ところが、今度その十字架を使ったすごい小説が書かれ、また映画化され、日本でも上映されました。それが『エクソシスト』です。そのなかで、一四才の女の子に悪魔がついて、その少女がものすごい姿を呈するわけです。その中で一番の衝撃的な場面は何かといふと、その少女が十字架を使ってマスターベーションするところです。それで、ニューヨークなどでは、たくさんの人が卒倒した。日本でも二、三卒倒した例があると報道されてますが、それはマスターベーションの場面ではないんです。ところが、ニューヨークなどではそれが多し。なぜか。今言つたやうに、十字架に関し、或る特別の視点——例へばキリスト教のやうな——を持たな

い人にとっては、単なる品物にすぎません。死刑の道具にしか見えない訳です。ところが、キリスト教を信ずるものにとっては、その十字架は根源的な罪を背負った自分が救はれていく、かけがへのないものなのです。キリスト教徒は、十字架と価値的に結びついてゐるのです。それをいただくことにおいて値打ちがあるのです。ところが、こともあらうにそれがマスターベーションの道具に使はれたとなるとどうでせうか。それは冒瀆以上の何物でもありません。ショックなんていふものじゃないから、それこそ卒倒してしまふのです。これは単にものをものとして見ることですんでをることではなく、価値的に結びついて、値打ちあるものとして、自己関係を結んで行く見方がある、といふ非常にいい例です。

もう一つ、今度は目には見えないのですが、耳で聞いて言葉で聞ける場合をみてみませう。「キャン ユー シー ザ スター イン デイ タイム」って言ったら、君たちはなんと答へますか。「真昼間に、あなたは星を見ることができませんか」と聞いたら君はどう答へますか。今の英語教育を学んでをれば、普通なら「ノウ アイ キャント」と答へるだらう。ところが、昨日の小林先生のお話を聞いてゐるみなさんは、「イエス アイ キャン」と言へるかもしれないでせう。小林先生は柳田先生が子供の頃の貴重なお話をなされた。柳田先生が一四才の時、茨城県の布川の隣の小川家の土蔵の前にほこらがあってその中が見たくて、あけて見たら、ろう石があった。それでびっくりして、青い空を見たら真昼間に星がまたいたいてゐるとい

ふ。それでさうした神経、さういふ神経あるが故に柳田さんの民俗学は本物だっていふことを昨日おっしゃった。今日の私の話は違ふけれど、昨日の小林先生のお話を聞いた諸君は、「キャン ユウ シー ザ スター イン デイ タイム」と言ったら、「イエス アイ キャン」と言へるはずである。ところが、馬鹿の一つ覚えみたいに「ノウ アイ キャント」と答へるなら、さう答へる人は、心が閉ぢてゐるといふことでせう。心が開かれてゐれば、あらゆる場面を考へることができる。一辺倒にならないんです。しかも一番大事なことは、真昼間に星を見ることのできるといふこと、それは人間の特徴でもあるといふことです。先程申しましたダニは、空間世界で正確に生きるために、極めて狭められた空間だけに自分を取り結ぶ。だから、「スペース バインディング アニマル」と言ふのです。まさに「空間を結ぶ生きもの」なんです。ところが、人間は「スペース バインディング」は当り前でして、同時に、「タイム バインディング ビーイング」なんだ。まさに「時を結ぶ生き者」なんです。過去も、現在も、そして未来も。時間的に、そして空間的にも無限へとはるかに飛ぶのです。それが「豊か」といふことの実体なんです。その豊かさの最たるものの中に、昼間星を見ることがある。さういふことのできるのです。ある観点だけにとらはれてものを見てるに止まれば、「ノウ アイ キャント」ですんで了ひます。ところが、「イエス アイ キャン」と言へる、その一番大事な経験として、人間は昼間星を見得る、昼間夢を見ることができるといふことなので

す。昨日柳田先生が書かれた『故郷七十年』の中の「或る神秘なる暗示」のお話を聞いてゐて思つたのですが、一四才の柳田少年は、ろう石におぼあちゃんの魂を見ることができたのです。しかし、一方で生きてゐる人の魂も見得るし、感ずることもできる。これは人間にのみあり得ることなのです。

この柳田先生が、終戦間もない頃でしたが、ぼくが当時まだ国学院大学の助教でしたが、国学院大学に神道学科の大学院を作らうとした時にお出ましになつたんです。ところが、当時熊本大学の法文学部長で文部省の大学設置委員だつた方が、正面切つてクレイムをつけた。

「柳田先生は年寄りだ」といふことが第一。ところがもう一つは、「民俗学は学問じゃない」と言ふことだつたやうです。ところが、ぼくは柳田先生のそばにゐたからよく知つてゐるのですが、柳田先生は、民俗学といふふうになら「学」をつけるのをおがましいとおっしゃつてゐたのです。本当はつけたくないんだとおっしゃつた。つまり、柳田先生は学問といふことを非常にきびしく考へられた方なんです。まるで生字引みたいな方でしたが、さういふ先生が、やっぱり学と名付けるのはおがましいとおっしゃつた位でした。

これも終戦直後でしたが、ぼくが東京の成城のお宅へ伺つた時、柳田先生は、「ぼくのやうな老骨が、この敗戦の日本に直面して生き残つたといふことは、せめてもの日本の幸ひである」とおっしゃつた。それで、ぼくは非常に胸にジーンと来たんです。

そのころ、当時東大のフランス文学の先生だった辰野隆や今井登志喜といふ西洋史の先生たちが、おれたちは今こそ愛国者にならうと東大の文学部で誓ひ合つたのです。さういふことがあつた時、柳田先生はぼくに向つて「今こそぼくは国学を書く」とおっしゃつた。そして『新国学談』といふものを書き出されたんです。その第一冊が祭日の研究で『祭日考』といふ本。次が『山宮考』。その次が『里宮考』。それで、その『祭日考』といふ本を先生がぼくに贈つてくださった。それはつまり、「若い諸君が、おれの学問を越えてくれ」といふことだったんです。それで、ぼくは感激して、「よし、先生が一生を賭けた国民信仰といふものを、ぼく自身で調べてやらう」と決心して、山形県とか、能登半島とか、対馬とか、いろいろ各地で専らフィールド調査をやつた。このことは、先生のさういふお気持ちに応へようと思つたからなんです。その精神、つまり先生がいはれる△国学▽といふのは、国民の信仰のことです。それは、生きてゐる人も、死んでゐる人も、魂と心を通はせ合つてゐる世界のことなのです。さういふ姿を、先生は全国いたるところで採集なさつたんです。ところが、その国学の精神がお弟子さんにはわかつてゐなかつた。終戦の時、柳田先生は、敗戦のこの機にあつて、せめて自分は『新国学談』を書くと言はれ、その時に、やつぱり学と言はなきやあいかんかといふ自覚をおこされて、民俗学とおつけになつた。ところが弟子たちは、民俗学は社会科学の補助学、やれ歴史科学の補助学だとか、なんとか言つて論争ばかりやつてゐたんです。国民信仰を、本当に

明らかにする学問だといふことを、だれも言はないし、気がついてゐない。

ところが、あの亡くなつた三島由紀夫さんが、『日本文学小史その一』の中で、この柳田民俗学の亜流を批判されてゐます。私はそれで三島さんは偉いと思つた。それはかういふことです。民俗学では、よく常民といふ言葉を用ひる。コモンピープルだけでも、柳田先生は、国民といふ意識でこの言葉をおっしゃつたんです。ところが今の亜流たちはそれを人民といふ言葉におきかへてしまふのです。常民、即人民なんです。これは階級的に區別せられた人民です。さうすると、ちやうどマルキシズムと同じやうな考へ方で、要するに、下部の常民、即人民の営みが上部構造を決定してくることになる。それを三島さんが批判した。但し、この場合、柳田先生や折口信夫さんを批判したのではなくて、その他の弟子たちにむけられた言葉なのです。普通マルキシズムやフロイドの学説について批判する人はあります。しかし、常民のまさしくその点を批判したのは、後にも先にも三島さんだけであつて、ぼくは感服したんです。

とにかく、柳田先生のいはれた国民の信仰といふのは、生きてゐる人の間でも、死んでゐる人の間でも魂と心が通ひ合ふ世界といふことだったのです。

それに関連して、ちよつと皆さんにご紹介したいことがあります。私は宗教学といふ特殊な学問をやつてゐるのですが、この学問が開かれたのは明治三十五年なんです。それを開いた人は姉崎正治です。この人のペンネーム、姉崎嘲風と申し上げたはうが文学者として有名だから

みなさんのご記憶に浮び易いでせう。この人は高山樗牛と本当に刎頸の交りをした人です。昨年はその姉崎先生がお生れになって一〇〇年目にあたりました。それで東大の図書館で記念会をやった時に、ぼくは頼まれて発表したんです。それを機会にいろいろ調べてみました。宗教学の現代的性格は「サイエンス・オブ・レリジョン」といふ、そのサイエンスつまり、人文科学的性格について肝心なことが失はれてゐるといふことに気付きました。で、その姉崎先生のことを調べてみてのことですが、先生がご自分でお選びになった論文集『已弁集』といふのがあって、その中にかういふ話があつたんです。明治三十九年、日露戦争が終つて、春の靖国神社のお祭の時に先生がお参りに行つたといふんです。さうすると、ある未亡人らしき人が男子を連れて敬虔な祈りを捧げてゐた。そして何か子供にいろいろ語つてゐる。それを見て、自分がかう思った、といふんです。あの人は、ただ拝んでゐるのじゃない、おそらく彼女の夫は戦死したのだらう、そして、この靖国神社に祀られてゐるのだらう。彼女は、まぎれもなくその亡き夫とお話をしてゐるのだといふふうに思へてきた。そして、それを見てゐて、また私がその人達の語らひの中に入れて一緒にお話してゐる気持になつた、とかういふのです。さういふのを、交流、感応といふ。それは神と人との交流、神人の感応である、さういふことがあることがわからなければ、宗教の研究なんかはとてできないと、さう書いてあつたのです。それをぼくは昨日、小林先生のお話を聞きながら思ひ出したのです。つまりそのやうに心が通ふ

と、生きてゐる人同志の間だけではなく、死んでゐる人との間にも心が通って話し合ふことができる。さういふことが、ぼくにはわかると姉崎先生は言はれるのです。徹底して学問すればそこまで来るのです。生半可な勉強がだめなんです。

ぼくは小林先生のお話を聞いてゐて本当にさう思った。要するにいけないのは不勉強といふことなのです。学問が足らなければ、さっきお話ししたやうに、ある視点でしかものを見ようとはしない。ところが、小林先生は、親は子供を見る場合に視点を持たないと言はれた。母親は、子供が何を思つてゐるか、何を感じてゐるか、何を苦しんでゐるか、全体としてびたつとわかる。それは相手の子供といのちが通つてゐるからです。通つてゐるから、本質をつかむのに、特別の観点にとらはれることもない。それをベルグソンは直観と言つてゐるのです。日本人にあつては、ごく普通のお母さんやお父さんが、さういふことを実際にやって来てゐるではないかと、小林先生は言はれた訳だと思ひます。さうすると、さういふふうには本質を直観して、いのちを通はしてゐるのが日本人ではないかといふことになるのです。さういふふうには、死者も生きてゐるものも、お互ひに心を通はしあつていくといふことの中に、豊かに生きる、非常に広大な世界ができてくるのではないか。さういふことをぬきにして「人間の豊かさ」といふことを短絡的に考へるならば、それは世上で言はれる福祉国家論としての「福祉」以上のものではないのです。そこまで来ると、知るといふことの徹底性は、相手のものと交はる、相手

とつながってゐる世界に到達すること。それは、相手と価値的に結び合つてゐる世界に至り着くことになるわけです。

もう一つの例は、これは昨年木内先生が取り上げられたあの虫のお話です。これはながらくアメリカで日本語を教へた池田摩耶子さんの経験です。川端康成さんの『山の音』にてくる「八月十日前だが虫が鳴いてゐる」といふ一節が、アメリカ人にはわからないといふ話です。言葉としてはわかるが、意味がわからない。それは、アメリカ人には虫の音を聞くといふ耳がないからです。虫は鳴いてゐるのだが、それが精神生活の中にはひつてこない。人間が外界と関係をとり結ぶ、その関係の中にはひつてこないのです。ところが、日本ではどうか。

明治天皇様の御歌

さまさまの虫の声にも知られけり生きとし生けるものの思ひは

これの実感はずいと思ひます。ささやかな虫の声にも、その生きものなりのいのちの叫びを感じて共感されてゐるわけです。虫けらの生きる世界にまで心を及ぼされ、交渉をもつてきてゐるのです。そのやうな精神が本当にわかれば、平和とか共存とか、そんな抽象的な言葉を言はなくても、「ああ、それだ」といふことになる。共に生きるといふことは、実はさういふことなのです。ところが、外国では虫は害虫なのです。害虫だから自分の生きる精神生活の中

に意味をもって登場するわけがない。したがって、「八月十日といふ、曆の上の立秋の前にすでに虫が鳴いた。ああ、秋だなあ」といふその兆し、さういふことがなかなかわからない。だから池田さんは虫の文化論、ひいては日本文化論をやらなければならなかったといふんです。しかし、池田さんは、この明治天皇様の御歌は知らない。それを言ってもらひたかったのです。

自然をめぐる東と西

それでは、人間同士が神や仏に心を通はせるだけでなく、虫けらにまでいのちを通はせるといふ、さういふ契機を、西洋では何がシャットアウトしてゐるのか、それを考へてみたいと思ひます。一つには彼らの自然観です。それは旧約聖書、創世記にまで遡るのです。すなはち、この世のあらゆるものをお造りになった神といふ創造主に対して、人間も虫も草も木も鳥もすべて「造られしもの」です。ところが違ふ点が一つある。それは神が人間のみに、人間以外のものに名づけることをお許しになつた。この名づける働きによつて、人間に他のものを支配することを任せた。さうすると神の立場から見ると、神、次に人間、次に他の被造物としての自然となつて、自然は人間に支配されるものといふことになる。かういふ考へ方は、実に旧約聖書に遡るのです。この考へ方と言ふと、自然は、人間が本当に豊かに生きていくうへにいのちを通はす相手にならないのです。まして、心の鏡にはならないでせう。

さういふ点で大変面白い話があるのです。イスラエルの首都エルサレムにヘブライ大学といふのがあります。もう引退されましたが、そこにマルティン・ブーバーといふ、二〇世紀の哲学を考へる上に忘れられない先生がゐりました。このブーバーが中心的主著として書いたのが、ドイツ語で『イッツヒ・ウント・ドゥー』訳して『我と汝』といふ本です。その中で、彼はなんと言ったかといふと、人間といふものの生き方の根本的な姿は、自分が相手のものを呼ぶ、その呼びかけの言葉で規定できる、といふのです。それはどういふことかと言ふと、自分が相手のものを、「それ」といって、完全にもものとして扱って言ふ時。それから、「あなた」といふ人格として言ふ場合。ところが、単に「あなた」ではなくて、「永遠のあなた」と呼ぶ時がある、といふやうに、相手に対する三つの呼びかけ方のちがひで、人間の生きる根本的態度はきまるといふんです。それについて、評論家の佐古純一郎さんがそのブーバーのところに会ひに行つてたずねた。ブーバーさん、あなたは、相手をもものとして扱ふ場合にイット（それ）と呼ぶと言ってをられるけれども、さういふ形が、「あなた」といふふうに人格的に呼びかけるはうに移って行くことがある。更にそれが、西洋流に言ふと神である「永遠のあなた」に移ってゆくと言はれるが、神によって造られ、人間によって支配される「もの」、それが永遠の神を感じるやうになつてゆく契機はないはずだと、紋切形に言つて了つた。さうしたら、逆にブーバーにやられちゃつたんです。佐古さん、さういふことをおっしゃるのは、あなたが「キリスト教

「的偏見」にとらはれてゐるからだ、さういふあなたこそをかしい、と逆に言はれたといふのです。

かういふふうになつていく例はたくさんあるんです。日本だったら、例へば林武さんが「美に生きる」といふ自叙伝に書いてゐます。林さんが、もう絵がかけなくなつて、もうおれは絵を描くのはやめにした。せめて村の役場の書記にでもなつて生きようと言つて絵筆を捨てて、いつもの道を歩いてゐた時に、むかうの木がひゅうつと浮んで来た。それで、林さんは、はあーと言つてひれふしたといふんです。その木が大きく生きて林さんにのしかかつてきた。いつもはなんでもなく思つて歩いてゐた時の木が、生きて自分を圧倒して来た。それで林さんは目があったのです。これは、杉の木といふ「それ」「もの」が、「永遠のあなた」になるといふ大変いい例です。かういふ例は、東山魁夷さんの『風景との対話』といふ本にも出てゐる。林さんや東山さんの場合のやうに、日本人にはさういふところがあるのです。ところが、佐古さんにそれがわからないのは、彼がクリスチャンだからです。かういふふうには或る定められた信仰の教へによつて特定の視点を持つといふことは、考へ方のわく組みに自分をはめこむといふことです。さういふのを教条主義といふんです。その教条主義のために、素直に感ずることができないわけです。ところが、素直に感じた林武さんや東山魁夷さんは、「それ」が「永遠のあなた」（ザウ）にまで移りゆくといふことをちゃんとおっしゃつてゐるんです。そんな例はた

くさんあります。大仏次郎さんの『帰郷』といふ小説を読んでご覧なさい。やっぱり、ちゃんとした人はみんなさういふ体験をもつてゐる。その中で大仏さんが強調されてゐるやうに、それは体験の中から湧いて来る実感なのです。それを素直に認めれば、こんな教条主義になるわけがないのです。

さういふことで、プリントの二枚目、リン・ホワイトといふ人のところを読んでください。これはアメリカの加州大学の歴史学の先生です。

キリスト教徒にとっては、一本の木は物理的事実以上の何物でもなく、神聖の森といふ考へ方もキリスト教徒とは無縁である。それはまた西洋の精神とも無縁である。二千年近くもキリスト教の伝道師は、神聖な森を伐り倒してきた。それは、自然に心があることを前提とすれば、偶像崇拜になることを恐れたからだ。(青木靖三訳「機械と神」)

これをご覧になるとおわकारのやうに、神聖な森、これは自然ですが、それはキリスト教徒にとってはいのちのつながりとしては無縁なものだった。また西洋の精神とも無縁だった、といふのです。それは、先程申しあげたやうに旧約聖書以来でてきてをり、ギリシャ哲学以来さうなのです。自然は人間によって支配せられるものだといふ。大体紀元前一、〇〇〇年近くからの考へ方なのです。だから、二、〇〇〇年近くまでキリスト教の伝道師は、神聖な森を切り倒して来たといふのです。それを日本では、例へば、あの高千穂の峯のやうに、切り倒さないで残し

て来てゐる。このやうに自然を守つてきたといふこと、それが神を守るといふことと同じなです。それは日本を守ることになつてゐる。そのやうなことは、かういふふうにならば、すつとわかるんです。かれらは、自然に心があるといふことを前提にしたら、偶像崇拜になると思つてゐるのです。

今から十七年ばかり前、日本で戦後はじめて人文科学の国際会議を開いたことがあります。その時に、単に会議をするだけではなくて、日本の宗教施設を見せてさしあげようといふことになつた。それで、伊勢に参つた。その時に、今は亡くなつたフリードリッヒ・ハイラーといふドイツのマールブルク大学の先生、この人は『祈り』といふ本を書いて、ヨーロッパでも宗教学者としては最高峰の人なんです。そのハイラーさんが言ふには、自分たちは、今まで心のない自然を拜むなんていふのは、とんでもない下等、低級なる宗教であると思つてゐた。ところが、今ここ伊勢に来てはじめて非常に洗練せられた高度の宗教としての自然崇拜があるといふことがわかつた、といふことを言つたんです。

その後、有名なトインビーが来られた。トインビーは、三回目訪日の時に伊勢に行つたんです。その時に、かれは伊勢神宮の神楽殿の揮毫帳に「この神聖なる場所で、私はあらゆる宗教の根底をなす、根源的に一つに結ぶものを感じます」と書いた。これはすごい。やつぱり実地に見なければだめですね。つまり、実感しなければならぬ。トインビーも、ハイラー先生

も、見て、そして実感したんです。

次にルドイッヒ・クラークスといふ哲学者によってこの問題を考へてみたいと思ひます。クラークスは、日本の哲学界ではほとんどとりあげられてゐないのですが、これを大きく問題にしたのは、今、東京女子医大の精神科の主任教授をしてゐる千谷七郎といふ人です。プリントに出しておきました『人間と大地』を翻訳した人です。そのクラークスが西洋の自然観をどう見てゐたかといふと、やっぱり、ちょうどリン・ホワイトと同じやうに、ここにも唯一の神の信仰といふものとの比較、対比においてその自然観が出て来てゐます。例へば、プリントの二行目、「唯一神がいのちの樹からひき離れた神々とは、常に変移してやまぬ感性界の心である」と。唯一の神といふ立場から見れば、この世で神に価するのはただ一つ、たった一柱の単数であり、神々といふ複数は認めない。だから、いのちの樹から神々は引き離された。その引き離された神々とは、実際は常に変移してやまない感性界の心なんです。宗教的に表現すれば、神々といふほかはない。実感される心も、唯一の神といふ考へ方に教条主義的にとらはれれば、これを全部切つてしまはなければならなくなる。といふことは、心に実感せられて来ることからをみんな切つてしまふといふことです。で、彼は、その場合にその切り取られた一番大事なものを一応象徴的に大地ととらへたんです。これは、自然と置きかへてもいい言葉です。そこで四行目、「すなはち人間と大地の心との連関放棄」——人間と自然との交はりを西欧では、

ことさらに断ち切ってしまったといふ。それはどのく
らる西洋の精神の不幸を生んだか知れないといふので
す。泣いたり笑ったり憤ったり、変移してやまない感
性界の心は素直に感ずるものなのです。それを宣長は
「もののあはれ」と言ったと、昨日小林先生のお話に
あったでせう。その実感を押えつけようとするから精
神は歪み、心の病気が生ずるのです。精神病理学者の
千谷さんがクラークスの自然哲学を大きくとりあげら
れるのは、さうした点についての透徹した分析をクラ
ークスにみたからです。ともあれ、さういふ実感、素
直な感応を断ち切らうとするのは、考へ方のわく組
み、教条主義におちいることなのです。

日本は「いのち」であると呼べること

さて、その教条主義といふことに關聯して、親鸞に
ついて話をします。これは、去年おきた本当に新しい



（戸田、木内、小田村先生）

問題なのです。それは、ぼくの友人で、親鸞研究のオーソリテイの一人である松野純孝博士が、『親鸞—その行動と思想』といふ本の中でちょっとふれたことです。

御承知のやうに親鸞は九十才で亡くなりました。その彼が八十五才の時、「唯信鈔文意」を書いた。その中で言ったことを、このプリントに出しておきました。「仏性すなはち如来なり」——如来といふのは、仏様を尊ぶ言葉です。仏性とは、人間の中にある悟りを開きうる根本的性質をいひます。その仏性といふのは、いはば仏様とおなじだといふのです。「この如来、微塵世界にみちみちてまします」この仏になりうる根本的性質は、極小の世界、つまり、あらゆる世界にまで充滿してゐる。ところが、「すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり」と。それはまずなによりも一切群生海、これは衆生海といつてもよい。つまり、仏性、すなはち如来はこの世に生きてゐるすべての人間の心に満ち満ちてゐるのだといふのです。御承知のやうに親鸞は、「弥陀の本願は集まりて親鸞一人がためなりけり」と申してをります。この言葉の意味するところを利己主義だとおとりになればそれは浅薄な理解です。これは、ありがたいといふことを言はうとして、そこまで一人の心に切りつめて来て把へてゐるわけの言葉だからです。ほかの人はいざ知らず、私如きものために、弥陀のご慈悲がみんな一身に集つてゐるといふ。これは本当にありがたいといふ実感の言葉なのです。しかし、そこには、阿弥陀様におすがりしてゐる親鸞といふ一人の人間がまぎれもなくある。つまり、人間至上主義なんです。こ

ここでは、人間を越える世界はありません。そこまでは実は親鸞八十五才までの考へ方なんです。ところが、松野君が注目したのはその次の、「草木国土ごとく成仏すととけり」、といふ言葉なのです。つまり、更に、草木国土、この日本の国、自然、草、木、川みんなが阿弥陀様のご慈悲で成仏するといつてをられる。それで、松野君はびっくりしたわけです。不思議なことですが、親鸞が亡くなってから大変な月日が立ち、これだけたくさんの人が親鸞を研究してゐながら、このことには誰も気がつかなかつたのです。親鸞の思想には、自然が救ひの一番大事な条件になるといふことが八十五才まではひびてきてゐなかつたのです。これは一体どういふことだらう。そのなぞ解きは、日本全体でやつと今はじまつたところなのですが、私にとつては、そのなぞ解きはもうとつくにすんでゐたんです。

親鸞は三十五才の時に先生の法然上人と共に罪を背負つて流された。法然ははじめ土佐国とありましたが、実際讃岐の国、親鸞は越後に流されてゐます。越後の場所は国府のあつたところ、現在の直江津といふところですよ。親鸞は京都生れの方でして海の生活を知らなかつた。その海を知らなかつた親鸞が、罪を得て、今の直江津市の居多浜に近い所に五年間ゐたのです。ほくも新潟に住んでゐたからわかりますが、日本海岸の冬といふのは、雪はそんなに多くはないんですが、シベリヤから吹いてくる嵐といったらものすごいんです。そのやうなところで、親鸞は毎日海を見てくらしてゐた。五年目に罪が許され、赦免状がとどきます。いいことは重

なるもので、そのとき親鸞と妻の恵信尼との間に長男が生れた。さうして、いよいよ罪が許されて故郷の京都にもどらうかといふ時に、師の法然がなくなつたといふ知らせがはひります。そこで、親鸞は、あと二年間直江津に滞在して喪に服し、亡き師の菩提を弔つたのです。そして三回忌の法要を終へて、春一月、旧暦の一月二十九日にいよいよ直江津を出発した。つまり正味七年間直江津にゐたこととなります。

実は俄然それから親鸞の著作の中に海のことばが出て来ます。例へば、群生海、これはただ衆生でもいいんです。それを群生海といふのは、この七年間の生活経験があつたからでせう。海はあらゆるものをみんなのみ込んでゐる。濁流をのみ込む。また海自身において、あらゆるほこりやきたないものをみんな吸い込んでしまふ。さういふ海といふ自然の持つ浄化力に親鸞は気がついたのです。それが一つ。

それからもう一つは雪です。一夜雪が降ると、きれいな銀世界になります。しかし、その雪の下には、みんなの真剣な生活がある。泣いたり、笑つたり、苦しんだりしてゐる血なまぐさい生活がある。それは紛れもない事実です。しかし、雪が、さういふものを全部包んできれいにしていくといふこともまた紛れもない事実なのです。親鸞が聖徳太子に傾倒なされて、その聖徳太子のご精神のどこをくんだかといふ、これは私どもにとつての非常な研究課題ですが、例へば、聖徳太子には「世間虚仮唯仏是真」といふお言葉があります。親鸞はこの雪と、雪に

包まれた泣き笑ひの人生との対比の間に、この太子のお言葉に対する実感をこめてゐたのでないかと思ひます。

それからもう一つは、大地です。これは例へて言ふと女性の力なんです。一家の中であらゆるほこりを吸ひながら、全部を清らかに育成して行く。母の偉大なる愛なんです。だから、全世界宗教史上、いたる所で大地は母の神として表現されてゐることがわかります。親鸞が、その大地の力をとりわけ強く感じたのは関東に移つて来てからです。最初は、今の群馬県に移ります。それから常陸の国の稲田といふところに移り、そこに一〇年ゐました。親鸞の名著、『教行信証』はこの時に書かれたのです。この稲田といふところには、ほくも行きましたが、このあたりの大地の、あらゆるものを育てていく力は大変なものです。

さうすると、

- (一) あらゆるきたないものを浄める力
- (二) あらゆるものを包み込む力
- (三) あらゆるものを美しくする力
- (四) あらゆるものを育てる力

それらは海、雪、大地といふものによつて象徴せられる「自然」ではないか。今までは、親鸞にとつて「弥陀の本願」は「あつまりて親鸞一人がため」であつた。つまり、親鸞は、阿弥

陀様ありがたうといふ実感を、阿弥陀様と自分といふ、人間的な取り結びに限定してゐた。ところが、その限定をはなれて、海も山も川も大地も、雪も言ってみればあらゆる自然、日本のあらゆる自然がみな阿弥陀であり、菩薩であるといふ、さういふことになった。それで、松野君は驚いたのです。それは学界での大変な問題です。

さうすると、もうみなさん、わかつて下さったでせう。昨日、小林先生が信ずるといふことは人それぞれによって違ふんだ。だけれども、民族の統一感の中にあるといふことで、それぞれ違ふ信じ方をしてゐてもこと足りたとおっしゃったことの意味が。昨日のお話の核心は、実はそこなので、それをぼくは承って、ああよかった、ぼくのお話したいと思ふことを、小林先生がちゃんと方向づけをしてくださった。これは明日はちゃんとお話しできると思ったんです。さういふ気持、わかつてくださると思ひます。

親鸞が以上のやうでした。それから、道元の場合について申します。涅槃経といふ中国で訳した漢訳仏典の中に、「一切衆生、悉有仏性——一切衆生ことごとく仏性あり」といふのがあります。「ことごとく」は漢文訳で「悉」と書きます。この世に生きてゐるあらゆる人には、みんな仏になりうる根本的な性質がある、かういふ言葉なんです。それを道元は、さういふ漢文は十分承知しながら、「一切衆生、ことごとく仏性有り」ととらないで、ことごとくありといふのを熟語に読む。すなはち「一切衆生、悉有は仏性なり」と読んだのです。すごいでせう。

さうすると、どういふことになったのかといふと、道元は、この世の生けるもの、ありとしあるものはみな仏性なり、仏性そのものである、ととつたのです。それは、前の、ことごとく仏性あり、とどこが違ふか。これについて少し説明します。

涅槃経の中にあるやうに、この世の生きとし生けるものは、みな根本的には悟りを開く性質を持つてゐるのだ、と読んだ場合におこり得る可能性が二つあります。その第一は、人間の中には仏性はあるが、仏性だけだとは言つてない。だから、悟りを開くのに邪魔になるもの、悪魔の性質があるかもしれないといふ可能性が残つてゐる。それが一つです。第二には、人間以外の生きものにさういふ悪魔の性質があるかもしれないといふ可能性があることになります。しかしかういふ二つの可能性が残されるやうでは思想の自覚として、徹底してゐないのです。ところが道元は、「この世の生きとし生けるもの」、そして、「この世にありとしあるもの」はみな仏性である。それ以外にほかに何も無い、悪魔の性質は何も無いと言つたんです。これは、親鸞が群生海の心に弥陀の如来の精神がみちみちて、しかも草木国土みな成仏するなりといふこととおんなじ精神ではないですか。つまり、この日本の自然、あらゆるものがみな仏だといふ思想ですよ。だから、仏教的にさう言つた。これを神道的に言へば、北畠親房の有名な「大日本は神国なり」といふ表現になるのです。そこで問題は、どうしてそんな人達が揃ひも揃つてさういふことを言へるやうになつたのかといふことです。親鸞も道元も、実は仏教精神、仏教

の考へ方といふものを徹底してここまで来たのです。しかし、それだけではすまない。まだまだくさんあります。一遍については、申し上げる時間がなくなりましたが、矢張り同じです。どうしてさういふ方向に、期せずして、そのやうなことを徹底せしめて言へるやうになったのか。

それには、「さう言はせるものが何かある」ことを考へなければいけないでせう。それは、決して妄想ではないのです。それを小林先生はイマジネーションと言はれた。私にはもっと確実な、確実な実感があるのです。たしかに日本には、優れた日本人に、ぎりぎりのところで期せずしてさう言はせるものがあり、それが不思議に働らくのです。それが小林先生のおっしゃる民族の統一感なのです。それをぼくは「日本のいのち」と言つてゐるのです。さう、「いのち」と言つていいぢやないですか。単なる自然や山ではない。単なる川でもなければ、単なる海でもない。自然も山も川も海も大地もみんな含んでゐる。そして、あなたも、君も、虫も、そして天皇様も、体制もみんな含んでゐる。それは「いのち」といふほかないのではないか。だから、敢へてぼくは「日本のいのち」と言ふのです。

人類が究極的に求めてゐるもの

ぼくがかねて勉強して来たねらひは、人間として全世界の人類は、どういふことをねらつて生きていけばいいと思つてゐるか、といふことです。だからぼくは、とにかく人類の残した知

恵といふ知恵に素直について試みようと思つたのです。そして人類の一番優れた人達は最後に人間はどうなつたらいいと考へてゐたか、そのねらつてゐるところに、できることなら自分を合せてゆきたいものだ。それがほくの一念でした。さういふことが、ここでいふ人類史的意義といふことなんです。それで、みんながねらつてゐるのは、国も、自然も、人も虫もみんな一つになつて、いのちを通はしていくといふ考へ方、それで十分だといふことなのだと思つてしまつたやうに、西洋では唯一つの神をたてるといふことによつて、後は全部教条主義的に切つてしまつたからです。

最後に時間がなくなりましたが、プリントの一番最初の、実は人間のものの考へ方に大きく二つあるといふことについて簡単にふれておきます。一つは、親から授かつたこの身、この心、それはいろいろ問題はあるけれども、それによつていとなむこの実人生をおいて、ほかに救ひの場所はないといふことを本当に確信し得てゐる、さういふ考へ方のタイプです。それとも一つは、それでは所詮だめだ、だから、もう一回死んでやりなほす。二度生れ変らなければならぬといふ考へ方のタイプです。かういふ考へ方は、例へば、ハイデッガーといふ有名なドイツの哲学者が、『ザイン・ウント・ツァイト』（存在と時間）といふ本の中で言つてゐます。人間が持つて生れたこの身、この心は、我々が好むと好まざるとに拘らず、この世界に投げ出

されてゐる、これをゲウォルヘンハイト（被投性）といふ。ところが、それではだめだ。新しくあの世に所属轉換をして、永遠を確保しようとして、それを投げ出して行く。これが、エントヴェルヘンハイト（企投性）。ハイデッガーはこのやうに説明してゐます。それから、ウィリアム・ジェイムス。彼は一九〇一年から二年、アメリカで最初にヨーロッパに招かれた学者で、アメリカの学問といふものの独立宣言をした人といつていい。有名なドイツのヴントのお弟子さんです。そのジェイムスが、人間が最終的に永遠を確保する道は何かといふ時に、やはり二つのタイプがあると云つてゐる。一つは、この親から授かったこの身、心で明るく現在にその永遠を確保できると信ずる人、これは健やかな心のタイプ。もう一つは、さうではなくて、所属轉換をして生れ變つて行かうといふ人、これを病める魂のタイプといつてゐるのです。

あと、ちよつとふれてないことがあります。時間がなくなりました。

とにかく、日本では、国土も、歴史も、自然もみんな一つとなり、虫にまでも心を通はしてゐる。それは人類のすべてが求めてゐるものなのです。それは求めても簡単に得られるものではないのです。

イタリアの政治学者で、ダント・レーブといふ人に、「ザ ノーション オブ ザ ネイション」（国家の観念）といふ本があります。その中で、彼は、「ネイション・ステイト」すなはち国民・国家といふ場合のネイションといふことは、支配者たる君主が實際さういふことを言

ひ出して利用するためだったといふことを言っています。

ところが、日本では自然も、歴史も、国民も、天皇様も、国土もみんな一つなのです。だから、それをぼくは日本のいのちといふ。それで完全にこと足りるのです。人類はさういふ一つのもの、総体のいのちを求めながら、実際にえられないから苦しんでゐる。だから、それがダント・レーブの指摘するやうな事態になってゐるのです。ところが幸ひにもわれわれ日本人は、そのやうに人類が求めに求めてゐるものを現に立派にもってゐながら、それと気づかずにゐるのです。しかし、一番始末が悪いのは、まさに、その「あるといふこと」がわからないといふことなのではないでせうか。

(文学博士・元国学院大学教授)

■ 輪読と短歌創作

輪 読 の 意 味

—黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と
日本文化創業』について—

夜久正雄



はじめに

読書と実行

輪読方式

黒上先生のこと

人物浮彫（鍋田横穴）

はじめに

はじめに、少し、本を読むといふこと、また「輪読方式」といふやうなことについてお話を
して、それから表題の黒上先生のご著書の講読に入りたいと考へてをります。

この合宿教室の「案内書」に、合宿で行なふ勉強のしかたについてのいくつかの項目が書い
てあります。その中に「和歌創作および各自の創作作品相互批判」といふことが書かれてま
す。これはこの合宿教室の特徴でもありまして、世間から注目されてゐることですが、十数年の
経験によりまして、筋の通った過程で行なはれてをります。みなさんよくご存じの通りです。

その案内書にもう一つ「テキスト・資料の『輪読方式』による共同研究」といふテーマがか
かげられてゐます。これは、短歌の創作批評とともに古典の輪読を学問の要かなめであると、私ども
は考へてをりますので、そのことを「案内書」に記したわけなのです。

読書と実行

元来、読書といふことは、ただ文字の上うへつらのみ読んで頭に暗記するといふことであれば、
学問としての邪道ですが、しかし、古人の残した心言葉を読み味はふといふことは、これは大
変大切なことです。学者だけが古典を読めばいいのだといふことであつてはならないので、ど

のやうな職業に立つ人であっても、民族のいのちを伝へる心ことを読みあぢはふことが、學問の根本にならなければならぬのです。

このことは昔から多くの偉人たちによつて指摘されてゐることです。

たとへば吉田松陰先生です。松陰先生といふ方は、非常な活動をなさつて、明治維新といふ大事業の力の源となつた方で、そのものすごい活動——実践については、みなさんよくご存じのこととせう。同時に、松陰先生は大変な読書家で、さういふ記録も残つてをります。われわれにはとても及びもつかないほどの集中力をもつてたくさんの書物を読破して、その中にご自分の体験に生かす言葉を求め、正しい道をすすんでゆかうといふ努力を、最後まで怠ることのなかつた方でございます。

それで、吉田松陰先生の松下村塾は、教育の本当の姿を示したところであつたと思ひますが、その塾には、「聯」といふものがかかげられてあつたのです。

「聯」といふのは、漢文の方からくるのですが、二句で一对をなしてゐる文章をいふのです。その聯にかういふことが書いてあつたのです。

自_レ非_レ讀_三方卷書_一 寧得_レ為_三千秋人_一

(萬卷の書を読むに非ざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるを得んや。)

自レ非レ輕ニ一己勞ニ 寧得レ致ニ兆民安一

（一己の勞を輕んずるに非ざるよりは、いづくんぞ兆民ちようみんの安きを致すことを得んや。）

「万卷の書」といふのですから、古来から今日まで残されてゐるたくさんの本を読むのであれば、どうして千年後にも伝へられるやうな偉大な人間になることができやうかといふ意味です。

「一己の勞を輕んずるに非ざるよりは」——自分のはたらきを惜しまないのでなくては どうして全國民の安寧をもたらすことができようか。

かういふ言葉を二句対句にして松下村塾にかかげたのです。さきほどちよつとお話しましたやうに、松陰先生は、ことごとにご自分の全力を發揮して問題にぶつかってゆかれた、その実践実行は、万卷の書を読むといふことと表裏してをられたのです。今日、仰ぎみまして、本当に偉い方だといふ感じがいたします。

読書と実行とについては、ほかにもいろいろ名句がありますが、『論語』にも有名な言葉がありますね。——「子の曰はく、學んで思はざれば則ち罔すなはやくらく、思ひて學ばざれば則ち殆あやふし」

〔論語〕為政第二

これは「学ぶ」といふことと「思ふ」といふこと——聖賢の言葉を学ぶことと自分の行為を

思ふこと——が学問の根本で、一方に偏してはならないといふことを言ったのです。「知行一致」といふことばもあります。

したがって、読書は、繰り返しますが、「文字の学者」になるのでは邪道ですが、書を読んで、その中にある「心ことば」を本当に自分の身に吸収するのは、人間が生きてゆく上に欠かしてはならないことである、と、私は信じます。

輪読方式

それで、こんどは、本の読み方といふことになりましたが、その重要な方法として私どものとりあげてゐる「輪読」といふことの話をしようと思ひます。私は、御紹介のありました通り、第一高等学校にありました昭信会の会員です。この「昭信会」と言ひますのは、黒上正一郎先生が昭和五年数名の一高生を集めて作った一高の学内団体であります。私が一高に入りましたのは昭和八年で、黒上先生はもう亡くなつてをられて、いらっしやいませんでしたが、私にとつての先輩諸氏が先生の衣鉢いぼつをついで奮闘してをられました。そこで私ははじめて「輪読」といふ読書方法を教はりました。

「輪読」といふ——「輪」はわですから、輪わになつて本を読むことと考へればよいのです。数名乃至十名くらゐですね、そのくらゐの人数で輪になつて黒上先生の御著書を読みました。



黒上先生の文章はリズムのある詩のやうな文章で、しかも仏典を縦横に引用して書かれてありますので、なかなか難かしい。さういふ本ですから、みんなで一所懸命に読みました。その頃はただ夢中で、この輪読形式といふことがそれほど力あるものとは自覚できませんでした。しかし、その後、約四十年間、いろいろの古典を輪読して、いまその重大さを信じていることができます。

『国史の地熱』の著者故桑原暁一先生を先達として、いま合宿に参加してをられる小田村先生、戸田先生、島田先生、それに葛西順夫、梶村昇両氏と私とで、聖徳太子の『勝鬘経義疏』の輪読にとり組んだのが十年前からです。その前にやはり十年くらゐ『古事記』を読みました。いまは『勝鬘経義疏』を一回終へて、二回目に入っております。

「輪読」の内容はどういふのかと言ひますと、よく

読んで、わからないところを疑問として提示し、お互ひに検討しあふといふことです。一日かけて一、二頁くらゐ進むといふ進度ですから、随分気の長いことですが、綿密にとことんまでわかるまでやるのです。参加してゐる全員がよくわかるまで議論するのです。考へちがひも思ひちがひもある、それをお互ひに指摘しあつて、くりかへし読んでゆきますと、文章をお書きになつた聖徳太子のお心といふものが、まざまざと感じられてくるのです。ああさうだったのか、太子はさういふふうに考へられてゐるのか！といふことが、本当によくわかつて、さうして、自分は何といふ足りない考へ方をしてゐたのだらうと思ふ。その時、聖徳太子が、私どもの勉強してゐる場に、現はれてこられるやうな感じがして、何とも言ひやうのない感動を味はふ時があります。それは私の生き甲斐です。私は輪読によつて、太子のお声を聞くことができ、自分の考へちがひも正され、新しい発見のよろこびも味はされてゐるのです。

そこで、ふりかへつて考へてみますと、聖徳太子の御著書そのものが、さういった一種の共同研究によつてできてゐることがよくわかります。

太子の『義疏』といふのは、漢訳仏典に対する註釈、解説書の体裁をとつてをられるのですが、その解釈をめぐつて、「一に云く」「二に云く」「三に云く」「或ひは云く」等種々の説をあげてをられる箇所があります。また「疑を標して云く」「釈して云く」とある箇所もあります。いくつかの説をあげて「私の釈は少しく異なり」とある箇所もしばしばです。

これらをよく読んで見ますと、太子と一緒に經典を読んでゐた人々の質疑や解釈がとりあげられてゐるのだらうと思はれる箇所が多いのです。その中には、私どもが經典原文を読んでゐる疑問に思ふのと同じ疑問がとりあげられてゐる場合さへあるのです。

つまり私たちが輪読をしてお互ひに疑問を出しあひ議論するのと似たやうな形が、太子の『義疏』における諸説のとりあつかひにあるのです。したがって太子の義疏は太子お一人の著述ですが、その内容としては、太子をめぐる何人かの熱心な共同研究者があつて、議論の末できたのであらうと思はれます。そのことが、義疏の文章の独得のあたたかさ、広大さとなつてゐるのです。

かういふ、輪読とか共同研究とかいふ背景をもつ名著は他にも沢山あると思ひますが、先ほど松陰先生の話をしましたので、松陰先生の『講孟余話』をあげたいと思ひます。これは『孟子』の講義ですが、松陰先生が野山獄の獄中で、同囚の人々を相手にして『孟子』の講読をしたのです。おそらく輪読もしたでせう。同囚の「諸君」に対する熱誠の言にあふれてゐるので、また「或る人曰く」「或^{ある}ひと疑ふ」として同学の人の質疑をあげて答へたり、諸学者の説をあげて論評する等、太子の『義疏』と同じ共同研究の精神をもつて書かれてゐます。

松陰先生が「先師」と仰いだ山鹿素行は、「忠臣蔵」の大石良雄の吉良邸討入の「山鹿流陣太鼓」で有名ですが、その名著『謫居童問』は書名の通り問答体の著述です。また近世の名著と

して有名な『解体新書』の出た経緯は、杉田玄白の『蘭学事始』に書かれてゐますが、『ターヘル・アナトミア』の輪読によるものであったことは周知の通りであります。

かういふ例をあげればきりがないのかも知れませんが、もう一つの例をあげさせてください。私はかつて幕末維新の歴史を調べたいと思ひまして『孝明天皇紀』を読みましたが、その中に、孝明天皇さまが側近の公家くげがたと『日本書紀』の輪読をなさつてゐる箇所を見て、驚きました。

桃園天皇ももとのが『日本書紀』の講義を宮中においてお聞きになられたことがいはゆる「宝曆事件」(竹内式部処罰)の発端となつたのですから、孝明天皇が『日本書紀』の講読を宮中においてなされたことは重大な事件です。しかしいまそのことを詳しくお話する時間はございませんので省略して、勉強のしかたそのものについてお話しします。

『孝明天皇紀』は申すまでもなく、孝明天皇御一代の編年の歴史ですが、単なる伝記ではありません。『日本書紀』などに見られる「○○天皇紀」の「紀」(編年体の歴史)です。そのところどころに、何年何月何日、今日から『日本書紀』第何巻から読む、今日は第何巻が終つた、といふやうな記事があります。相当長期にわたつて『日本書紀』が読まれてゐるのです。

そのやり方を見ますと、参加した側近の公家の輪番制で、いまのセミナーの原書講読のやうに、当番に当たつたものがつきつきに読んで来たところを発表するといふふうになつてゐま

す。ところがあるとき当番の公家が休んでしまつて、孝明天皇が代つて講読をなさつたといふ箇所がありました。これからしますと孝明天皇は、単なる聴き手ではなくて、積極的に研究に参加していらつしやつたことがわかります。したがつて他の公家たちも傍観はできなかったでせう。しかも「宝曆事件」に見られるやうに、幕府にとつて『日本書紀』の宮中講読はこころよいことではなかつたでせうから、これが単なる尚古趣味ではなかつたことは想像できます。熱心な意欲をもつて研究されたと考へてまちがひないでせう。それで私はこの孝明天皇さまの『日本書紀』の輪読が明治維新の源流の一つだと思ふのです。

輪読といふ学問の世界では、天皇さまも公家がたもひとつの心になつて文意の把握にとめられたでせう。天皇としての受け取り方、臣民としての受け取り方に、異なるものがあつたとしても、それはそれとして相互に理解せられるものでせうから、人間の眞実の発見についての努力に変わりはありません。君臣心をあはせるといふ体験はこの輪読といふご修行の中にも実現され実感されたはずであると思はれます。

こんなことを考へてきますと、輪読といふ五、六人の研究集会も、あだやおろそかに考へられません。小さな勉強会にも挙国一致の原動力を秘めてゐると思はれるのです。

聖徳太子に十七条憲法といふ御文章があります。これは文字通り当時の日本臣民の道を示されたもので、したがつて日本の国の国がらを哲学的道徳的政治的に宣明した最初の文章です。

これを読まないでは日本歴史を語ることができなと言へるほどの歴史に影響を与へた——といふより歴史をみちびいた——文章ですが、名前だけで文章そのものが読まれないのは残念なことです。

さて、その十七条憲法の第一条は、「和を以て貴しと為し、忤ふことなきを宗と為せ」といふお言葉ではじまる文章です。一応全文読んでみませう。

「一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふことなきを宗と為せ。人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

冒頭の一句は大変有名で「以和為貴」と書いた額の書などをよく見かけますが、これは当然つぎの「忤ふことなきを宗と為せ」といふ句につづくのであって、二句で一文をなすのです。あとの「上和下睦」と同じ意味です。第十条には「上下和諧」とある言葉と同じなのです。つまり一言で言へば、上にあるものは和らかな心を以て下をみちびき、下にあるものは親しみの心をもって上に順ひ、上下和諧一致して——「事を論ふに諧ひぬる時は、事理自ら通ふ、何事か成らざらむ」とつづくのです。

明治天皇が

千万の民のちからをあつめなばいかなるわざもならむとぞおもふ（明治四十一年「述懐」）

とおうたひになられた挙国一致の御信念、また、孝明天皇が

天がした人といふ人こゝろあはせよろづのことにおもふどちなれ（元治元年「述懐」）「詠五十首和歌」

とおよみになられた挙国一致の御悲願にも通ふ、全国民協力一致の御念願が、太子の憲法第一条の御精神です。

したがって、第一条は全文をよく読まなくては、第一句の意味もわからなくなってしまふのです。太子の「和」を単に「平和」とか「調和」とか言ひかへたのでは、太子の御精神はわからなくなってしまう。

ところで、第一条の「かなめともいふべき」「上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは事理自ら通ふ、何事か成らざらむ」といふ御言葉ですが、この御言葉の背景には国家の大事を君臣一体の協議によって決定して来た日本古来の政治の伝統のあることはいふまでもないのですが、

同時に『義疏』に示されたやうな「輪読」の御体験とでもいった共同研究の御体験もこめられてゐるのではないでせうか。

上下心をあはせて一心に問題の解決をはかるとき、事の正しい筋道が自然に実現して事が成就する——あるひは、事（出来事）と理（道理）とが自然に一致する、事が正しく実現されるともとれます。

輪読をやつてゐて、わからない箇所につきあたつてどうしても解決がつかない。みんないろいろに考へて、お互ひに信じることを述べあつてゆくうちにおのずから問題の焦点がわかつてきて、著者である太子の御精神がわかつてくる——さういった体験が、この第一条を読んで思ひかへされるのです。

もちろん太子の言はれるのは、国の大事についてのことなのですけれども、さう言った「上和ぎ下睦びて事を論ずる」ことが「輪読」の場で、練習できるのです。

第一条は前に申しました通り第十条につづきますが、さらに一番最後の第十七条にさらに詳しく説かれてゐます。

「十七に曰く、夫れ事は独り断ずべからず。必ず衆と与に論ふべし。少事は是れ軽し。必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ふに逮んでは、若しくは失あらむことを疑ふ。故に衆と相

弁ずれば、辞即ち理を得む。」

この最後の方に出てくる「辞」は「ことば」の意味です。第一条には「事理自ら通ふ」とありました。「事」はできごとの意味です。したがって第十七条の「辞」は第一条の「事」と同じやうな意味と思はれるのです。「理」は訓は「ことわり」で前に「道理」と訳しましたが、日本語では「道」（みち）に近いのではないのでせうか。日本語では「辞」は「言辭」（コト）で、「事」（コト）と同じで、言と事と一致するのがマコトといふのです。「辞」すなはちコトバが「理を得る」——道にかなふといふのは、正しい考へがなり立つといふことです。それは実行にうつる心がまへが成就するといふ意味です。団体協力の「心ことば」が生れるのです。

「輪読」といふのは、小事と言へば小事ですけれども、ある一つの文章が本当によくわかるといふことは、精神の世界にとつては、大きなことです。ある人の真実をあらはしたことを感じとることができるか、できないかといふことは、人の心にとつては大変大きなことと言へませう。

古典の中にある真実のことばを感じとる努力を、力をあはせてやってみるといふ輪読の場といふものは、大きなことをも正しく処理する方法を学ぶ場になるにちがひない、——私はさう

信じます。そんなことで、太子の御言葉を「輪読」といふことに近づけすぎたやうな感がありますが、どうも太子の御言葉を読んでをりますと、その背後に、太子を中心とする数人の研究の「輪読」のすがたが浮んできますので、お話いたしました。

元來書物は一人で読むのですが、一人だけで読んでゐては発明するところが少いのです。私は学生諸君との輪読を長くつづけてゐますが、私が当然のことと思つてゐることについて学生諸君から改めて質問を受けることによつて随分勉強させられるのです。反論や抗議であつても、それを古典のことばの受け取り方といふ点で考へあへば、茫漠とした一般論になりませんから、正しい解釈とまちがった解釈との区別もよくわかつて、お互ひの心に通ひあふものが生れてくるのです。輪読をリードする人がえらいのではなく、そこに参加してゐる人がみんなで力をあはせて真実を発見するのです。参加してゐる人がみんなで一所懸命に読み、出された問題を一緒に考へ、間違ひだと思へばそれを直しあひ、全身心を集中して語りあふときに、古典の真実にふれる思ひを味はふことができます。そんなとき、輪読してよかつたなあ、と思ひます。ありがたいと思ふのです。

黒上先生のこと

さて、これから演題の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の講読に入ります。これはこ

の人数では輪読ができませんので、そのほんの手引といふことで一箇所講読するのです。

黒上先生は、昭和五年に三十歳で亡くなられた方です。二十歳前後から太子の研究に心をこめられ、徳島の中学校を出て実務につかれたのですが、それをやめて上京され、研究と教育とに専念された方です。中学を出ただけの方でしたから大学教授のやうな職におつきになりませんでした。教育の重大さを考へられて、第一高等学校に「昭信会」を、東京高等師範学校に「信和会」を創立して学生を指導されました。ただ一すぢに太子を仰いで、太子を仰ぐ思ひを教育と研究とにそそがれたのでした。その研究は、当時の識者の認めるところで、東京帝国大学の国語国文学科の機関誌『国語と国文学』及び東京高師の『教育思潮』に連載されました。また東京帝大の山上御殿で研究発表も行なはれました。大学出身者でない民間の青年学者教育者としては異例のことであつたのではないでせうか。しかし、先生は、闘争を主とするマルクシズムが青年の心をとらへるのを心配して日夜努められたため遂に過労のため若くして病死なさつたのです。

黒上先生が心魂をこめて書かれた文章は、今日、それから四十年以上たつて、少しもその価値を減ずるものではありません。黒上先生は三十歳で亡くなられました。私はぼつぼつ六十です。黒上先生がこの文章を書かれたお年からすれば三十年以上も生きてゐるのですが、いまでも先生の文章が私の人生の教科書であることに変わりがありません。年なんかあまり問題ではあ

りませんね。黒上先生がこの文章を書いてをられた四、五年の間の、精神の集中力と広大さからすれば、私の人生の四十年は何だか影がうすれてしまひます。若い時でも、精神を集中して心を働かせれば、非常に大きく心が働らいて大きな力を發揮するのですね。「念力岩をも通す」といふことばを小林秀雄先生が引用されましたが、その念力といふのは六十歳の念力が十四歳の念力を上廻るといふやうなものではないのです。同じものなのです。黒上先生は、十年、ごく短かく言へば四、五年の間に、精神を集中して、聖徳太子の精神の世界に入つてゆかれたのです。その先生のおついまごころの中に太子の精神がよみがへったのである。それがこのご本である、と私は思ひます。太子の研究書は沢山あります。数へ切れないほどありますし、今後も沢山出るでせう。しかし太子の精神がこれほど生き生きと強くをしくあらはれる書物は、稀有のものとなりませう。黒上先生の魂——いのちがこもつてゐるからです。

先生の研究態度を示す一節を講読して私の拙い話を終ります。

「されば太子に関する研究は単に一代の功業の事蹟に止まらず、其の功業の依つて来るところの信仰思想に徹入し、ここに東亜大陸の文明を選択融化して国民文化の根柢を確立したまひし内的偉業を窮尽すべきであつて、これ我文明の世界的意義を光闡する所以であると共に、又東西文化交流の中心にある現国民精神生活にとつて、その指導的光明をあたふべき重

大の研究であると信ずるのである。

既に述べたるが如く三経義疏は、太子がその国家統治の根本精神を開闡したまひしところの拾七条憲法と表裏して、世界に出づべき我が国民生活を指導せられたる御精神を永久の世に留め給へる聖典であつて、単に仏教教義の説示のみを目的とせる書ではない。されば之が研究に於いても、単に一般仏教の概念形式を以て批判解釈するが如きは、決して御心を闡明する所以ではないのである。その概念的表出に於いては、或は大陸仏教、また儒教のそれと同じきが如く見ゆる箇所ありとも、之が具体的内容を表現せさせ給へる御言葉の微妙の脈絡は、常に太子自らの痛切の御体験を顯示するのである。

故に太子の御著作の研究は、単に語義分析、また教理的研究にのみ踳踏することなく、常に之が御撰述の内的動機を憶念し、国民的讃仰の一念に基きて、其の御言葉の心理的内容に徹到すべきであつて、これらの分析的研究所と又外的功業の叙述とはここに統御せられて始めて之が意義と価値とを生ずるのである。

凡そ精神科学的研究は人生そのものを対象とするが故に、冷静なる学術的研究もまたそれが研究者の体験に統一せられて生命を得るのである。殊に悠久の国民生活を照し給ふ御心の表現に対しては、研究そのものも亦現実生活に於ける憶念の信の実現を念とし、同信師友の協力によって無窮に相統せらるべきと共に、又それは御心によって開発せしめられたる研究

者の信念告白を内容たらしむべしと信ずるのである。」（序説八一―九ページ。読み易くするために原文二段落を四段落に分けた。）

（亜細亜大学教授―国文学）

短歌創作の手びき

小柳左門



短歌創作の動機

短歌の伝承

——防人の歌と寺尾博之氏遺歌——

短歌の作り方

人物浮彫（長岩横穴）

短歌創作の時間が近づいてきましたが、短歌を作らなければいけないのが負担になってしやうがないといふのが、皆様の偽らざるお気持ちでせう。たしかに短歌を作らうとしても、思ふことを五七五七七の形に整へることはなかなかできませんが、四苦八苦してやっと短歌が出来た時は本当に嬉しいもので、その時の広がるやうな気持は、皆様が実際に作ってみられればきくと感じられるはずです。

短歌創作の動機

私が大学に在学中は、エンタープライズ号佐世保寄港や、大学運営に関する臨時措置法案などをめぐって、大学内は長期に亘って繰返し紛争にまきこまれました。構内では激しいマイク合戦が行はれ、ケバケバしい文字で書かれた大きな看板が林立して、壁といふ壁、窓といふ窓にピラが貼られました。ヘルメットを被った学生が授業を妨害し先生をこ突き回はすといふことが日常茶飯時のやうに行はれ、大衆団交と称して、先生方を長時間講堂に軟禁して罵倒するといふ、異様な状態が続いたのです。

彼らは、反戦と叫びながら、自分の主張に反対する者には、ゲバ棒を持って襲ひかかり、平等と言ひながら、教官と学生、さらに学生の内部を、思想信条の違いだけで分断していつて、何の矛盾も感じないかのやうでした。

言葉は、本来人の心と心を結んでいくかけはしだと思ひます。しかし学生運動家にとつては、言葉は、一方的に自分の主張を押しつけ、相手を洗脳するための道具にすぎないのです。ところが大袈裟な誇張した言葉は、次第に訴へる力を失っていく。彼らはそのためにさらに大袈裟な表現をして人を惹きつけようとするのですが、その繰返しの中で、私たちの心の中には空虚感が深まっていく一方でした。

かうして大学紛争は、人々の信頼感をズタズタに引裂いてしまひましたが、それは人々が言葉に対する信頼を失つてしまつたと言ひ換へることも出来ると思ひます。いまでこそ学生運動は下火になつてゐますが、この言葉に対する信頼の喪失、言葉に対する無感覚といふものは當時のままいまもなほ放置されてゐるやうに思ひます。感覚的には、人の耳目を驚かす表現にはいつも出合ひますが、感銘を与へる言葉に触れることが何と少ないことか。私たちは日頃、何気なく言葉を使ひ、人の言葉を聞く時も大雑把に聞き逃すことに馴れてしまつて、ひとつの言葉をじっくり味はふといふ経験は皆無に等しいのです。人々は自分のいのちを大切にすると申しますが、いのちを大切にするといふことは、言葉を大切にすると申すことと申す。私達がこの合宿でかうして一緒に短歌を詠まうとするのも心を整へることは言葉を整へることだと思ふからです。そのやうなことを頭においてまづつぎの短歌を読み味はつてみたいと思ひます。

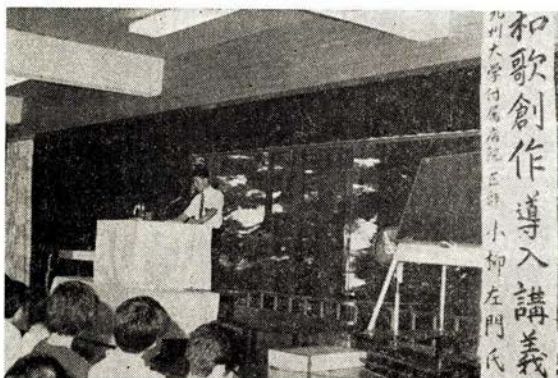
これは明治天皇の御製（天皇のお作りになつた和歌）です。

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなり
ゆくむしのこゑかな

静かに耳を澄まして聞いてみると、最初は、近くに
ゐる虫の声だけが聞こえてくる、しかし、やがて遠く
で鳴いてゐる虫の声、小さな声で鳴いてゐる虫の声ま
でが次第に聞こえてくる。「静かに」虫の声に耳を傾
けるといふ心の姿勢が、自ら「聞くままにしげくなり
ゆく」といふ体験に密接した、微妙な表現を生み出し
てゐます。深く胸に染みわたるやうな御製です。

さまざまの虫の声にも知られけり生きとし生ける
ものの思ひは

じっと耳を澄まして聞いてみると、一匹一匹の虫が、
それぞれの命を惜しむかのやうにさまざまの声で鳴き
交はしている。その声を聞いてみると、生きてゐるも
の、すべての思ひにつながっていくやうだ。ここで
は、作者もまた生きとし生けるものの一人なのです。



虫の命と作者の命とは響き合ひ、一つに溶け合つてゐます。このやうに一匹の虫の命にも無限の思ひを寄せていかうとされる御姿をお偲びする時、私はそこに私達の人生にとって最も大切な心のあり方が示されてゐることをしみじみ感じさせられます。

私達は、この合宿で、相手の言葉を正確に聞きとらうと努力してゐます。一所懸命相手の声と言葉に耳を澄ませる。すると、その一語に友の深い思ひが感じられてくる。そのやうに感じとる心を鍛へていくのが、この合宿教室の大きな目標だと思ふのです。

知識を深める、判断を早く行ふといふ訓練は、学校教育では盛んですが、深い思ひやりを育てていく教育は現在殆んどなされてゐません。むしろ、「思ひやり」のやうな感情や情緒については個人々に任せるといふのが今の教育ではないでせうか。そのやうな中で、人々の心は次第に枯渇していつてゐます。このやうな風潮の中にあつても、物に感動出来る心を失ひたくない、鍛へていきたいといふのが、私が短歌を勉強しようと思つた出発点でした。

短歌の伝承 — 防人の歌と寺尾博之氏遺歌 —

私達の祖先は古事記、万葉の昔から、その心を短歌に託して残して来ました。その言葉をたどつてゆけば私たちの祖先が、いかに多くのことを感じ、それを歌に託して表現しようとしたかがわかるのです。

まず、防人の歌。万葉集の二十巻に収められてゐる歌です。防人は、奈良時代、日本の守りのために、東国の村々から召し出されて、筑紫の国に派遣されて来ました。当時の人々にとつては、この九州に来るといふことさへ大変な旅で、その途中で亡くなった人も幾人もあると伝えられてゐます。

忘らむと野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも

万葉の昔に詠はれた歌ですが簡明直截に詠まれてゐるので現在の私たちにも直接に伝わってきます。父母のことを思ふと、胸が張り裂けるやうに恋しい。その辛い思ひに耐へることが出来ない。いつそ忘れてしまはうと思ふ。しかし、どれほど忘れようと思つても、父母のことは忘れられないなあ、といふことでせう。「野行き山行き」の「行き」の繰り返しに一人の若い防人の切実な感情が具体的に示されてゐます。

蘆垣あしの隈くまどに立ちて吾妹子わがむすめが袖そでもしほほに泣きしぞ思はゆ

蘆の葉で作られた垣のかげで、私の妻が、ほかの人に、知られないやうに身をかくしながら袖もしほれるまでに泣いた姿が思はれてならないといふことです。「泣きしぞ思はゆ」の「ゆ」は、自発の助動詞ですから、自然に妻の面影が思はれてならないといふことです。

韓衣からころも裾すそにとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母お母なしにして

韓衣は戦に発つ時の正装だと思ひますが、その裾にとりついて泣く、まだ背の丈もいかない

幼い子供たちを置いて来てしまったなあ、母もないままにして、といふのです。母のない子供を置いて九州まではるばると旅立つ防人の切々たる思ひが伝はって来ます。父母を思ひ、妻を慕ひ、子供を思ふ、その悲しみの情を、うちつけに防人たちは詠ひ上げてゐるのです。

今日よりは願かへりみなくて大君の醜しこの御楯みたてと出で立つ我は

この歌を詠んだ防人もまたふるさとを離れ難く思つて、悲しみ苦しんだと思はれますが、今日からは、そのやうな思ひを願かへりみることなく、天皇をお守りする、ただけしい兵士として出でたつのだ、私は、といふことです。恋しい人々と別れていかななくてはならない、その悲しみ、それはいはば「私」の情です。自分は、昨日まではその情にかかずらつてゐた。しかし、どうにもならない悲しみにじつと耐へる中から、その気持に背いて、公の使命のために身を尽くさうとする雄々しい決意が生まれて来たのです。「今日よりは」と断ち難い思ひをふり払ふやうな言葉。「出で立つ我は」といふ倒置法の表現に、防人の強い決意が偲おもげられます。「私」の情にかかずらふ気持と「公」に尽くさうとする気持と、その二つは、実は相容れないものではない。両方の気持を二つながら持ち合せ、そこにさまさまな葛藤かつとうが生まれてくるといふのが、私たちのありのままの人生の姿ではないでせうか。そのやうにゆれ動く気持をそのままに詠んだのが防人の歌なのです。

次にずっと時代が下つて今を去る三十年前、昭和二十年になくなられた寺尾博之といふ方の

短歌を読んでゆきます。寺尾さん(私の父の先輩であったこともあって、常々寺尾さんと呼びならはしてをりましたのでこのやうに呼ばせていただきます)については、夜久正雄先生と山田輝彦先生が書かれた「短歌のすすめ」の二六〇ページに詳しく紹介されてゐます。

寺尾さんは、昭和十八年二十一歳で、大学に籍を置いたまま学徒として出陣されたのですが、その出陣を前にひかへて、数人の心知る友達といま私たちが居るこの霧島温泉を訪ねて来られ、その友らと名残り尽きない語らひをされて詠まれたのが次の連作短歌です。

霧島温泉にて

寺尾博之氏遺歌

再びは見る日もあらしきりしまに友と眺むる月の影かな
ゆけむりの上に輝く月かげにうせにし友をしのぶ夜かな

再びはくる日もあらし霧島のいでゆに遊びし夜忘れめや

友どちと露天の風呂にひたりつつ木の間がくれの月を見るかな

友どちの寝がほを見つつせせらぎの音聞きをればうづまく我が胸

つつがなくあれば今夜もともどもに遊びしものと友を恋ふかな

きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ

一首目の「再びは見る日もあらし」と、二句目で言い切った表現にご自分の運命を痛感なされた深い悲しみが切々と伝はってきます。「友と眺むる月の影かな」と、朗々とした響きを以つ

てこの歌は結ばれてゐます。寺尾さんは二首目四首目にも、いとほしむやうに月を見つめて詠んでをられますが、「月の影」、それは永遠に夜空を照らす光なのです。死を予感した切迫した感情は、自から、永遠なものを希求すると思はれます。

二首目の「うせにし友」、それは自分に先だつて戦に出て、亡くなった友と思はれます。やがては征く自分の運命を感じつつこの歌は詠まれてゐるやうです。「再びはくる日もあらし」、これも第一首目と同じく二句で言い切った切迫した表現です。

五首目、今宵限りとの思ひで酒を酌み、語り合つた友らも、すでにみな眠ってしまった。暗い部屋のうちにぼんやり見える友の寝顔を見ながら、深いしじまの中に、絶間なく響いてくるせせらぎの音に作者は聞きいつてゐます。国のために命を捧げようとする決意、しかし、そのためにはこのかけがへのない友らと別れていかなければならない、この、どうにもならない現実の世の悲しみをちっと見つめた人の思ひが、「うづまく我が胸」といふ言葉から伝はつてきます。

寺尾さんは、終戦当時福岡にある軍需管理部に勤務してをられました。終戦五日目の八月二十日未明、軍人としての責務を痛感され、上司であった永島中佐と共に福岡市郊外の油山中腹で壮烈な自刃をとげられました。しかし、寺尾さんの肉体は消え果てても、その真心は歌の調べとともに、私たちの心を揺り動かさずにはおかないのです。

このやうに日本の国民は、防人の昔から現在に至るまで、その切実な思ひを短歌に綴つてまゐりました。防人も、寺尾さんも、専門歌人ではありませんが、そのやうに名もない人々が長い間短歌を作りつづけてきてゐるのです。私たち日本人はこのやうに素晴らしい伝統を受け継いでゐます。歴史を貫くこの広やかな世界、短歌の世界に私たちも飛び込んで行かうではありませんか。

短歌の作り方

では、実際的な短歌の作り方について考へてみませう。短歌を作るに當つて、まず心掛けたことは「自分の感じたことをありのままに正確に表現する」といふことです。感動した時の気持をもう一度正確にふりかへつて、そのままに表現しようとするのが、まず、短歌の第一歩だと思ひます。感動を人に伝へたいために事実を誇張する。あるひは、自分の気持を曲げて表現するといふことをまず慎しまねばなりません。昨日、小田村先生のご講義の中に、田安宗武の次のやうな言葉がございました。

「心に浮かみ出づることを、そのままに得言ひ難ければ、言葉のために心を変へて、つひに浮かびたることに至る」

心に浮かんだことをありのままに言ふことがむずかしいので、逆に言葉のために心がひきづ

られてしまつて、最後には軽薄な表現になつてしまふといふことでせう。たしかに、感動したことを歌に詠まうと思つてもなかなか歌ができない時、感動の内容を事実と反するやうに詠むと、うまく五、七、五、七、七、に収まるといふことがしばしばあるのです。しかし、そのやうな歌をいくら詠んでも人の心に訴へることは出来ないし、第一何のために歌を詠むのかその意義は全くわからなくなつてしまうのです。そのやうなことではなく自分の実感にそぐはない言葉を払ひのけて、自分の気持をありのままに伝へる言葉を探し出す。その努力が短歌創作の基本だと思ひます。

自分の経験したこと、感動したことを、ありのままに短歌に表現すること、これを正岡子規は「写生」と呼んで、短歌創作の基本としました。正岡子規は、当時の歌壇の短歌が、空想や技巧に走つて、心情のままを吐露してゐない風潮に対し、「歌よみに与ふる書」などで、これを批判しつつ短歌のあるべき姿を訴へ、短歌の歴史において、画期的な偉業をなしとげました。子規は、肺結核に侵され、晩年は寝たきりの生活でしたが、結核をもととして発症する背椎カリエスの激烈な痛みにも耐へながらも、彼はその燃えるやうな心情を、文章に、短歌に、俳句に綴つたのです。

子規は、三十六才でその生涯を閉ぢましたが、亡くなる前の年に次のやうな連作短歌を詠んでゐます。

正岡子規の短歌

病室のガラス障子より見ゆる処に裏口の木戸あり。木戸の傍竹垣の内に一むらの山吹あり、此の山吹もとは隣なる女の童の四五年前に一寸許りの苗を持ち来て戯に植ゑ置きしものなるが、今ははや細もて束ぬるほどになりぬ。今年も咲きくゝて既になかば散りたるけしきをながめ、うたた歌心起りければ原稿紙を手に持ちて

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花

小繩もてたばねあげられ諸枝の垂れがてにする山吹の花

水汲みに往來の袖の打ち触れて散りはじめたる山吹の花

まをとめの猶わらはにて植ゑしよりいく年経たる山吹の花

歌の会開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花

我庵をめぐらす垣根隈もおちず咲かせ見まくの山吹の花

あき人も文くばり人も往きちがふ裏戸のわきの山吹の花

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寝ながら見ゆる山吹の花

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

そほんろもう
粗笨鹵莽

出たらめむちゃくちやいかなる評も謹んで受けん。吾はただ歌のやすやすと

口に乗りくるがうれしくて

子規は、このやうに、庭先の山吹の花をいとほしむやうに、何首にも詠みつらねてゐますが、一首一首の歌を読めば、何の誇張もなく、目に見えるままの山吹の姿を詠んでゐるだけです。しかしその簡素な表現がかへって私達の胸に深い感銘を伝へるのです。床の上で、わずかに体を曲げることしか出来なかつたであらう子規が、その心は、こんなにも自由で潑刺としてゐたのです。この連作の最後に、「粗笨鹵莽出たらめむ ちゃくちやいかなる評も謹んで受けん。吾はただ歌のやすやすと口に乗りくるがうれしくて」(粗笨は粗雑といふ意、鹵莽とは軽卒に事を行ふこと)と記してゐますが、ここで言ふ、「歌のやすやすと口に乗りくる」といふのは言葉が安直に出てくることとは違つて、自分の思ひが、そのまま、五、七、五、七、七、の歌の調べ、言葉の韻律となつて表現されていくといふことでせう。短歌創作経験の少い私たちには、まだ、やすやすと歌は詠めませんが、自分の思ひが素直に歌の調べとなつて生まれてくるよるこびを、子規はこのやうに述べてゐるのです。それは、自分と山吹の花が、歌を詠むうちに一つになつていく喜びだろうと思はれます。このやうに、身の回りの一つ一つの物と一体になつていく、その感動が短歌の世界にはあるのです。それは、先ほどの虫の声を詠まれた明治天皇

の御製にも明らかに示されてゐます。

短歌の実際的な作り方については過去の合宿教室のレポートに詳しいのでここでは省略させて頂きますが、特に何かの方法論があるわけではなく、要するに、思ふがままに作っていかうとするのが、私たちの短歌だと思つてゐます。

明治天皇の次の御製は、短歌創作の基本を示してをられるやうです。

思ふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

歌の調べにならなくてもいいではないか、思ふことを思ふままに言つてみようといふことです。

私も歌を詠まうとする時には、なかなか歌が出来ません。その時に、この歌を口ずさみますと、いままで、いい歌を作つてやらう、みんなを驚かすやうな歌を作つてやらうと氣負つてゐた氣持が解きほぐされて、次第に心が統一され歌が出来るといふ体験をしたことがたびたびあります。

私たちは、福岡に住む友達と、毎月お互ひの短歌を批評しあつてゐますが、短歌を的確に批評するといふことは、実に難しく一首の歌を、何十分もかかつて考へるといふこともしばしばですし、沈黙の時間が延々と続くこともあります。しかしその長い時間は、短歌に表現された

言葉に沿ひながら、心をくだいて友の心に迫っていかうとする時間なのです。この経験が続けていくうちに、真心のこもった歌ならば、表現にたとへたどしさが残ってゐても、きつと人の心を動かすといふことに気づいてまゐりました。友達の真心のこもった歌に出合ひ、その歌を読み味はふと、自分の心、といふか、命までも洗ひ清められる思ひがしてくるのです。このやうに短歌を作りあひ、一緒にその心を偲びあつた友達は、生涯忘れ得ぬ友になるでせう。昨年の夏、雲仙で行はれた合宿教室で、第十班の諸君が、合宿最後の夜の残り少ない時間を、虫の声を聞きながらみなで短歌を作りあひました。

さ夜ふけて虫の音聞きつつ友どちと歌詠みかはしたり名残惜しみて

ききなれし虫の鳴きゐる雲仙の山を下る日近づきにけり

夜もふけて体休めしわれの耳に心やすらぐ虫の声かな

さえわたる虫の鳴く音に歌つくすることも忘れぬ静けき夜半よはに

夜もふけて寢床に入ればきこえくるさやけき声にしばしききいる

眠らんと床に入りて眼を閉づればかすかな虫の声の聞ゆる
虫の音を詠みかはしたる友どちは明日は互ひに別れゆくなり

高くなり低く聞こゆる虫の音に枕ならべて我ら聴き入る

窓の辺に我身を寄せて聴き入ればひときは高くチチとなきけり

友どちと枕ならべて歌詠めば明日にせまりし別れかなしも

彼らが短歌を作ったのは、おそらくこの合宿が初めてだったと思ひますが、一匹の虫に、皆で耳を寄せ合ふといふ体験のなから、こんなにも、素晴らしい歌が出来てゐるのです。この体験を通して、彼らはきつと一つに溶けあつていったはずです。このやうに一つ一つのことと心を寄せ合ふことの出来る友を得たことは彼らにとつて本当に尊いことだったと思ひます。合宿最後のこの夜は、彼らにとつて忘れることの出来ない夜になったことでせう。最後に、私の最も好きな明治天皇の御製の一つを拝誦いたします。

あさみどりすみわたりたる大空の広きをおのが心ともがな

あさみどりいろに澄みわたったこの大空、この大空のやうに広やかな心を自分の心として生

きて行きたいといふことでせう。

いまから、この合宿に参加した先生も学生も全員が短歌を創作するわけですが明治天皇の御製に示されましたやうに、思ふこと思ふがままに、そして、広やかな心のまにまに、短歌を作
ってゆきたいと思ひます。

(九州大学循環器内科医師)



青年研究発表

学生生活と社会生活をむすぶもの

東洋工業株式会社発動機部勤務

久々宮

章



同心円と鍵手文の線彫

(日輪寺古墳)

只今御紹介戴きました久々宮です。昭和四十八年九州大学の機械科を卒業して、現在広島東洋工業に勤務致してをります。私の会社は自動車・工作機械・さく岩機のメーカーですが、その中でロータリーエンジン組立現場の技術員として働いております。毎日続々と新しいエンジンが組み立てられてをり、その完成されたエンジンの耐久性の調査と向上に資するのが私に課せられてゐる仕事であります。ですから、上からの命を受けあるひは自発的に実験項目を立案し、実施し、その結果を報告することが主な役目なのです。エンジンの分解組立も自分達の手で行なひますし、それに必要な部品も工場内をあちこち駆けずり回って調達します。作業服は、ひどい時は一日で油に塗れ、又手や顔も油だらけになってしまひます。かうして毎日があはただしく、経験もまだ浅いのですから、仕事に追はれがちで一日を終はり寮にたどり着くとホツとします。そんな中で休日を利用して大学時代の友人や広島大学の学生数名が寄り集って読書会を開いてをりますが、私にとりましてはそれは日々の生活の中でのかけがへのない刺激と励みになってをります。

今日ここに皆様の前でお話するのは私のこれまで辿ってきた道、特に学生時代のことです。これは私にとりまして過去のできごとといふよりも、今の私を支へ、今も私の心の中に生き続けてゐることなのであります。

私が大学へ入学した頃は丁度、大学管理法案の是非をめぐって学内は騒然としてをりました。

連日のやうにアジ演説が繰り返され、講義の最中でさへがんとマイクの声が鳴り響いてくることも少なくありませんでした。革命、人民、圧殺、闘争勝利、支配階級、さういった言葉が前後の脈絡もなく次々と飛び出して執拗に繰り返されるのでした。活動家達の眼は異様なまでに血走って焦点のない漠然とした空間に向けられてゐました。前にはヘルメットをかぶった学生達が、無感動な表情で下を俯いたまま話を聞いてをり、話の区切りが付くたびに紋切形の「異議なし」という相槌や野次をとばすのです。それは虚しい光景でした。学内の掲示板は、赤や黒のペンキで書かれた大学に対する要求や政治スローガンで埋め尽くされ、また講義室の窓にもステッカーがベタベタと貼りめぐらされてをりました。このやうな事態は益々ひどくなり教養部本館のロックアウトにまで発展しました。これは学内の重要な建物を占拠して外部よりの出入りを遮断し、大学の正常な機能を麻痺させて自らの要求を無理矢理押し通さうとするものでありました。ですから、建物の入口には机、ロッカー、椅子が雑然と山のやうに積みまれ、講義を受けようとする者は、スト破りとして中傷罵倒され、力で阻止されたのです。憤りと口惜しさで一杯でしたが、私にはどうすることもできませんでした。機動隊の導入後、ロックアウトは解除されましたが、建物の中は滅茶滅茶に荒らされてゐました。壁が崩され、廊下と部屋とを仕切る板壁が破られてゐる。床に固定された机や椅子は根こそぎ取られ、廊下のタイルや階段の敷石は投石用として至る所剝がされ、壁には汚ならしく政治スローガンや落

書きが書きなぐられてをりました。それは目を覆はしめるやうな惨澹たる有様でした。教官室の書類もかき回され、持ち出されたものもあると聞きました。私はこのやうな現状を目のあたりにして、仮りに主義、主張が正しいとしても、このやうな行為は絶対に間違ひであり、結局これらの行為が生れるのは、その行為を正当化する彼らの主義、主張の根底を為す人生観、国家観そのものが誤まつてゐるからに他ならないのだと確信したのであります。この私の思ひに心から共感してくれる人はクラスにも、又それまで親しくしてゐた友人の中にもありませんでした。私は自分の思ひを受け止めてくれる友を求めやうになりました。

さうしたある日、ふと一枚の案内文が私の目に止まったのです。それは古典の読書会の案内文でした。西洋紙半枚のガリ刷で友に呼びかける思ひが素直にしかも簡潔に記されてゐました。そして、その最後には書



いた人の名前がはっきりと書かれてをりました。私はそれ迄学内で配られてゐたビラにはうんざりしてゐました。殺伐として、一方的で先づ何よりも自分自身にとって身近な問題として感じられなかつたからでした。ですから、私はこのビラを見た時、荒涼とした砂漠の中に渴を癒すべき泉を発見したやうな喜びと安らぎを覚えたのです。どうしてもこの文を書いた人々に会ひたいといふ気持で矢も楯もたまらず案内の場所へ赴いたのです。信和会といふ名がその会に付けられた名称でした。部屋の前に立つとさすがに躊躇しましたが、思ひ切つて戸を叩きました。中に入ると三名ばかりの学生が机を囲んで坐つてをり、その後の棚には数十冊の本が並べられてゐました。けばけばしいポスターもステッカーもなく私はホツと胸をなでおろしました。早速案内文を見てやつて来たことを告げますと、先輩方にはにこやかに自己紹介されました。それは快い、きびきびとした挨拶でした。続いて私も名前と学部を申しました。お互ひの素性を明らかにするのは、話を始める場合、自分の発言に責任を持つといふ点において最も基本的なことであると思つてゐますが、学内ではそんなことにはお構ひなしに議論のやりとりが始められることが極めて多いのです。私にとって今でもこの出会ひは印象深く残つてゐます。この時、私の言葉に親身に耳を傾け同感して貰へたことほどうれしかったです。語りがつ耳を傾けるうちに当初の力んだ気持も次第に和んでゆき、それとともに先輩方の言葉や物腰にぐいぐいと引き寄せられてゆきました。それまで探し求めてゐたものを遂に見つけたとい

ふ嬉しきで有頂天でした。かうしてある時は先輩の家や下宿を尋ね、あるひは呼ばれて語り合ひ、ある時は共に酒を酌み交はしながらの語りひとなり、深夜に及ぶこともしばしばでした。さういふ中で、今自分は何を学ぶべきか、ひいては、人生、学問、祖国についてどのやうに取り組めばよいのかといふ自分の生きてゆく上での根本的な問題へと導かれ、目を開かされていったのでした。やがて読書会に参加するやうになり、他大学の学生にも触れる機会が生まれました。と申しますのは、この読書会は毎週一回、福岡にあるいくつかの大学の学生と社会人及び先生方が寄り集って開かれてゐたからです。この集まりのことを私達は「輪読会」と申してをりましたが、所謂読後感想を互ひに述べあふといふものではなく、一冊の本を皆で少しづつじっくりと読み味はってゆくのです。この一冊の本は、黒上正一郎といふ方がお書きになつた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ本であります。この輪読では、文章の曖昧な把握による一人よがりな感想、あるひは単なる知的興味に基づく論議のやりとりを極力排しつゝ作者の思ひを正しく把握し、受けとめようと努めたのであります。私には初めての経験でただついでゆくだけで精一杯でした。素直な気持でとり組めるやうになつたのは、しばらく後になつてからのことでした。先輩そして友人の教へを受け、皆で言葉の意味を一つひとつ明らかにしてゆき、内容について互ひに論じあふうちに聖徳太子の言葉が自づと心に響くやうになり、私達の身近かな日々の生活に深く関連してゐることに気づくやうになつたのであります。そし

て、これらの言葉を折にふれて仰ぐことによつて自分の生きるべき道が次第に定められてまゐりました。

これからお話しする箇所はこの書の第二編「聖徳太子の信仰思想と国民精神」といふ章に出できます。

X X

仏教の經典「勝鬘經」の「撰受正法章」の中に菩薩が人々を教へ導く精神を示して、「不請の友となり（中略）世の法母と為る」と書かれてをります。その言葉を聖徳太子は自らお書きになられた「勝鬘經義疏」の中で次のやうに説かれます。

「友は是れ相救ふを義となす。然れども請ひて後に救ふは真の友に非ず。故に『不請の友と作る』と云ふ。菩薩の物を化するは慈母の嬰兒えいじに就くが如し。故に『世の法母となる』と云ふ。」

日頃より親しく交はる友人、それは互ひに助けあふものであるけれども、助けを求められて初めて救ふのでは真の友とは呼べない。それ故に菩薩はただ単に友とは言はないで「不請の友」となるとおっしゃるのです。菩薩とは大勢の人々が救はれる迄は自分も救はれたことにならないと考へる人々のこと、物とは生きとし生けるものこと、ここでは人々を指します。菩薩が人々を教へ導く接し方は母親が赤子に対するやうなものである。だから經典には「菩薩

は世の法母と為る」と説かれてゐるのだといふことなのです。このやうに聖徳太子は国民教化の基となるべきものとして「不請の友となり、世の法母と為る」といふ經典の言葉をひかれ、私達一人ひとりの最も身近かな友人、あるひは親との日々の生活における細やかな心の通ひ合ひ、さういふ人生の身近かな体験事実を照らして述べられるのです。私はそこに先づ親しみを感じたのであります。

私達は日々の生活において多くの人々との交はりの中に生きてゐます。その中でも自分のことをよく知ってくれ、様々に心を配ってくれる友に對し、より一層親しみと信頼の念を抱き、ありがたく思ふのではないでせうか。そしてさう感じてそれに応へていかう、共に励まし合ひ鍛へあひつつ学んでいかう、今度は自ら進んで友の力にならうとするところから心の通ひあひが始まるのだと思ひます。母親と子供の場合には最も深い絆で結ばれてゐます。母親が吾が子を身を顧みず一心に慈しみ育むのは、決して利害や得失があるからではないでせう。子供が重い病にかかれただひたすら病の癒えることを念じながら、子供の苦しみを少しでも減らしてあげたい、あるひは自分の身と引きかへにしてでも救はうとさへ思ふのであります。これは、私達自身が身近かに経験するごくありふれた事実です。このやうな思ひを自づと抱くやうになるが故に私達には母親を慕ふ念がいつまでも変はらないのであります。聖徳太子はこのやうな友との交はり、慈母と子の心の通ひあひの中に人々が共に生きてゆく上での最も基本的な原理を

見出され、さらに太子御自身この菩薩の精神を心に湛へながら、世のために身をもって国政に携はられたのであります。聖徳太子が生きられたのは、日本の固有民族文化と大陸の文化が交流接触した時代であり、国内的には、氏族制度の積弊に基づく内政の紛乱にさらされてゐました。冠位十二階、憲法十七条の制定はこのやうな中で行なはれましたが、太子は常に實際政治の革新は、国民精神生活の内的改革に基くべきことを確信され、さらに先づ内的改革を御自分の心の中に具現しなければ、国民を救ふことはできないと信じられたが故に、先づ率先して菩薩の精神を仰ぎつつ国政にあられたのであります。私はかうして黒上先生の文章を通して聖徳太子の御精神を学ぶうちに、自分が本当に美しいと感ずることを自らの日々の生活の一つ一つ実現してゆくことが先づ自分になし得る最も身近なそして大切なことではないかと教へられ、又確信するやうになつたのであります。翻つて考へてみますと、私達が心を通はせあつて生きてゆく共通の基盤は一体何でありませうか。イデオロギーでせうか。そうではないはずであります。つきつめてゆけば、結局私達がこの日本に生まれ、共通の歴史と文化と伝統を有してゐるといふ点であります。具体的には、その日本の歴史を貫いて先人達が最も大切に守り育ててきた心の姿勢を実感し、それを美しいと感じ、さらに共に仰ぎつつ生きてゆくところに、お互ひの信を深め、心を通はせてゆくことができるのではないでせうか。

その後、先生方の御助力を得て数名の友や先輩と一軒家をお借りして寮生活を始めました

が、それは互ひの交流研鑽をさらに深めることにありました。今考へるとこの時の寮生活が私にとって大きなプラスとなつてゐますが、当時は、あれこれと悩みました。たとへば心を通はせるといふ言葉にとらはれてしまつて、かへつてぎこちなく固くるしい生活に陥つてしまひがちになつたこともありました。自づと心通はさうとするのでなく、どうしても大上段にふりかぶつてしまひ無理が生じたのです。それは私自身が、心を通はせあはうとする自分の心を、暖かく大切に育んでいくことを忘れてしまつてゐたからだと思ひます。自分がなし得ることから着実に一段一段高きに登るといふことは実に難かしいことでありました。はじめからすぐ二段飛び三段飛びをしようとしてしまふ。しかし本当に大切なことは赤子を育てるやうに懐にあたため、十分に乳をのませ、病気をせぬやうに様々に心を配る、さういふ自分の心の養ひ方だと思ひます。寮生活で体験したことは数へ上げればきりがありませんが、私にとって大きな一つの試練であつたと思つてをります。

私は今まで学生時代の体験を話してまゐりましたが、学生時代に取組んだことは、その時かぎりのものではなく今も私にとって一刻もゆるがせにできない課題であります。大学を卒業し、広島に赴任して会社の仕事にとりくんである現在、私はいまなほそのことを益々痛感しながら日々をすごしてをります。そのことを思へば思ふほどみなさんが直面してをられる問題を決してかりそめにすることなく、真剣にとりくんでいただきたい。そのことを是非お話し上

げたいと思って壇に立ったのです。
御清聴有難うございました。

歴史教育について

福岡県立三池高等学校講師

志賀 建一郎



鳥と木の葉（穴が葉山古墳）

日本史を担当する高校教師として、私はまだ、一年余の短い体験しかもってをりませんが、その間、現在の歴史教育のあり方について感じましたことを御話したいと思ひます。

歴史教育のあり方については既に様々な論議がなされて居りますが、実際に教壇に立つてみますと聞きしにまさる問題が随所に姿を現はし、どのやうに考へていいのか全く途方にくれることも数々経験いたしました。なかでも一番残念なことは日本史の学習に於いて要求されるのが単なる暗記力、理解力、分析力だけであつて、「私達と血のつながった祖先」の歩みを偲ぶといふ要素が殆んど見出せないといふことです。ですから、生徒達の中に、赤穂義士の討ち入りといふ事件が好きでたまらない子供がゐても、或ひは織田信長や豊臣秀吉の物語りに血湧き肉踊るといふ子供たちがゐても、歴史の授業は、そのやうな子供の心情とは、全く無縁の所で行はれてゆくのです。何故このやうなことになつてしまつたのか。問題はいろいろと考へられるでせうが、何といつても現代の日本に於いて、歴史を学ぶことの意味、又、後世に歴史を伝えることの意味が、ひどく曖昧になつてしまつてゐることが最大の原因でありませう。すなはち歴史を学ぶことが、心をはたらかせるより、頭をはたらかせることに主眼が置かれ、歴史の事実が自分の生き方とは無関係のこととして語られるところに一番大きな問題があると思ふのです。さらに歴史教育を、特殊な政治目的の手段に使ふといふに至つては絶対に許せないと言はなければなりません。このやうに言へば、それは一部の左翼的な教師の偏向であつて一般の

教育界ではそれほどの問題はあるまいとお考へになる方がいらっしやるかもしれませんが、実はさにあらず、他ならぬ文部省の教育方針自体に実に憂ふべき問題が横たはつてゐるのです。ここに持つて参りましたのは例の家永三郎氏の教科書原稿を検定不合格にした時の文部省が出した通達です。家永教科書の偏向ぶりについては皆さんよく御承知のこととせうし、申し上げる時間もございませんで省かせていただきますが、私が問題にしたいのは、この家永教科書を批判した文部省自身の言葉の中に軽々に見すごすことの出来ない誤りがあるのではないかといふことなのです。誤った点、思ひすごしの点があれば、御指摘いただきたいと思ひますが、以下簡単に説明させていただきます。この通達の中で文部省は家永教科書を不合格にした理由を三つあげてをりますが、その第一点は次の通りです。

「第一に事実の取捨選択に妥当を欠いているところが少なくない。すなわち日本史にあっては『常に具体的な史実を重んじ、実証的、客観的方法に基づいて、日本史の発展を科学的に理解しようとする能力と態度とを養う』（検定基準、絶対条件(三)の3の(1)）ことが求められているのであるが、この原稿では、特に第4編第4章（戦後史・志賀註）などにおいて、史実選択の上に妥当を欠くものがある。」

家永氏の教科書に「史実選択の上に妥当を欠くものがある」ことは誠に同感であります。例へば近代に於いて、暴動や、一撥などは数ヶ所にわたつて写真が掲載され、又数名の社会主義

者達も大きな写真入りで紹介してあるのに、東郷元師や乃木大将の名前はどこにも出て来ないことなどはほんの一例ですが、そのやうな指摘は枚挙にいとまがありません。だが史実選択が妥当か否かを一体どのやうな基準で判定するか、その基準が問題でせう。ところが文部省はこれを『常に具体的な史実を重んじ、実証的、客観的方法に基づいて』とか、『日本史の発展を科学的方法に理解しようとする能力と態度を養う』ことが出来るか否かに、その基準を求めてゐるのであります。一見もつともなやうですが、よくよく考へてみれば、どうも不可解な文章であるといはなければなりません。当然のことながら過去の史実は膨大であります。これを選択するにあたって『具体的史実を重んずる』とか『実証的、客観的方法に基づく』とか言つても、それは殆んど何一つ言つてゐないのと等しい。或ひはさらに「日本の歴史の発展を科学的に理解しようとする能



力と態度を養ふ」とは一体どんなことか。一見平凡な言葉がならんでゐるやうですが、よく読めば多くの問題を孕んだ文章と言はなければなりません。過去の人口調査などであれば、凡ゆる史料をコンピュータにかけて、正に実証的に、客観的に科学的に把握することが可能でありませうが、一撥や暴動をどう扱ふか、東郷元師や乃木大将をどう記載するかといふことを同じやうに計量するのは不可能であります。ですから、この兩者をどのやうな比重で記すかといふことについて考へてゆけば、結局は客観的、実証的といふやうなことではなく、教科書著作者自身「歴史を見る目」の如何にかかってくると言はなければなりません。歴史を見る目とは、言ひ換へれば、歴史への愛情とでも言へませう。それは所謂史観とはちがひます。たとへば、現在の教科書では、英雄・偉人として、歌に、詩に、演劇に或ひは伝承によつて絶大な人気を博し、国民が国家を思ふ時の支へとなつてゐるやうな人々は、抹殺されるか、極端に軽んじられることが多いのですが、この背景には、歴史はそれら一部の英雄・偉人によつて作られたのではないとする、所謂唯物史観が横たはつてゐるからであります。しかし、このやうな特定の史観を通して歴史を見ようとしても結局は何一つ見えてはこないのです。さらに「日本史の発展を科学的に理解する」といふ言葉がありますが、これは一体どういふことでせうか。その背景にはまことにかたくなな進歩史観があると思はざるを得ないのです。かう見て来ますと文部省は、口では家永教科書を批判しながら、実のところ家永氏とは同床異夢の存在といふ程度

ではないかと思はざるを得ないので。さらに文部省の理由書には次のやうな言葉もあるので
す。

「第三に、過去の史実により反省を求めようとする熱意のあまり、学習活動を通じて、祖先の努力を認識し、日本人としての自覚を高め、民族に対する豊かな愛情を育てるといふ日本史の教育目標から遠ざかっている感が深い。」

この一文も実に不可解です。すなはち文部省は不合格理由として、「過去の史実により反省を求めようとする熱意のあまり」「日本史の教育目標から遠ざかっている」と指摘してをります。すなはち、この表現を素直に受けとれば、反省の熱意は結構だが、行き過ぎはいけないといふことでありませう。だが、これはおかしい。一体歴史教育を行ふ時に、「反省」を主眼として教へるといふことにも問題がありませうが、それはそれとして、この教科書に問題があるとすれば、それは「熱意」が強かったからではなく、反省の仕方に問題があったからだと言はざるを得ないので。家永氏は序論の中で「日本人は真剣に日本の過去を反省してみなければならぬ」「日本の過去に生れ出たいろいろの矛盾を自覚してこれを排除する決意を固くし、日本の過去の発展の道筋を把握して、いよいよその推進に努力する覚悟を新たにすべきである」と言ふ。だがこの反省とは何か。具体的に本文を見ると、「軍を中心とした右翼国家主義者たちが、民衆から浮き上がって封建的な勢力をふるった」といった言葉で表現されてゐるので

が、これは反省でも、歴史記述でもない。それは、単なる一つのドグマの表現にすぎないので、このやうな概括的な歴史の反省こそが批判されるべきであつて、「熱意のあまり」などといふ阿ねるやうな言ひ方をする事は断じて許すべきではないのです。

以上の点をまとめてみますと、歴史教育についての文部省の姿勢には到底家永氏を批判する力はない。日本の教育が直面してゐる問題が、家永氏に代表される偏向教育だけなら、問題はそれほど大きくはない。しかし日本の教育を背負つてゐる文部省にこの家永氏を批判する力がないといふことになればそれこそ問題です。

○

このやうな文部省の姿勢では、検定合格教科書に、多くの問題点がひそんでゐるのも当然ですが、次にその一例として、現在全国の高校で受検用として最もポピュラーに使用されてをり現在私も使つてをります、山川出版の旧版と新版二冊を材料としまして建国に関する箇所を吟味して参りたいと思ひます。前に記述したやうに日本史の教育目標として、「祖先の努力を認識し、民族に対する豊かな愛情を育てる」ことが挙げられてゐる以上、建国についての箇所は最も大事に心をこめて記述されるべきところでありませう。ところが教科書（旧版）には次のやうな記述があるだけなのです。すなはち、四世紀ごろの朝鮮半島の情勢を説明した直後に、次のやうに述べてあります。

「この間……倭人の社会がどのように進展していったかは、『記紀』の伝承があるだけではつきりしない。しかしおそくとも四世紀半ばごろまでには、現在の皇室の祖先を首長とする大きな統一国家をつくりあげたとみられてゐる。」（注・「古事記」「日本書紀」には、九州日向の地を発して諸賊を平定し大和で即位した神武天皇、大和の神々を祀つてこの地の支配をかため、四道將軍を派遣した崇神天皇、熊襲や蝦夷を征伐した日本武尊、新羅を討つた神功皇后などの伝承がある。）

ここでは建国の時期がいつであるかといふことは別にしても、記紀の伝承も簡単に紹介されるし、大和朝廷をつくりあげたのが、皇室の祖先にあたるといふ記述もありますので、それなりに一応の評価をして良いかもしれません。しかし問題はこの記述の中からは建国の喜びが全く伝はつてこないといふことです。冒頭の「この間倭人の社会がどのやうに進展していったかは」といふ記述を読んでも、それを、日本人が、われわれの祖先を偲んだ記述だと思ふ人はゐないでせうし、このやうな記述を読むだけでは、生徒達は、日本にとってかけがへのない建国の歴史も、殆んど他人事として読みすごしてしまふであります。日本の国が神武天皇の即位をもつて肇まったといふ伝承は、上古より語り継がれ、記紀に情熱をもつて記されて以来、我が国史を貫く感激の中心でありました。明治維新に於いて、神武創業の御代を仰いで、その精神に復らうとした王政復古にしても、或ひは明治維新後、神武即位の日を紀元節と名づけ、

国民が挙つて祝ふ日と定めたことにしても、皆この一貫した思想に基くものであります。だが現代の教育を受ける生徒達は、そのやうな基本的な事実に残んど気づくことなく、日本史を学んでゐる。もっとも、記紀の記述が事実として断定し難いといふのならそれはそれでいい。だがそれなら、伝承としてでも良いのですから、もっと心をこめた記述がなされるのが当然ではないでせうか。それが日本人が日本の建国の昔を偲ぶ、当然の姿ではないでせうか。神武天皇以下何代かの天皇の御存在が事実か否かといふことに疑問をもつのは結構でせう。しかし、それに拘泥する余り、建国の昔を仰いで来た日本民族の精神的事実を無視することは許されな。い。それこそ事実を歪める非学問的態度であるといはなければなりません。ところが今引用した部分は、実は旧版（本年度まで使用）の中からの引用ですが、新版（本年度より使用）ではさらに次のやうに改訂されてゐるのです。新版といふのは本来、旧版より改善されてゐると見るのが常識です。ところが実は逆になつてしまつてゐるのです。

「この間の倭人の社会について、文献でははつきりしたことがわからない。しかし大陸の情勢を背景にして、おそくとも、四世紀前半には、大和朝廷（注）によって、西は九州北部から東は中部地方におよぶ地域に政治的な統一体がつくりあげられていたと考えられる。」（注・大和朝廷は大和や、その周辺の豪族たちが連合してうちたてたものと思われ、各地の主要な連合政権や独立の小国を武力や外交によって服属させていった。）

旧版と比較して、ここには重大な変更が二ヶ所に加へられてゐます。一つは、記紀に関することが、完全に抹殺されたことで、それに伴ひ、旧版には記してあつた神武天皇以下の方々に ついての注記が削られたこと、一つは、大和朝廷と現在の皇室との関係が抹殺されたことであ ります。この無残な改訂の意図は明白でありませう。それは、天皇と国民との歴史的関係を無 視することにより、伝統的な国家意識を断絶、改変せしめようといふことでもあります。

かつて明治天皇は

橿原の遠つ御祖みおやの宮柱立て初めしより国は動かず

とお詠みになりましたが、このやうな建国の遠い昔への感激と共感が歴史教育の中によみが へる日は一体いつのこととせうか。その日を念じながら私なりに今後の歩みをつづけてゆきた いと思つてをります。

学校教育の現場に入って思ふこと

神奈川県立新城高等学校教諭

山内健生



直弧文と円文の線彫

(井寺古墳)

私が学校の教員になりたいといふことを家の者に話したのは大学三年の終りの時でした。

私の家は、自分で言ふのもおかしいのですが、いはゆる教育熱心で、例へばどんなに多忙の時でもあつても父兄会には出席するやうに努めてゐました。ことに担任の先生との個人面談は欠かさないやうにしてゐました。そして母は学校から戻つて来ると、先生からかういふご注意があつた、かういふお話があつたと詳しく話してくれました。ですから私が教員になりたいと言へば家族は挙げて賛成してくれる思つて将来の希望を話したのです。

ところが両親は意外にも実に複雑な顔をしました。教育の大切さも教員の仕事の重要さもよくわかるが、現実にも目に当りにする教員の姿はどうも自分勝手といふか、未成熟といふか、一人の人間として見ると信用するに足るとは言ひがたい。あのやうな人達の仲間に入って欲しくない、あのやうな人達になつて欲しくないといふ意味のことを盛んに言ふのです。私は非常に意外でしたし、いやな気持ちになりました。しかし教育そのものに対する家族の認識は深いはずだし、それ故の現実の教員に対する批判ですから、私はその時に「俺はいい教員になる」と言つて家族の同意を得ました。ですから私は社会的にみて「一人前の信用されるに足る人間になる」ことが「いい教員になる」ことだと平常から心がけてをります。

○

さて新聞を見ますと文部省と日教組の対立論争が報道されてをります。それらからうける印

象は教育問題の解決には文部省と日教組との話し合ひが何より大切であるのに、何故積極的に話し合はうとしないのかといふ感じですが。しかし現実に教壇に立つ身にしますと、マスコミがにぎにぎしく報道する文部省と日教組の対立はどのやうに現実の学校教育につながりをもつのだらうかと疑問に思ふことがしばしばです。早い話が教員の集りである日教組（日本教職員組合）のやつてゐることに教員の意思がどれだけ反映されてゐるのかがまず非常に疑問なのです。

日教組の定期大会が毎年いわゆる右翼団体の妨害でスムーズに開けないといふことで話題を提供してくれます。特に昨年（四十八年）は会場が二転、三転した結果、七月に群馬県前橋市でやうやく開かれました。ところがこの四日間の大会期間中に何をしてゐたかといふと、教育論議に二時間を充てた以外は、「社会党を支持するか」「共産党をも支持するか」といふ政治論議に日程が費されたのです。教育論議の出発点は党派心を超越するところにあるのではないでせうか。日教組のやつてゐることは本末転倒も甚しいのです。しかし日教組がどのやうな性格をもつ団体であるかといふことがおわかりになれば、政治を教育に優先させてゐる日教組のあり方も当然のことと肯れるに違ひありません。

日教組には「教師の倫理綱領」といふものがあるが、日本の教師はかくあらねばならないといふことを十項目にわたって説いてゐます。例へば第一項では「平和の擁護、民族の独立、擁

取と貧乏と失業のない社会の実現は、われわれに課せられた歴史的課題であり」「青少年は、各人の個性に応じて、この課題の解決のための有能な働き手となるように、育成されなければならない」「その必要にこたえるための学習を組織し、指導する」と記してゐます。さらに倫理綱領を解説して「搾取と貧乏と失業を伴う今日のような社会制度は根本から考え直さねばならない」「社会構造のかなめをとりかえる社会的措置がとられ、全く新しい立場から考えられた社会体制が生まれてこなければならぬのである」とものべてゐます。また『新しく教師になった人々に』の中では次のやうに記されてゐます。「貧乏のへだたりは、決して人間の勤勉と怠慢などの個人的資質にもとづくものではない」「そんなものではなくて実は、いわゆる自由主義経済、または資本主義経済機構に真因がある」「例えば、いまあなたが社会科の時間になにかの単元で、



いまの社会はダメだ、これをぶちこわして、もっと民主的な、生産と消費を合理化した、そういう社会にしなければならぬと教えてごらんさい。そういうふうに教えるべきである」。

「社会構造のかなめをとりかえる社会的措置」とは文脈から見て社会主義革命であることは明白です。即ち「われわれに課せられた歴史的課題」とは正しく社会主義革命を成就することに他なりません。そのための「有能な働き手となるように」青少年は育成されねばならないとしてゐるのです。教育の目標も教師の使命も社会主義社会の実現にあると言つてゐるのです。これが日教組の考へです。

ですから日教組大会が教育論議よりも政治論議を優先したとしてもそれは当然のことなのです。このやうな日教組と文部省とがいくら話し合ひをしたところで、同じ土俵で話がすめられるはずはないし、今後の教育には何ら益するものはないでせう。

○

ところで全国の小・中・高を中心に教職員の過半数が、ところによっては七割から八割（あるひはそれ以上）が、日教組に加入してゐます。ここにおられる若い皆さんは、私も含めて、小・中・高時代に日教組に加入してゐる先生から授業をうけてきたのです。戦後の学校教育をうけた人で日教組加入の先生の授業を全くうけなかつた人を捜すのは至難のことです。このやうに言はれるとおそらく多く方は次のやうに反論したくなるでせう。

「私の習った先生は皆いい先生だった。教育を政治の手段にするやうな先生は一人もゐなかつた」と。その通りです。倫理綱領に即したやうな授業をやつてゐる教員はごく少数です。日教組加入の多くの教員は他の大勢の同僚が加入してゐるといふことから職場のつきあひ上、内心では支持もしない日教組に組合費を自分の意思と係りなく納入してゐると言つていいのです。従つて組合に極めて良心的な多くの教員がこのやうな特定の政治的目標を持つ日教組を支持してゐるといふ非常におかしいことになってゐるのです。従つて日教組には膨大な額の組合費が月々入つて来る。この金がどのやうに使はれるかといふと、ストライキの処分（賃金カット）の補填にまはされるのです。公立学校の教員のストは法律違反ですから当然に処分されます。ところが賃金カットされた額と同じ額は日教組の方で補償してくれるのです。あるひはストに参加したことで昇給が遅れるとその分も補償してくれるのです。そのため予算（救済資金特別会計）だけでも日教組は年（七四年度）に百十三億円も計上してゐるのです。ですからストに参加して処分をうけても個々の教員には実害がないやうになってゐる。しかし考へてみればおかしなことです。納得せずに日教組に加入し、納得できない法律違反のストに（皆が参加するか）参加し、「不本意な」処分をうけ、それが納得せずに納入した組合費によつて補填される。全くおかしいことです。教員の一人ひとりをもつと自己に忠実な生き方をすべきだと強く感じます。とにかく教育問題は文部省対日教組といふ捉へ方では到底つかみきれぬものではあ

りません。

中教審が、続いて日教組教育制度検討委員会が競ひ合ふやうに改革プランを提示してゐますが、どのやうなプランにせよ、プランを具体化し生命を吹き込むのは一人ひとりの教員なのです。しかしいまのやうな長いものに巻かれるといふやうな、自らに不誠実な多くの教員の姿を見てゐると折角のいいプランも死んでしまふのではないかと気掛りになります。私は単に日教組を攻撃してゐるのではない。私の言ひたいことはこのやうなデタラメな日教組が多くの良心的な教員の納める組合費によって支へられてゐるといふ現実です。

例へば次のやうなことがあるのです。

私の友人は全員が日教組に入つてゐる学校に赴任した。そして勧誘をうけた時に、入る意思のないことをはっきりと伝へたのです。ところが初めてもらふ給料の中から組合費が差引かれてゐた。ひどい話です。重ねて組合に入る意思のないことを言ったのですが受付けません。君だけ一人だからといふことで多数で一人の人間の意思を踏みにじるんですね。結局彼は七年目にしてやうやく自分の給料の全額を自分の意思で使ふ自由を獲得したのです。大変な努力をしたやうです。年額にして二万円余でせうか。それが六年間ですからかなりの額です。しかし問題は金よりも人間の意思を、多数をいいことに足蹴にするといふやり方です。これが教員を名乗る団体のやることでせうか。

日教組は常に文部省の締めつけで教員の自主性が損はれてゐると盛んに宣伝してゐますが、本当にそのやうに言へるのだらうか。はなはだ疑問です。むしろ教員は日教組の締めつけによって自主性を失つてゐると言つてもいいのです。

さて、私が学校に勤めて強く感じたことがあります。これは単なる批判ではなく自戒の意味をこめてお話するのですが、教員の間にはお互ひに相手をおだて上げるやうな雰囲気があるといふことです。とにかく耳に痛いやうなことを聞かされたためしがない。相手を持上げるばかりでなく自分自身を飾らうとする。大人の世界ですから社交上からも相手に一応の敬意を表することは当然ですが、それとも少し違ふやうです。仕事上の話し合ひでも妙に奥歯にもののはさまつたやうな言ひ方をしてゐるのです。年長の教員は新卒の者に対して何も教へてくれませんし、赴任したその日から一人前の教員として遇するのです。二十年余の経験ある者と新卒の者が同じはずはありません。一般の会社等であれば上役の目を意識したり、自らに落度がなにかをいろいろと氣遣ふでせうが、学校にはそのやうな緊張感はまるでないと言つていい。実業界と学校といふ職場を同列に論ずるのは無理なことかもしれません、少なくとも先輩の教員が若い教員に対してもっと耳に痛いことを言ふやうな雰囲気はなくてはならないと思ひました。ですからとかくいい氣になつて、ついつい生意氣になり、一般の人からは腹の中で未熟な奴だと思下されるやうな人間になつていくのではないかといふことをおそれるのです。

生徒の使ふ「先生」といふ尊称をお互ひに使ひあつてゐることはまことに象徴的なことだと思ひました。他に適切な呼称はないかもしれませんが言葉の魔力を見る思ひです。まして教室でどのやうな授業を行はうが他の容喙を受けたことは全くありません。教員個々の自由といふか、言葉は悪いけれどしたい放題と言つていい。一応検定済の教科書を使ふのですが、それを使つていかに具体的に授業を展開するかは教員のやり方如何にかかつてゐるのですから、どのやうな教育もできる。教科書検定が裁判ざたになつてゐますが、おそらく個々の教員にとつては検定がどうならうとも實際の授業はどうにでもなるんだといふ氣持が腹の底にあるといつても過言ではないと思ひます。

このやうに教員といふのは他と協力して物事をなすといふやうな姿勢は極めて乏しいと思ひました。唯我独尊、一国一城の主といふ言葉がありますが、教員の世界といふのは唯我独尊的な我儘な人間がお互ひに持上げ合つてゐる世界だと思ひました。言ふならば自己に敵しくない、自己に敵しくなくてもやつていけるといふことです。切磋琢磨といふ言葉は、僭越ながら私を見た限り、教員の世界では死語に等しいと思ひました。今日の日本の教育に荒廃があるならば私はその責任の大半は教員の一人ひとりになふべきであると思ひます。日教組のやうなデタラメな団体が教育界に蟠居してゐるのも教員の一人ひとりに自分に対する敵しさが足りないからではないかと思ふのです。

最初に申しのべましたやうに、私の家族が「教員になりたい」といふ私の希望に対して意外に渋ったのも、残念ながら真相を衝いてゐたことであつたとあらためて感じた次第です。

○

しからは私はどのやうな心構へで教職に就いてゐるかと言ひますと、私は何よりも自分の人生といふものを大切にしたいと考へてをります。人間ひとりの生命には限りがある。個々の生と死のくり返し、錯綜の中から「教育」といふ仕事も生れてきたはずです。私はこの日本の国に生れたといふ宿命を真正面から見つめて生きていきたい。私がいま話してゐる言葉は日本語によつて自己を表現してゐる自分、自分はまぎれもなく日本語によつて自己を表現する日本人の一人だといふこの当り前の事実をまず出発点に据ゑたいと考へてをります。私はことさらに本とか日本人とかを強調してゐるやうですが、それは日本が他の国に比べて生活水準が高いからでも豊かであるからでもありません。そこが自分の生れた国だからです。この国土に生を享け、この国語を話し、そしてこの国土に骨を埋めるであらう自分の人生を考へる時に、同じく日本人として私に続いて生きてゆく生徒の前に立つ自分は何よりもまず日本人として立派にならなければならぬと切に思ふのです。

最近では国際化時代といふことが盛んに叫ばれてをりますが、国際化時代なればこそ日本人

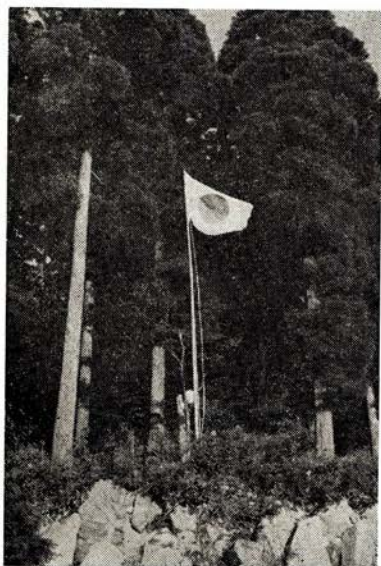
といふことが非常に大きな意味を持つてくると考へます。日本人が日本に生れた宿命を自覚するときに世界の現実も確と見えてくるのではないでせうか。最近の諸外国の日本人に対するいろんな風当たりや悪評も、私は日本を忘れた日本人に対する諸外国の不信のあらはれではないかと見てをります。『日本への回帰』第九集の中で村松剛先生がゲーテの「真に民族的なるものこそが真に国際的なのだ」といふ言葉を引用されてをりますが、この言葉はいまの日本の教育を考へる際に殊に考へさせられる言葉です。戦後の日本では何によらず「人類普遍の原理」といふことが流行語の如く言はれ、結局それは個性的なもの、歴史的なものを消し去ることなんだ、それが進歩的でいいことなんだといふ発想が多く見られます。教育界においても例外ではありません。しかし人類普遍の原理と言ふのであればかう言ふべきです。どこの国家民族においてもそこに伝はる歴史と文化を大切にすることを全ての出発点としてゐるといふことこそ「人類普遍」の事実であり原理であると。私は日本への愛情なくして日本の教育は語れないと思ひます。日本文化への愛情なくしてどうして教育を論ずることができませうか。

いまの教育界はいはばお金をかけて出来るもの、鉄筋の校舎・視聴覚教室・プール、あるひは卑近な例で恐縮ですが月々の教員の待遇などは随分と良くなりました。ただ教育は先生と生徒があつて初めて可能です。いい先生といひ生徒です。いい生徒といふ言ひ方はおかしいですが、いい先生と生徒、人があつて教育が始まるわけです。どんなに立派な校舎が出来ても教育

の本質とは直接には係りのないことです。教育の一番大切な人といふものをもっともつと考へなければならぬと私は思ひます。私の教育への情熱は自分の人生を考へるところから生れてきてゐるといふことを締めくくりの言葉にしたいと思ひます。

第十九回「合宿教室」のあらまし

西南学院大学 商学部四年 占部賢志



合宿までの一年の歩み

「合宿教室」のあらまし

講義

班別、ブロック別討論・及び班別輪読

短歌創作・相互批評

青年研究発表

慰霊祭

合宿教室までの一年の歩み

思へばこの一年にわたって国の内外を問はず、時代の勢ひは極度の緊張を強ひられてきた。世界各国相互の火を吐くやうな政治交渉、石油危機、そして保革逆転といふ呼び声の中で、徒らなイデオロギー闘争と化した参議院選挙といふやうに、目くるめくやうな時代の動きは一時も停滞する余裕もなかった。

一時は熾烈を極めてゐた大学紛争も一見やうやく平静をとりもどしたかに見えるにも拘らず、学園の中の人の心は荒廃を極め、未だに心の通ひあふ統一が生まれる兆すらみられず、底知れぬ空虚感が大学全体にただよつてゐる。それは何故か。私にはそれは単に学生運動のもたらした混乱といふよりも、もっと深いところから発した問題であるやうに思はれる。

いつの時代でもさうであるが、時代を象徴する言葉があるものだ。戦後では「民主主義」「平和」などがさうであった。戦後それらの理念に人々はすべての価値を求めてきた。だが実のところ人々はさういふ理念に逆に翻弄され、国家と学問と人生を具体的な自己との関はりの中に深めようとしなかつたところに思想的な混乱があつたことを今にして思ひ知るのである。政治の危機が叫ばれ、さまざまの批判は喧しく発言されるが、人々は自分が国家につながり得てゐるといふ実感を確かめようとはしない、といふより確かめようとする心の動きさへ頭から封じこ

めてしまはうとするのである。

われわれが学んでゐる合宿教室の「心を尽くして語らう、学問と祖国と人生を」といふ標題は景氣のいいスローガンではない。その標題は一人々々の胸に自己との対決を迫ってくる。ひとつごころに「学問と祖国と人生」を追求する事、あらゆるスローガンを捨て去つて、人生の事實にまむかふこと、それは何とときびしい精神の自立を要することか。私達はこのやうな現代日本の実情をしつかり見つめつつ、自らの思想生活を正し、人の心を結ぶ言葉を鍛へあひ、歴史を直覚する道を求めてこれまで研鑽をつんできたのである。

ここで昭和四十九年八月、霧島で開催された「合宿教室」のあらましを述べる前に、一年間に亘つて積み上げて来た私達の営みを簡単に記しておきたい。

○

前年の雲仙合宿以降、各大学に於ける研鑽の中心は、古典の輪読及び短歌の創作であった。古典の一語一語を正確に辿り乍ら、先人の生き方を学ぶこと輪読といふ学問形式を通じて自らの生き方を追求する事、さらに思想を鍛へることはまづ言葉を正すことであるといふ信条の下に行はれる短歌の創作と批評の中に、私達は一人一人の学問にとりくむ姿勢を確立して行った（特に熊本地区で、毎月、熊本大学を中心にして「短歌通信」が発行されて全国の友らに對するこの上もないはげましになったことを特記しておきたい）。また鹿児島地区では四十九年

四月、正大寮（東京）、葦牙寮（福岡）時習義塾（熊本）に続いて学びの場「薩南学舎」が開かれ、寝食を共にする同学同行の生活を通じてつみ重ねられる学問と友情の世界がさらに大きく拡大したこともかけがへのない収穫だった。

かうして各地区で研鑽が重ねられ、後の表にも記したやうに小規模の合宿を営みながら昭和四十九年を迎へたのであるが、私達は年明けを待って、自己の内包する問題、あるひは所信を文章に托して各地区相互に交換、この「問題提起書」によってお互ひの問題が奈辺に在るかを確認し合った上で、全国の友らは、三月下旬、瀬戸内海に浮かぶ前島に参集した。研修場に当てられたモラロジーセンターから望む瀬戸の景観は美しかった。期間は三月二十八日から三泊四日、参加した友らは次の通りだった。

〔東日本〕 東大・東工大・早大・中大・亜大各2・東外大・国学院大各1

〔西日本〕 九大11・熊大8・鹿大5・西南大3・熊商大2・岡山大・山口大・福教大・福岡

大各1

計 四 五 名

国民文化研究会 十四名

総計 五九名

なほ昭和四十八年の秋以来各大学に於いて開催された合宿、講演会は次の表によって御覧い

ただきたい。

(合宿)

主催	年月日	場所	参加大学
福岡信和会	11月22 ^S ・25 ⁴⁸ 日	太宰府戒壇院	九州大学 西南大学 福岡教育大学 福岡大学
早稲田大同信会	11月23～25日	早稲田 追分セミナーハウス	早稲田大学
東京大信和会 東京大 歴生会	11月23～25日	葉山 アサヒビル寮	東京大学 東京工業大学
鹿児島大信和会	11月23～25日	加治木荘	鹿児島大学 鹿児島経済大学
亜細亜大 日本文化研究会	12月1～2日	セミナーハウス	亜細亜大学
亜細亜大 日本文化研究会	2月10 ^S ・14 ⁴⁹ 日	セミナーハウス	亜細亜大学
東工大歴生会	3月3～5日	正大寮	東京工業大学

第十九回「合宿教室」のあらまし（占部）

（講演会）

主催	年月日	場所	講師・演題
熊本信和会	3月16～18日	玉名保育所	熊本大学 熊本商科大学
早稲田大同信会	5月4～6日	早稲田本荘 セミナーハウス	早稲田大学
福岡信和会	5月11～12日	ピオネ荘	九州大学 西南大学 福岡大学
主 催	年 月 日	場 所	講 師 ・ 演 題
亜細亜大 日本文化研究会	S・48 11月3日	亜細亜大学図書館講堂	浅野晃氏（文芸評論家） 「『天と海』に就いて」
九州大学 信和会	S・49 6月8日	九州大学 教養部103	山口宗之先生（九州大学教授） 「幕末志士を見つめる」
西南大学 信和会	6月16日	西南大学西南会館二階	小柳陽太郎先生（修猷館高校教諭） 「学問と人生を結ぶもの」 —吉田松陰に学ぶ—
熊本大学 信和会	5月18日	熊本大学教養部D13	山田輝彦先生（福岡教育大教授） 「問はれてゐる教育」
鹿児島大 信和会	6月1日	鹿児島大学 大学会館	山口宗之先生（九州大学教授） 「学生生活のあり方」

X

X

この外、学生の研鑽とともに国民文化研究会の若い会員の活動もめざましかった。

東京では「日本と日本文化伝統を守る会」が結成され、昭和四十八年十二月十五日明治神宮会館に於いて、「日本の思想的混迷を脱せよ」と題した青年研究発表が青年学生を対象に行なはれた。約百名の青年・学生が参集し、研究発表の後も真剣な質疑応答が交はされた。発表のテーマは次の如くである。

対中共の問題点をえぐる

——対日「復交三原則」を駁す——

神奈川県立新城高校教諭

山内 健生

戦後教育の出発点にみられる思想的混迷

東京工業大学大学院生

大岡 弘

学問と取り組むにあたって何を大切にすべきか

——現代の階級的観念的思考方法からの脱却を——

東急建設勤務

奥 富 修一

天皇は日本になぜ存続してきたか

戸田建設勤務

青山 直幸

その後、昭和四九年春より東京地区 O・B の研鑽を文章化した「国の息吹き」が月一回毎に発行されることとなった。

亦一方、福岡地区 O・B の集まりである草薙会では前年にひきつづき毎月第三土、日曜に、それぞれの職場より参集、「日本思想の系譜」（小田村寅二郎編）を中心とした古典輪読及び研究発表がつづけられ例会の内容は「草薙通信」として毎月一回着実に発表されてきた。

なほ昭和四九年二月十一日建国記念日、富山市に於いて岸本弘先輩を中心とする「高志の会」主催にかかる青年講演会が開催された。この会は全国の若い会員の総力を結集するといふ構想で、すでに前年秋から着々と準備が進められ雪深い北陸の地でポスターはり、ビラ配り、街頭宣伝などときまざまな努力が積み重ねられて当日を迎へた。

かくして前夜からの深い降雪にもかかわらず主題「祖国日本に共産革命を許すな」のもとに開会された会場・富山市農協会館ホールには、約三百名の聴衆者を迎へたのである。演題、演者は次の通りであった。

マスコミの偏向を糾す

神奈川県立新城高校教諭 山内健生

日本共産党の策謀を断て

大阪大学大学院生 東中野修

日教組に教育はまかせられない

福岡県立嘉穂高校教諭

小野 吉宣

天皇 —— 日本文化を貫くもの ——

富山県立伏木高校教諭

吉川 正紀

青年にとって祖国日本とは何か

富山県立富山工業高校教諭

岸 本 弘

この青年講演会の実行委員長とし、亦講演者として力の限りを尽くされた岸本先輩は月刊誌「高志」の中に次の様な感想を記してをられる。

「今回の青年講演会をふり返る時、それは正に青年が、青年としての行為をひたすらに遂行しようとした、自らとの闘ひであったやうに思ふ。

僕らが今回の講演会に当って掲げた主題は、『祖国日本に共産革命を許すな』であった。しかしそれは、決して通り一辺の形式論で済まされるものではなく、又、イデオロギーに対するイデオロギーといふ立場からの挑戦でもあり得なかつた。

『祖国日本を守れ』と叫ぶ者は、何よりもまづ自らが、祖国日本をこの上もなく愛する愛慕者でなければならぬ。『共に立ち上らう』と叫ぶ者は、まづ自らが、止むに止まれず奮ひ立つ

勇気を持たねばならぬ。僕らに果して、その熱情と覚悟ありや否や、僕らはすべての思ひを、記念すべき紀元節の一日に向けて闘った。」

○

かうした一年の歩みの上に、友らの様々の思ひを一つにあつめて第十九回合宿教室は開催されたのである。

「合宿教室」のあらまし

期間は、昭和四十九年八月三日より七日までの四泊五日間、合宿地は、神話のふるさと霧島・高千穂峰の麓にある「霧島ホテル」。研修テーマとしては、次の三つがとりあげられた。

- A、世界の動向と日本の進路
- B、総合的な人生観の探求
- C、教育改革の方途

会場は新緑の山々に囲まれ、仰ぐ夏空には眼に沁みるやうな入道雲が浮んでゐる。合宿の班運営にあたる幹部学生五十余名と、今合宿より初めて設けられたブロック長の任を務める国民文化研究会会員は、三日前から合宿地に集合し、合宿に臨む姿勢を正し相互の意思を統一すべ



(学生班 六十六大学) (洋数字は参加学生)

- 東大6 京大1 九大36 阪大1 東工大3 東京教大1 岡山大6 広大3 熊大33
- 長崎大25 秋田大1 横浜国大3 山形大1 信州大4 東外大2 大阪教大1 島根大2
- 山口大4 福岡教大16 九工大1 大分大1 鹿児島大35 大阪市大1 九大医療短大1
- 長崎県国際経大1 早大30 慶大2 中大14 上智大4 法大1 明大1 青山学院大6
- 東洋大1 国学院大5 東海大2 専修大1 亜細亜大38 明星大1 玉川大1 工学院大1

く事前合宿に取組み、更に大合宿の綿密な計画と種々の準備作業を完了して参加学生を待ちうけた。

八月三日、いよいよ全国各地より五百数十名にのぼる参加者が次々と到着する。肩をたたいて再会を喜び合ふ学生達、初参加に不安げな学生、様々の風景が見られる。会場へ続く道には、「友よ、呼ばば友は来りぬ」と大書された垂幕が高く掲げられてゐる。

参加者の内訳は次の如くであつた。

国際基督教大 1 東京農大 1 相模工大 1 東女大 4 日女大 5 聖心女大 1 上野学園大
 1 共立薬大 1 女子美短大 1 日仏学院 1 千代田ビジネス 1 同志社大 1 皇学館大 5
 岡山理大 1 岡山商大 4 広島修道大 1 福岡大 7 西南学院大 20 久留米大 1 東和大 7
 福女大 3 熊本商大 4 熊本女短大 2 鹿児島経大 6 鹿児島短大 3
 計三八〇名（うち女子一〇一名）

（社会人・教員班）

会社員 福岡熊本両県の小・中・高校教諭団体職員など 計四三名

（招聘講師）三名（大学教官有志協議会）四名（国民文化研究会）七八名（見学参加者）五名
 （事務局）一五名

総合計 五二八名

男子学生は、合宿申込書のアンケートをもとに八名から十一名を単位として三十六班に編成され、各班には合宿経験者の中から班長として一名が割当てられた。女子学生は九名及び十名の十班に、社会人参加者はこれを四班に編成され、国文研の会員が助言者としてその任についた。さらに特筆すべきは、五百名を超える参加者が有機的つながりを保ちつつ一体となって合宿に取組めるやう、前述のやうに本年は合宿運営本部の下に四班ないし五班を一単位とするブロックを設け、これが中心となって合宿中の内面指導に当たるといふシステムをつくったことだ

8月5日(月) (第3日)	8月6日(火) (第4日)	8月7日(水) (第5日)
(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食
(講義) 「信ずることと知ること」 小林秀雄 (質疑応答)	(講義) 「日本のいのちの人類 史的意義」 戸田義雄 (質疑応答)	(講義)「感ずべきことに あたりて感ずるころ」 小柳陽太郎
		全体意見発表
記念撮影	班別討論	「合宿をかへりみて」 小田村寅二郎 感想文執筆 第2回和歌創作
(講義)「和歌創作導入」 小柳左門	昼 食	班別懇談
高千穂峰登山 (和歌創作)	(講義)「聖徳太子の 信仰思想と日本文化 創業の輪読」 夜久正雄	閉 会 式 (このあと昼食)
	班別輪読	(解 散)
	ブロック別討論	
夕 食 入 浴 散 歩 (和歌提出)	夕 食 入 浴 散 歩	
青年研究発表 (久々宮・志賀・山内)	「和歌全体批評」 山田輝彦	
	和歌相互批評 (班別)	
慰 霊 祭	夜 の 集 ひ	
(就 床)	(就 床)	

第十九回「合宿教室」のあらまし（占部）

第十九回「合宿教室」日程表		8月3日(土) (第1日)	8月4日(日) (第2日)
	6:30		(起 床) 朝 の 集 ひ
	8:00		食
	9:00		(講義) 「新しい世界と日本文化」 木内信胤
	10:00		(質疑応答)
	11:00		班別討論
	12:00		昼 食
	1:00		
	2:00		(講義)「イデオロギーに 勝るもの—心ことば」 小田村寅二郎
	3:00		班別討論
	4:00		野 外 運 動
	5:00		
	6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩
	7:00	(講義)「この合宿教室の めざすもの」 川井修治	ブロック別討論
	8:00		
	9:00	班 別 討 論	班 別 輪 読
	10:00		
		(就 床)	(就 床)

った。さらに指揮伝達、各班相互の検討、野外運動、登山等も、すべてブロックを中心とし、前後二回に亘るブロック別討論も新しく取り入れられた。ブロック長以下各ブロック付も原則として各班室付近に一部屋を定め、各班との交流に努めるべく意を尽した。このブロック長には、年来各地区で国文研究会相互の研鑽に、また、対外的活動に、あるひは、学生指導に中心となって活躍して来た国文研の主として若い会員がこれに当った。

午後三時より一同講堂に会して開会式。鹿児島大学農学部三年中村勝徳君による開会宣言に続いて国歌斉唱、その後「戦時、平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられた、すべての祖先の御霊」に対して、一分間の黙禱を捧げた。次いで主催者を代表して、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が挨拶に立たれ、全国各地から集ってきた全参加者に心からのねぎらいの言葉をかけられながら、「一生の友はなにも長い時間をかけたから出来るのではありません。ほんの少しのつきあひから、一生を通じて信じあへる友が生まれることもあります。どうか自分から勇氣をもって友達にぶつかっていただきたい。」と述べられた。

続いて学生代表として登壇した西南学院大学商学部四年の占部賢志は、自らの合宿教室初参加の時の体験に基づき、「自分の素直な氣持を友に伝へ、相手の言葉を正確に受けとめて友の氣持に触れ合ふ場を実現し、学問・人生・祖国の三つのテーマに真剣に取り組ませう。」と訴へた。この後、岡山操山高校教諭・三宅将之合宿運営委員長の挨拶並びに合宿運営にあたる委

員の紹介と続き、最後に富山工業高校教諭・岸本弘合宿指揮班長の諸注意をもって、開会式とそれに続く一連の行事は終了した。

全参加者は各班室に入り、自己紹介及び合宿参加の動機などについて語り合ひ、合宿教室の営みが開始されたのである。

講 義

△以下、合宿教室期間中の各講義について概略を記すが、詳しくは本書に講義の記録が掲載されてゐるので、それをお読み戴きたいと思ふ▽

夜の日程に入り、冒頭の導入講義として「この合宿教室のめざすもの」といふ演題で鹿児島大学教授の川井修治先生が演壇に立たれた。先生は、三つのテーマをあげられ、これに参加者一人一人が取組んでいって欲しいといふ願ひを込めて、合宿導入講義をして下さった。三つのテーマとは、「一、我々のかけがへのない人生に就いて真剣に考へてゆかう。二、大学の学問には何かが欠けてゐる。学問の正しい筋道とは何だらうか。三、我々が運命的に担ふ祖国日本を力を合はせて何とか支へてゆかう。」である。このテーマに沿ひ具体的な実例を上げて次のやうに説かれた。

まづ、「今日の風潮は、エゴイズム全盛であるが、一個の自分より大なるものを求めてやまぬのが人間の本性である。我々も個我への迷執を去って、永遠の生命の流れに身を投じようではないか。」と、私達の生き方について鋭く指摘され、「それはすなはち、国の悠久の歴史の流れの中に生きることである。」と語られ、国家を一つの権力体系と即断しがちな現代の風潮に対して鋭く指摘された。続いて、吉田松陰・山鹿素行の言葉に触れられながら、「客観的把握や理論構成は、あくまで学問の手段に過ぎず、真の学問とは、自らの生き方、心の姿勢を正して、国の運命を切り開いてゆくものである。」と学問の正しい筋道を明確にされた。

第二日目の午前は招聘講師の**世界経済調査会** **木内信胤先生**の講義である。今年で十五年間に亘る連続御出講の木内先生は、今年も鋭くかつ自信に満ちた御見解を披瀝された。「新しい**世界と日本文化**」といふ演題のもとに先生はまづ戦時中からの御自分の様々な経験を話され、「この経験をふまへた上での話だと思つて、その心積りで聞いて欲しい。」と前置されて本題に入られた。先生は、「世界を考へるには、我々は日本人であるからまづ日本文化をその対象として考へねばならない。そこで又、日本文化も世界との対比に於て考へる事が必要である。世界は變つてゐるが日本もその波を被つてゐる。世界の転機といふのは日本だけを考へても解らないし、しかも二、三年の短い時間で考へることはたうてい出来ない。」と指摘された後、過去一年に亘る内外の出来事を次々と明解に解説される。次いで、それら多くの出来事の総合的

把握として、「西欧文明に於ては対自然的、対物質的なものが発達して自然征服的な生き方が生れたのである。そして今に至って遂に対自然性が上限に達した国が現はれて来た。それは贅沢や自然汚染によって表はれて来てゐる。現状は耐へられない程にまづい事になった。つまり新しく変らざるを得ない所まで来てゐる。名状すべからざる状態に陥つてゐるのだ。」と述べられた。このやうに御話を進められ、やがて我々の為すべき事について、「各自は自分自身の属する身近な社会や団体の中で世界の問題を意識しながら日常に処して行けばよい。全ての人がさう出来れば日本は救はれる。日本が救はれるならば世界も救はれる。」と日本と世界の關係の本質について語られ、「その手引は日本文化である。」ことを強調されて御講義を結ばれた。そのあと質疑応答があり、参加者からの質問に、ズバリとしかも丁寧にお答へ下さる姿が印象的であつた。

午後、小田村先生の講義の前に参加者の一人、亜細亜大学の留学生でチベットのペマ・ギャルポ君の話があつた。ペマ君は中共によって一九五四年祖国を奪はれた悲しみを生々しい体験の下に、「侵略後中共はチベットの一切の文化を抹殺する政策を続行してをり、現在、独立を願ふ同志達は中共の弾圧のため、非常に危険な事態に立ち至つてゐるのです。」と現下の緊迫した情勢を切々と訴へた。最後に、「私達チベット人が今皆さんに願ひしたいのは、金でも武器でもありません。モラルサポートです。チベットがいつの日か独立したあかつきには一人

前の独立国として対等に認めてもらいたいといふことだけです。」と祖国再建の悲願とモラルサポートとを訴へた。祖国チベットに限りない愛惜の思ひをこめて語る彼の一語一語は私達の胸をはげしく衝いた。

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎先生はペマ君の話に対する感想を、「ペマ君はまだたくさんのごことを言ひたかったことと思はれますが、その中でもチベットの国語が消されやうとしてゐること、結婚政策により、チベット人の純血が犯されやうとしてゐることを特に訴へたかったのだらうと思はれます。」と述べられたあと、私達日本人の言葉に対する姿勢のまちがいとその姿勢を正す道を「イデオロギーに勝るもの——心ことば」と題されて懇切に教示してゆかれた。事実に着目して言葉を正確に表現することが大事なのだが、現在の日本では単に理論の辻褃を合はせて事足りりとする議論が実に多い。皆、ことばのために心を



(祖国再建の悲願を訴へる ペマ・ギャルポ君)

変へてゐる。つまり心の作動を棚上げしたままで、頭の働きの結果出来た『頭ことば』が氾濫してゐる。これに引きずられてゐる人達は、自己の尊厳性を足蹴にしてゐる。」と私達が使用してゐる言葉に対して深刻な反省を求められた。では私達は一体何を大切にすべきなのか。先生は「心は『物』に感ずるのであり、感じた自分のありのままの思ひをそのまま表現した言葉、これを先人は『心ことば』と表現してゐる」と述べてゆかれ、「心ことば」を大切にする方途を説かれた。また、ある大学で「ロックの思想をもって天皇を論ぜよ」といふ課題が出された事を取上げられて、「君主主義といふことだけでは天皇に就いて説明は出来ないはずであつて、一体ロックの思想で天皇を論ぜよといふのはどういふことなのか。むしろロックの取り扱つた絶対王制と日本の天皇といふ、全く異なる二つのものをはっきり區別して扱ふことこそ学問的・科学的精神ではないのか。」と現代の学問の根本的な誤りを正され、具体的に十余首の歴代天皇の御製を紹介してゆかれた。「天皇の御製によつてありのままの御氣持を素直に味あふ事から私達は天皇について考へてみたい。少くともその事がなされない限り学問にとりくむ姿勢はありうべくもないと思ふ」と語られ、結びに「天皇制は利用されて来たと言ふが、利用した方が悪いのであつて、天皇御自身はくもりもない御心を持ち続けてこられてゐる事にしつかり眼をとめようではないか。」と話を締め括られた。

第三日目の午前、いよいよ参加者一同が心からお待ちしてゐた文芸評論家 小林秀雄先生の御登壇である。先生は、私達参加者一同に向かつて、ひとり礼をされたあと、静かに壇上に立たれた。先生の折目正しい御姿に接し、早くも私達は、その御人格に魅かれていった。

「信ずることと考へること」と題された先生は先づ、最近の念力ブームに対する世上の風潮を指摘され、やがて多年の御研究であるベルグソンの話を引用されつつ、現代の科学が私達の経験をすべて合理的経験に置き換へてしまふ結果、私達の全経験を、科学で計量できる小さな経験にだけ絞つて来た近代の学問姿勢に厳しい批評を加へてゆかれた。「君達、人間の悲しみが計量できますか。」と訴へかけられる言葉が痛切に胸に沁みてくる。息詰まる様な一瞬であった。私達の学問と生き方が根元から問はれてゐたやうである。先生の話される態度は、言葉の一つ一つ選びぬかれながら話されてゐるやうだ。御話は更に核心に迫ってくる。民俗学者柳田国男氏が少年時代、亡きお婆さんの魂を見たといふ経験について述べられ、学問の根本には感受性が必要であると指摘される。文芸批評といふ五十年に亘る仕事を通じて、先生が鍛へ続けられたものは、この感受性であったのだらう。これらの御話は自づと演題の「信ずることと考へること」につながり、「考へるとは、相手の身になって考へることであり、信ずるとは、僕の信ずるところであつて、万人の如く信ずることとは違ふ。自己流に信ずるといふことだ。僕は信ずるところが間違つてゐれば、責任をとる。諸君、信ずるとは責任をとることなのだ。」

と核心に触れられた。自分の信ずるものに自己の責任を以って応じてゆかれる先生のお姿に直かに触れ得た私達は、身内が引締るやうな緊張を覚えた。先生は御話の途中で、「諸君と語りたい。」と言はれ、数人の学生の拙い質問に対して答へてゆかれたが、その時、私達をしかと見つめられて、「歴史を感じる感受性は誰にでもあるのです。それを生意気な心、傲慢な心で隠してはいけない。諸君のめいめいの中に全歴史があるのだ。」と訴へられた御言葉の一つ一つが、忘れがたく心に残った。

四日目は先づ文学博士戸田義雄先生の『日本のいのち』の「人類史的意義」と題する講義から始まった。

戸田先生は、「本当に知らうとすれば考へることにつき当り、信ずるに至るものだ。」といはれた昨日の小林秀雄先生の御話を踏まへながら話をすすめられ、物を識る事において、比較する方法の重要性を説かれた。更に明治天皇の御製を詠まれて、私達日本人の心の姿勢に注意を与へてゆかれた。次いで、親鸞、



親房、道元らの言葉に触れられて、生きとし生けるものすべてが心を通はせ合ひ、すべてのものにのちを通はせて生きる姿を『日本のいのち』と呼ばれた。「民族の統一感を感じる」とは、この『日本のいのち』を味識することに他ならない。」と結ばれた先生の熱意溢れる御講義から、私達は測り知れない示唆を受けた。

午後の日程に入り、「『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読」と題する亜細亜大学教授 夜久正雄先生の御講義が行はれた。先生は書物を読む時の心のあるべき姿勢と、輪読の意義について話してゆかれた。先生御自身が、学生時代から続けてをられる「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読体験をふり返られ、「お互ひに質問し合ひ考へを述べ合つてもなかなか解らない。しかし、徹底的に意見を言ひ合ふうちに、太子の御心がまざまざと蘇つてきて、本当に自分を導いていただく御言葉を与へられたと感じる事がある。さういふ勉強の方法を、この輪読で学んで欲しい。」と輪読の重要性について説かれ、最後に「学問といふのは、実人生そのものを対象としたものでなければならぬ。」と結ばれ講義を終へられた。

第五日の最後の講義に修猷館高校教諭 小柳陽太郎先生が登壇され、「感ずべきことにあたり感ずるところ」と題して本居宣長の言葉などに触れられながら、「現在の大学では、思想といふものは、体系化され理論化されたものでなければならぬといふ考へがあるが、それが学生の心を萎縮させ、生き生きした心を失はせてゐるのではないか。」と厳しい指摘をされた。

更に山鹿素行、吉田松陰の学問姿勢に基づいて話してゆかれ、日本教学の伝統が、物事を理屈で割り切ってしまうのではなくして、自然の運行と同じ様に活発に生きてゐる姿に反応してゆく中に広やかな世界を築いて来たことを説かれた。最後に「感ずべき事にあたりて感ずる心が一番大事です。どうか人間らしい生き生きした本来の心を蘇らせて戴きたい。」と願ひを込めて訴へられた。すべての思想問題の昏迷は、この「感ずる心」の喪失に由来してゐるのだが、その事に無痛感なまま、国家が論じられ、人生が語られてゐるといふ現実の誤りを痛切に認識させられたのである。

班別、ブロック別討論・及び班別論読

班別討論は、相互の思ひを交流しあひ、深めあふ重要なもので、主に講義のあとなど一時間から二時間の時間をとって行はれた。班員同士ほとんど初対面のものばかりであり、意思の疎通はなかなかむづかしい。合宿が進むにつれて、それぞれの意見が語られはじめ。講義の感想のみならず、日頃の悩み、あるひは皆に訴へたいことなどが様々に提起される。しかし合宿前半までではともすれば表面だけの討論、知識のやりとりで終始しがちであった。だが日程が次第に進んでゆくにつれて、私達がこの合宿で学ぼうとしてゐることは、自己の経験から遊離した論理の分析、再構成といふ操作を学問だと考へる風潮の誤りを正すことだといふことを知

り、さういふ風潮の中、敏感に感応すべき本来の心が涸渇してゐることに気づき始めた時、別討論の雰囲気は次第に変化してきたのである。そして、自分の素直な気持をもどかしいながらも何とか表現しようとする姿勢、相手の言葉を正確に受けとらうと耳を傾けようとする姿勢が生れ、相互の気持が通ひあつてきたのである。さうなると討論の場は概念的な言葉にたよりがちな自己自身との対決の場となつてくる。それこそが思想を鍛へる基本の姿なのだ。

なほ前述の通り今年は新しい試みとして四、五個班を一つのブロックとし、全部で十一のブロックを編成した。ブロック別討論は、三十数名が円陣をつくり、講義で提出された問題を基に、感じたままを率直に披瀝しあつた。これによつて従来 of 班別の枠を越えた、より広い参加者相互の交流が深められていった。

○

第四日目、午后に輪読の時間が設けられた。テキストは黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」である。輪読箇所は各班によつて異つてはゐるが、日本思想の源流に迫る著者の思ひが一貫してどの箇所にも流れてゐる書物である。高い言葉の調べが音読してゆくにつれ、自づと口にのりうつてくるやうである。その後ただちに一語一語を精密にたどりながら、著者の心に迫らうとする努力がなされる。友達と言葉を正確に吟味し、気持を述べあふうちに、読み過してゐた言葉にかけがへのない人生の意味がこめられてゐるのが度々見出されてゆ

く。友の力を一つに結集して憶念する中で、著者の思想の深さに触れ得た実感を徐々にではあるが感じていった。

短歌創作・相互批評

合宿教室に於ける短歌創作は、きはめて重要であり、決して欠かすことのできないものである。今回の導入講義は、学生時代この合宿教室で学び、昨年九州大学医学部を卒業された小柳左門先輩によってなされた。

先輩は先づ初めに、学生時代より短歌を作り始められ、短歌相互批評を続けて来られた経験を通して、「言葉は、人の心と心を結んでゆくかけ橋だと思ひます。」と述べられた。続いて短歌創作の意義に就いて、万葉集の防人の歌、正岡子規の歌等に触れられ、また明治天皇の御製を拝誦されつつ、「感動したことを正確にふり返って、自分の気持をありのままに表現すること。その努力こそが短歌創作の基本です。」と短歌を作るにあたっての心の姿勢、さらに具体的な注意事項に就いて、わかりやすく丁寧に話して下さった。

講義の後、短歌創作の時間を兼ねて登山に向ふ。途中、全員で霧島神宮に参拝し、宮司さんから、この御山にまつはる神話、伝承を拝聴した。悠久の歴史のいにちに肌で触れ得たひとときであった。眼前には、これから登る高千穂峯が天をつくやうにそびえてゐる。険しい坂を中

途まで登ってくると緑に覆はれた下界が遙かにひらける。素晴らしい眺望である。頂をめざす友、中腹で腰ををろし遠景を眺める友、また指を折りながら短歌を詠んでゐる友、様々な風景である。登山を終へバスが宿に着いた時は、もう夕暮れ時であった。夜の日程に入る前に全員の短歌が提出された。この短歌は国民文化研究会の先生方によって、一人一首以上が選択され、事務局の方々の大変な協力によって翌朝近くまでかかって大部の歌集が刷り上った。

第四日目の夜、福岡教育大学教授・山田輝彦先生によって、短歌の全体批評が行はれた。先生は「批評する場合一番大切なことは、詠んだ人の気持に近づかうとする努力です。相手の気持を推しはかりながら批評を加へるといふ態度が前提としてなければいけません。」と前置きして一首一首批評を加へられた。作者の気持にそひながら表現の不正確さを丹念に正されて



(短歌の全体批評をされる山田先生)

ゆくと、自づから作者の感動が鮮明に浮かびあがってくる。また批評の対象になった作品には楽しい歌もあり、幾度となく場内はどっとわいた。このやうに和らいだ雰囲気の中で先生の批評は続けられたが、先生の適切な批評にわれわれは自分の体験を表現する難しさとよろこびをしみじみと味はったのである。

青年研究発表

この合宿教室では、国文研の若い会員による「研究発表」が過去三年に亘ってなされて来た。今年もその成果を踏まへて三名の若い会員が登壇した。

先づ昨年九大を卒業し、東洋工業に勤務されてゐる久々宮章さんが登壇され、現在の心境を振り返りつつ、学生時代にふとした機縁で友を見出した喜びやその友との相互研鑽の中で自分の生きるべき道が明らかになつて来た過程を体験的に語られた。

次に福岡で教鞭を執つてをられる志賀建一郎さんが、高校の「日本史」の教科書を引用して、「現在の教科書を読んで果して、祖先の努力を認識し、日本人としての自覚を高め、民族に対する豊かな愛情を育てることになるのか。」といふ問題を文章に則して話された。

最後に神奈川県立新城高校に勤務の山内健生さんは、教員生活六年の体験をふまへて、日教組は一人一人の先生方の正直な気持を蹂躪し、教育よりも政治を優先させてをり、一方先生方

もまた、自らの実感を大事にすることなく、大勢に押し流されてゐるといふ事実を指摘され、「本当に日本の事を考へてくれるのは、私達日本人以外にはない。」と力強く訴へられた。

慰 靈 祭

昨年続き、今年も「平時、戦時を問はず日本の国を守るために尊いのちを捧げられたすべての祖先のみたま」に対して慰霊祭が厳粛に執り行はれた。簡素ではあるが宿舎の前庭に祭壇が設けられた。消燈された静寂の中に虫の音だけが心地よく響いてくる。澄み渡る夜空には清らかな銀河の流れが一入美しい。赤々と燃える篝火に祭壇がくつきり浮かび上がっている。お祓に代へて、国文研の福田忠之先生により故三井甲之先生の「ますらをのかなしきいちづみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の歌が二度朗詠される。厳粛なる歌の調べが心に沁みてくる。全員の黙禱の後、降神の儀を行ひ祭壇に神饌を捧げる。次いで夜久正雄先生による明治天皇御製拝誦。しきしまの道を歩まれた明治天皇の御心がしみじみと感ぜられた。小田村理事長による祭文奏上。続いて献詠に代へて全員による「海征かば」の斉唱が行はれる。「海行かば 水浸く屍 山行かば 草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ 願みはせじ」大伴家の言立て、万葉の詩人大伴家持の長歌の一節がうたひ出される。日本民族の永久の魂につつまれてゐるやうであった。そのあと、一斉に、二拝二拍手一拝の作法に祈りを捧げる。全員黙

禱。かくして、昇神の儀をすませて、慰霊祭は滞りなく終了した。一人一人の胸中には民族の心にふれ得た清澄な思ひが充ちてゐた。次に慰霊祭において拝誦された明治天皇・今上天皇の御製及び、その折奏上された祭文を記したおきたい。

〈明治天皇御製〉

月

いにしへの人のことばもうたひけりその世に似たる月にむかひて

歌

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり
世の人のおなじおもひもしきしまの歌にてきけばあはれまされり



をりにふれたる

ますらをも涙をのみて国のためたふれし人のものがたりしつ

往 事

おもはずも夜をふかしけり国のためたふれし人のものがたりして

花

あかず見し山べのさくら春の日のくれてのちもおもかげにみゆ

惜 春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこちこそすれ

〈今上天皇御製〉

終戦後の御製

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて
国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

日本遺族会創立十五周年に際し

年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる

△慰霊祭のりと▽

いま、われら五百三十名は、しきしまのやまとの国の南のはたてに、青空にそびえてみゆる
肇国のゆかりも深き高千穂の久士布嶽くじふるのふもと辺の丘を、今宵のみたままつりにはと定めま
つりて、謹み畏み魂喚よほひまつれる、み祖はらからたちのみたまのみ前に、第十九回全国学生青
年合宿教室の参加者一同に代り小田村寅二郎謹み畏み敬ひ申さく。

われらここに集へる者らは老いも若きも、男も女も、なにのわけへだてなく、おのおの
の心を尽し力をつくしつつ、いま合宿教室の日程の半を過しぬ。

このあはひに、すでに小林秀雄大人・木内信胤大人たちの尊きご講義を拝聴し了へ、さら
は班別討論に班別輪読に、あるひは高千穂登山に、さらには短歌の創作に、心の限りをつくし
つつ、友どちの心もやうやくにかたみに通ひはじめんとする今宵の時、われらはさらに心を
あらたに、亡きみおやたちの尊きみたまをなぐさめまつらむと、みたままつりにはにつらな
りつどひぬ。

遠きいにしへより、ことのはの幸はひ来にしこのやまとしまねに、語り継ぎ言ひつぎにける
ことだまことだまの幸さきはふ国に生きたまひて、このみ国の生命・祖国のいのちの、とことはならんことを祈

りたまひけむ亡きみおやたちのみたまのみ前に、また、明治の御代よりこのかた、いくたの
外国との、やむなき祖国防護の戦ひに、雄々しくも出でまし、かなしくも護国の鬼と神あがり
あがりましぬる亡きいくさびと・同胞・友らをはじめ、みくにをまもりにし尊きまたまたちの
み前に、ささやかなれども海の幸・山の幸・くさぐさの品そなへまつり、み霊和めのみ祭り仕
へまつらんとす。

ここに謹みて告げまつらくは、この美しき大和島根の、とことはにさかえゆかむことを祈る
思ひに、われらをして、われらもまた、たまきはるいのちの限りを、み国のいのちにつながら
しめたまへ。

われらはここに、汝みことたちのみ心を偲び、みことばに学び、言霊の幸はひのままにした
がひ進まむことを誓ひまつらむ。

現世はさまざまに乱れてあれば、今よりのちは、学び舎にあるものはその学び舎に学びの
正道を、教へにはにあるものはその教へにはに教への正道を、おのもおのものつとめの
にはにあるものは、そのつとめのにはにつとめびとらのまごころの往きかふにはを、いま直ちに生
きよみがへらしめんと、ともにともに、つとめゆかむと誓ふことのよしをきこしめたまへ。

天がけりますみましみことたちのみ霊よ。み民われらもろともに、まめやかに、わがすめら
みことの大御心をしのびまつり、大和島根の正しく榮行き、やまとことばの雄々しく美しくゆ

き交ふさだめを心にいのり、国民こそりて、かたみに睦^{むつ}び合ひ信じ合ふ日の、一日も早く来らんことを祈りまつり、こひのみまつるを、天がけりてもうつしくみそなはしたまひ、守らせたまへと、謹み敬ひ畏み申す

○

合宿教室の最終日、自由に感想発表を行ふ全体意見発表の時間がやってきた。友は次々と壇上に上って、この四日間の生活をふり返り、切々と胸に湧く感慨を述べてゆく。

鹿 大 居細工 豊

口ごもりまた語りゆく友どちは手ぶりをそへて訴へにけり

亜 大 菅 野 光 秋

手をあげて己が思ひを述べらるる友の言葉にじつと聞き入る

信州大 松 沢 博 子

胸のうち人に伝ふる苦しさに声ふるはせて友語るなり

我もまた友の思ひのせまりきて自づと胸のうちふるへをり

閉会式を前に、小田村理事長より「合宿生活をかへりみて」と題する御話があった。「この

合宿で私達は自分自身を見つめ直す機会を得た。また今迄無意識に使つてゐた言葉が安易に使へるものではないと実感した。これは今迄身につけてきた心の垢を少し落すことができたといふ事である。合宿が終つた後も、少し落ちた垢をもっともつと洗ひ落す様に一人一人が鍛練していつて下さい。」と参加者の気持ちに細やかな心を配られながら、私達にさはやかに立ち上がらんとする活力を与へ、かつ問題の本質を適確に述べて下さった。

その後、全員各班室に戻つて感想文をしたためる。短くあわただしい時間の中ではあつたが、皆自分の思ひを心を込めて書き綴つてゐた。

つひに心身を傾けてきた合宿教室も閉会式を迎へた。まづ国歌「君が代」を全員で二度唱和した。参加者五百数十名の声が、一つに融け合つて力強く響きわたつた。次いで壇上に立たれた川井修治先生は、「皆さんと一緒に『君が代』を歌つてゆくうちに、おもはず胸が一杯になりました。四泊五日間、私達は全心身を傾けて取組んできました。この緊張した生活をやりとげたといふ気持ちを大切に、これから実生活を送つていつて下さい。本当に御苦勞さまでした。」と一人一人をみつめられながらねぎらひの言葉をかけられた。

学生を代表して早稲田大学政経学部四年の副島辰英君が、「山を降りても、この合宿で定まった志を忘れずに勉強を続けたい。まづこの合宿での体験を大学に戻つて友に伝へる努力を開始しようではありませんか。」と決意を表明した。最後に熊本大学工学部四年の鏡信弘君の閉

会宣言によって合宿教室の幕は閉ぢたのである。

○

会場の玄関前では、別れゆく友らがかたく手を握り交しながら、名残りを惜しんでゐた。

別るるに伏して思へる心はもとはのかたみとわが胸に生く

——三井甲之——

霧島の空は今日もさはやかに晴れ渡つてゐる。こんもりとした山々からひぐらしのしきりに鳴く声が聞こえてくる。一足早い初秋の気配がもう近くまで訪れてゐた。

合
宿
歌
集



坂道を登りて来たるバスの窓に待ちかねたりし友の顔見ゆ

九州大学 佐藤 則夫

にこやかに笑みかはしつゝ車より降りくる友をむかふるうれしさ

鹿児島大学 牧 添光 子

部屋内に入りてみれば幾人か着きてゐませり荷物並びて

長崎大学 岩 永 美智子

地の底のひびくがごときますらをのうたふ君が代むねをうつなり

熊本大学 田 中 桂之助

合宿に初めて来してふ友どちらの述ぶる言葉に思ひこもれり

亜細亜大学 渡 壁 勇 三

真心をこめてよまれし天皇の御言葉深く我に迫りく

島根大学 塔 間 浩

小林秀雄先生の御講義にて

書読みて思ひ続けし先生に霧島山にて今日逢ひにけり

待ちわびし先生なれば御講義を心踊らせ我聞かむとす

九州大学 舟 越 昭

短歌のこころせつせつと説く先輩の語気の強さのせまりくるかな

朝の陽に新たに仰ぐ日の丸に熱き思ひの胸にこみあぐ
鹿兒島大学 中村英之

くにたみを思ひやられし天皇の御歌をよめば心澄みゆく
東京大学 上榊勇

班別で討論し合ふ最中に何も言へなくなりて黙しぬ
亜細亜大学 久道男

小林先生の御講義を聞いて
西南学院大学 平松純子

ひとことも聞きもらさじと手をひざに身をのり出し耳を傾く
鹿兒島大学 生駒ちかえ

心より母を語りて涙する友の姿にやさしさあふる
福岡教育大学 北島佳代子

友どちの母君思ひて語りしにおのづとわれも涙こみあぐ
九州大学 原田美恵子

とつとつと母を語れる友どちの言葉をききて胸つまりたり
福岡教育大学 平山尚美

後輩の心のうちよりしみじみと語れることばのうれしかりけり

友どちの話すことばのその中に同じ思ひのあるぞうれしき
鹿見島大学 池 永 浩 平

並みたてる鉾杉の上に照り映ゆるまどかな月影あかずながめつ
西南学院大学 占 部 賢 志

小林先生の御講義を聞く
早稲田大学 飯 島 隆 史

言の葉を記さむと思ひ目を伏せるその束の間も惜しく思ひぬ

熊本大学 喜津木 司 朗

友どちとかはす言の葉少なければど清き心に触るゝ思ひす

早稲田大学 江 口 博 之

かみしめてかみしめて聞く師の言葉に覚えぬ胸の高まりくるかな

班別討論にてある友の発表の時
岡山大学 宮 本 俊 郎

友どちは何度も首をかしげつゝ己が思ひをたゞ語らむとす

友どちは己が思ひを話さむと話さむとすれど言葉にならずも

うつ向きていちづに思ひめぐらせるみ友の頬に涙こぼるも

熊本大学 伊地知 義 友

床につきまぶた閉ぢればみ友らの顔あざやかにうかびくるなり

東京教育大学 鈴木真治

合宿に来てよかりしと思ふなり直き心の大切さ知りて

ふつつかなる我をも友の一人とし話してくれる友はうれしき

鹿児島大学 小原芳久

友皆と天皇のうたよめば熱き思ひのこみあぐるなり

すめらみこと
班別討論の折明治天皇の御歌を読みて

水田にてなりはひにはげむ民を見てよみたまひたる御歌もありぬ

わが父母も暑きさなかに水田にて雑草とりて励みてゐまさん

青山学院大学 田中美知子

をりにつけこの合宿をかげになりささふる人の心をぞ思ふ

九州大学 二宮五月

合宿で学びしことのもろもろを家に帰りて母に語らむ

全体意見発表の折に

鹿児島大学 橋口隆子

壇上にて思ひしことを訴ふる友の姿に胸の迫りく

西南学院大学 井上淳子

いつのまにか心開きて語りをる我に気づきてうれしかりけり

福岡教育大学 志波由美子

語り終へ涙ぐみたる友どちの深き思ひに胸あつくなりぬ

西南学院大学 黒瀬京子
いつの日かともに語らむけふのこと素直な心忘るゝことなく

福岡教育大学 品川順子
後輩の壇上に向かひて走る様を見ては自づと涙の出づる

壇上のマイクに向かひ声震はせ学び来りてよかりしと言ふ
学び舎やに帰りゆきなば諸共に学ばむ日本の母やまとの心を

日本女子大学 藤田恵津子
わかるだけたゞそれだけを信ぜよとふ友の言葉に心なごみぬ

国際経済大学 関根吉晴
国思ふチベットの友の声聞きて我が身省み恥づかしきかな

熊本大学 田之上正明
今はたゞ兄らに願ふはモラルサポートてふ君の言葉の力強しも

広島大学 一場茂雄
早口で思ひを語るチベットの友の言葉は胸に迫れり

九州大学 広木寧
己が死をもいとはじと言ひしべマ兄の雄々しき姿にまたふれたしと思ふ

夜の集ひにペマ・キャルボ兄の歌を聞きて

鹿兒島大学 村田研史

集ひこし友らとともに君もまた一時間あまり歌に興ずる

母国語で高らかに歌ふ友どちの顔にしばしの笑み浮かび来る

○

早稲田大学 田中千晴

行き通ふ見知らぬ下山の人々に友のかけたる声は澄みたり

かけられし声に答ふる人々の返す言葉もすがしく聞ゆ

友達と声かけ合ひて登りたる頂あたりの風はすがしも

東京工業大学 大町憲朗

あと一步あと一步と気負へども小岩くづれて足のすすまざ

九州大学 十時一郎

山道を汗をふきつゝ登り行けば尾根吹き渡る風心地よし

早稲田大学 大益弘太郎

高千穂にさへづりわたるうぐひすの清らかなる声に夏を忘れつ

鹿兒島大学 野田克博

友どちらにはげまされつゝ足もとの赤き岩見つつ登りゆくなり

山頂はあと一息とふ友どちの声にはげまされ急斜を登る
九州大学医療 森田仁士

頂ゆ登り来し尾根見下せば登りくる人蟻のごと見ゆ
島根大学 小鷲栄一

高千穂の山に登りて思ひ出づ古事記にて読みしたけき神々
九州大学 矢山利彦

頂を友の背越しに見上げつゝ高千穂の山ふみしめ登る
西南学院大学 林常彦

ながれゆく雲の切れめにかいまみる里の景色のうつくしかりけり
京都大学 石橋広樹

友どちの励ます声に力わき齒を食ひしばり後に続けり
鹿児島経済大学 宇都修一

頂ゆ眼下見ればたちこめし霧の間に遠き町みゆ
東海大学 渡辺卯雄

進まむと足踏みしむれば踏むまゝにもろくくづれぬ火山灰土は
東京大学 小柳志乃夫

前を行く人の足場をたどりつつ赤ちゃけし路のぼりゆくなり

見上ぐれば頂き未だはるか遠く道行く人の列はつゞけり
はるかなる頂きめざし休まじと疲れし足をさらに急がす

山形大学

武田隆一

疲れ果てたどりつきたる山頂に笑顔で友は我を迎へぬ

鹿児島大学

栗原淳子

火口より吹き上り来し白き霧我が足もとを流れゆくなり

聖心女子大学

村島家子

中岳を下る山道うぐひすの清き声聞き我はうれしき

西南学院大学

溝上真理子

かたで息しつつ登りし山の道友のゑがほにはげまされつつ

熊本女子短期大学

鈴木みち子

つまづきて岩かげにみる白花に心ひかれてまた登るなり

西南学院大学

丸山伸子

見も知らぬ人と交せしひとことに疲れし足も軽くなりゆく

九州大学

竹島鈴子

岩場にて手をさしのべて助け給ふ見知らぬ友のやさしさうれし

熊本県日奈久小学校教諭

山口直人

頂きは未だ遠きに息きれて足すゝまぬをもどかしく思ふ

高千穂の赤き斜面を登りつつ頂き見れば雲のたなびく
八代市立第一中学校教諭 成田 栄一

溶岩の赤肌さらす急坂を吐く息荒く友と登りぬ
熊本市立城西小学校教諭 満崎 安

別れの前夜に

別れ惜しみ友どちと共に語らへばいつしか夜はふけにけるかな
早稲田大学 渡辺 昭

五日間共に学びしみ友らと別るゝ時の今せまりくる
九州大学 桑野 博行

四日前自己紹介をせし時の友らの顔の思ひ出さるゝ
別れてもお互ひの場でそれぞれに力尽くして生きてゆかなむ

合宿の終り近くになるにつれしみぐと見る友どちの顔
九州大学 伊東 尚規

真剣に語り合ひたる友どちとけふ別れゆくなごりつきずも
西南学院大学 中牟田 義裕

せまりくる別れに友と交したき言葉もいでこず胸のつまりて
東京農業大学 中満 義之

閉会式にて

九州大学

宝 辺

矢太郎

こみあぐる思ひいだきて君が代を歌ひたる友の声の雄々しき
力一杯歌はんと思へどこみあぐる涙に声のつまりゆきけり

○

亜細亜大学教授

夜 久

正 雄

目さむれば青みわたれる明け空に月かゞやける霧島の宿

銚杉の向ひの丘に流れゆく朝雲きよし朱に光りて

見渡せば遠き国原に朝雲のたゞよふ見えて神代のごとし

高千穂の峯の山道に点々と白き点見ゆ友らなるらむ

中岳の頂きに見る高千穂の峯はいよいよ神さびて見ゆ

高千穂の頂おほふ雨雲に馬の背を行く友らいかならむ

夕日かけ錦江湾にけぶりつゝ桜島山ほのかにかすむ

合宿地に向ふ朝、車中にて

宝辺商店(株)社長

宝 辺

正 久

目さむれば日もまだ出でぬ朝空に雲高くあり日向の国は

空の上は冷たくもあらむ雪の如くうすれ流るゝ雲高くして

日向灘の夜のうしほのとどろきをうたひし友を思ふはるけく

海鳴りは聞こえずあれど東ゆ今し大き日昇らむとす

こんや別館代表取締役

青 砥 宏 一

ほのぼのと夜のあけそむる霧島の空に輝く望の月はも

暁の空に雲なく中天に輝きわたる月の影はも

まんまるの月をし見れば繁二郎の描きし月の思ほゆるかも

あたり早ややゝ明るみて緑こき山になきそむかなかな蟬は

霧島はうまき里かも夜明け前ふとんの中も肌寒くして

ほこ杉のほなみのかなた鹿兒島の街の辺りかともしかゞやく

夜はいまだしかと明けぬを今しばしねむらなと思へど夢はさめつも

このながめ友に見せむをつかれ伏す姿し見れば起しかねつも

福岡教育大学助教授

山 田 輝 彦

高千穂のくしふる峯とみ祖らがたたへし山かこれのみ山は

神さびて天そゝり立つ火の山の山肌雲のかけしるく見ゆ

み祖らが国つくらしし日のままに真白に霧らへる薩摩連山

友どちと語りつゝゆく高原にこむるしじまよ秋近きらし

熊本市役所総務局長

徳 永 正 己

奪はれし祖国を偲ぶ言の葉のいたましきかな西蔵の友

えみし等に奪はれし国を興さむと誓ふ言葉に胸せまり来る

高千穂頂上にて平田氏を迎ふ

福岡県立宇美商業高校教諭

小林 国 男

頂上の憩すませて平田氏の姿さがせど見当らざりき

六十の齡を越えし身にあればまだ着かざらむと下を見やりき

ほどもなくうす霧の中ひとりして登りつきたる姿見えにき

かけよりて声をかくれば人様に迷惑かけずに登りしといふ

高千穂の御降臨の跡たづねきて心のつとめはたせしといふ

高千穂のごしき道をひとすぢの思ひこめつつのぼりこし君

鹿児島大学教授

川 井 修 治

足の痛み堪へに堪へつつ息せきてたどりつきたり頂の辺に

声あげてわれを迎ふる若きらのゑまひを見れば痛み忘るも

わがためにサイダー買ひてすゝめくるゝ友のなさけの身にしみるかな

にぎ／＼しき若き友らに囲まれてうつしゑとりぬ満ち足るおもひに

電源開発㈱所長代理

長 内 俊 平

三年ごし思ひやりつゝかなはざりしわが合宿に今日来つるかな

葵咲くえぞ地ゆはるばるたどり来てむくげ眼にしむ薩摩国原

三年ぶりに長内先生にお会ひして

富山工業高等学校教諭

岸 本

弘

大きなからだ面輪にかはらざるやさしきまなこに今まみえたり
のどもとにこみあぐる思ひ言の葉にならずそのまゝ師を見つめたり
師も吾にただうなづきて幾度かやさしく肩をたゝきたまへり

事務局・最高裁判所秘書課

西 川 伍 朔

旅人を迎ふるごとく霧島のカンナ道沿ひに列をなし咲く
十余年前^{かは}渝らぬ想ひ今年また録音機肩に坂登りゆく

あ　と　が　き

合宿教室がはじめられてから二十年の月日が流れた。昭和三十一年霧島で行はれた第一回の合宿のレポートは「混迷の時代に指標を求めて」と題したが、日本民族は今に至るまで混迷の雲ははれる時なく、閉された視野が濶然として開かれるやうな民族的体験も、全体的な感激も得られないままにこの二十年の月日を過したと言っても過言ではない。この鬱々として閉された時代の壁をつき崩し、真実のいのちを蘇らしめる道は何か。「日本への回帰」といふ題名はその課題に対する唯一の回答であらう。

だが「日本への回帰」とは言ふが、それは単なるスローガンとして掲げるべきものではあるまい。伝統に帰らうとか、日本を愛しようとかいふかけこゑの中には、「日本」は決してその姿を現はさないものであって、回帰すべき「日本」は、これまで日本を守り育ててきた祖先の生き方の一つ一つに、こまやかに心を馳せる時に、はじめて私達の目に映じてくるのである。従って「日本への回帰」とは、祖先の業績に対する憶念の情意をたしかめるといふ、心の準備をととのへる作業と不欠分の関係に立つものでなければならぬ。毎年営まれてきた合宿教室はそのやうな意味で、イデオロギッシュな討論や講義の場ではなく、日本のいのちに回帰するため、一人一人の心の姿勢をととのへあふ場所であった。そのやうな意味で、この合宿レポートをお読みいただければ幸甚である。

本書の講義要旨のタイトル頁に掲載した写真は、最近朝日新聞社から「裝飾台壇」の写真集を出版界斯の注目を浴びてゐる榊晃弘氏（テレビ西日本勤務）の撮影になるものである。氏の御厚意に対して紙面をかりて衷心からの謝意を表したい。

○

今年度の夏季大合宿は八月七日から十一日迄四泊五日、阿蘇国立公園のホテル「阿蘇の司」で開催されるが、講師には前年にひきつづき、世界経済調査会理事長木内信胤先生と、昭和四十一年以来十年ぶりに文芸評論家福田恆存先生をお迎へ出来ることが確定した。六月十日から受付を開始するが、参加希望者は、七月十日までに東京都中央区銀座七の十の十八、柳瀬ビル内、社団法人国民文化研究会あてに申し込んでいたきたい。日本の前途を憂へる、志ある学生青年諸君の御参加を心からお待ちしたいと思ふ。

昭和五十年三月十日

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A 5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円 二四〇円
憂国の 光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B 6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

No	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
1	古事記のいのち ―改訂版―	夜久 正雄	四一・三・二五 (原 版) 四八・一・一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 二二〇円
2	日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原 暁一	四一・一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

11	10	9	8	7	6	5	4	3
続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—	欧米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—	歴史と人生観 —マルクス主義の超克—	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁 一	小田村寅二郎編	川井 修 治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚 一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 —二五円	〒六〇〇円 —二五円	〒四〇〇円 —二五円	〒四二〇円 —二五円	〒四二〇円 —二五円	〒三二〇円 —二五円	〒三二〇円 —二五円	非売品

12	短歌のすすめ	山夜田久輝彦	四六・四・一	三〇九頁	〒五〇〇円 一二五円
13	短歌のあゆみ ―続「短歌のすすめ」―	山夜田久輝彦	四六・二二・一	三二六頁	〒三五〇円 二二五円
14	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	桑原暁一編	四八・二・一〇	三二八頁	〒五〇〇円 二二五円
15	白村江の戦 ―七世紀・東アジアの動乱―	夜久正雄	四九・一・一〇	二八九頁	〒五〇〇円 二二五円
16	国史の地熱 ―聖徳太子と橘氏の精神―	桑原暁一	四九・一〇・二五	二七九頁	非売品

C 「合宿教室」レポート

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
1	霧島 (九二名)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・目下藤吾 夜久正雄	A5判 八八頁	一五〇円
2	福岡 (一二七名)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5判 五三頁	五〇円

10	9	8	7	6	5	4	3	2
別府・城島 (二一五名)	桜島 (二〇二名)	雲仙 (二〇二名)	阿蘇 (二一五名)	雲仙 (二〇八名)	雲仙 (二〇〇名)	阿蘇 (一六〇名)	佐賀 (七二名)	岡山
40	39	38	37	36	35	34	33	32
日本への回帰 — 第一集 —	新しい学風を興すために — 第三集 —	新しい学風を興すために — 第二集 —	新しい学風を興すために — 第一集 —	続々 国民同胞感の探求	続々 国民同胞感の探求	国民同胞感の探求	民族の明日を求めて	民族復興の根底を培うもの
岡内 信胤	小林 信胤	竹山 道雄	福田 一恒	津下 正章	木内 信胤	野口 恒樹	勝部 真長	高木 尚一
潔・花見 達二	雄・広田 洋二	雄・木内 信胤	存・木内 信胤	雄・木内 信胤	花田大五郎 花田大五郎	中山 優	木下 彪	彪・石村暢五郎
新書判 二九五頁	新書判 二九八頁	新書判 二九八頁	新書判 二四八頁	B6判 三二五頁	B6判 四三三頁	B6判 三六五頁	新書判 二五〇頁	新書判 一三三頁
三〇〇円 二二五円	三〇〇円 二一五円	三〇〇円 二一五円	二〇〇円 二一五円	五〇〇円 一一〇円	五六〇円 一一〇円	五〇〇円 一一〇円	二〇〇円	一〇〇円

18	17	16	15	14	13	12	11
雲 (四三三名) 仙	阿 (四〇二名) 蘇	霧 (三〇二名) 島	雲 (四九一名) 仙	阿 (四〇三名) 蘇	霧 (三五三名) 島	阿 (三三六名) 蘇	雲 (二四〇名) 仙
48	47	46	45	44	43	42	41
日本への回帰 ―第九集―	日本への回帰 ―第八集―	日本への回帰 ―第七集―	日本への回帰 ―第六集―	日本への回帰 ―第五集―	日本への回帰 ―第四集―	日本への回帰 ―第三集―	日本への回帰 ―第二集―
木内 信胤・村松 剛	木内 山本 信胤・胡 勝市・蘭 成	木内 村松 信胤・戸田 剛・義雄	小林 秀雄・木内 信胤	岡下 道雄・木内 深・信胤	竹山 木内 道雄・高谷 信胤・覚蔵	林内 房雄・太田 信胤・山本 耕造・勝市	福田 戸川 恆存・木内 尚・信胤
新書判 二八九頁	新書判 三〇六頁	新書判 三二二頁	新書判 二六五頁	新書判 二九五頁	新書判 三三四頁	新書判 三〇七頁	新書判 三二〇頁
〒五〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円	〒三〇〇円 二二五円

(国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行)

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
第十回 「合宿教室」参加者感想文集 三二五名	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5判 八〇頁
第十一回 「合宿教室」参加者感想文集 二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5判 一〇四頁
第十二回 「合宿教室」参加者感想文集 三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5判 一二〇頁
第十三回 「合宿教室」参加者感想文集 三五三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5判 一三八頁
第十四回 「合宿教室」参加者感想文集 四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回 「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘— 四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁
第十六回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁

第十七回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁
第十九回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	五二八名	国民文化研究会編	四九・一〇・三〇	A5判 二〇〇頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流（日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	川井 修治 田 収二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価

歌よみに与ふる書・他四編

正岡子規
(国民文化研究会発行)

新書判
一二二頁

一五〇円
一五五円

天皇と天皇制についての基本的思考

小田村寅二郎・夜久正雄
(斑鳩会発行)

新書判
一〇七頁

(品切)

今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論

三井甲之
(斑鳩会発行)

新書判
一五七頁

二三〇円
二七〇円

明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」

(斑鳩会発行)

新書判
八五頁

二三〇円
二七〇円

式典曲「神州不滅」
行進曲「進めこのみち」

三井甲之
信時潔
—日本学生協会の歌—
作曲詞

A5判
各四頁

各一〇〇円
各五〇円

G 関係図書

書名

著者・発行者

版・頁数

定価

新輯 日本思想の系譜(上・下)

—文献資料集—

小田村寅二郎編
(時事通信社)

A5判
(上)八五七頁
(下)九一二頁

上・下各
三、〇〇〇円

日本思想の源流

—歴代天皇を中心に—

小田村寅二郎
(日本教文社)

四六判
三〇五頁

七〇〇円

THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (國文叢書 No. 1 「古事記」の編訳) 歴代天皇の御歌 —初代から今上陛下まで二千首—	(訳者) G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]	B 6 二〇八頁	一、七〇〇円 千一四〇〇円
--	---	----------------	------------------

H 月刊誌

誌名	創刊・号数	版・頁数	定価
月刊 「国民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十年三月現在 一六一号	B 5 八頁判	年間七〇〇円 千共

I (分科会)・教育内容は正促進委員会編著

書名	発行年	版・頁数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B 5判・二五頁

— 日本への回帰 —

(第 10 集)

昭和五十年三月二十九日発行

定価 五〇〇円

〒二〇〇円

編 者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小 田 村 寅 一 郎

発 行 所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

